

物語 全
休 諸 國

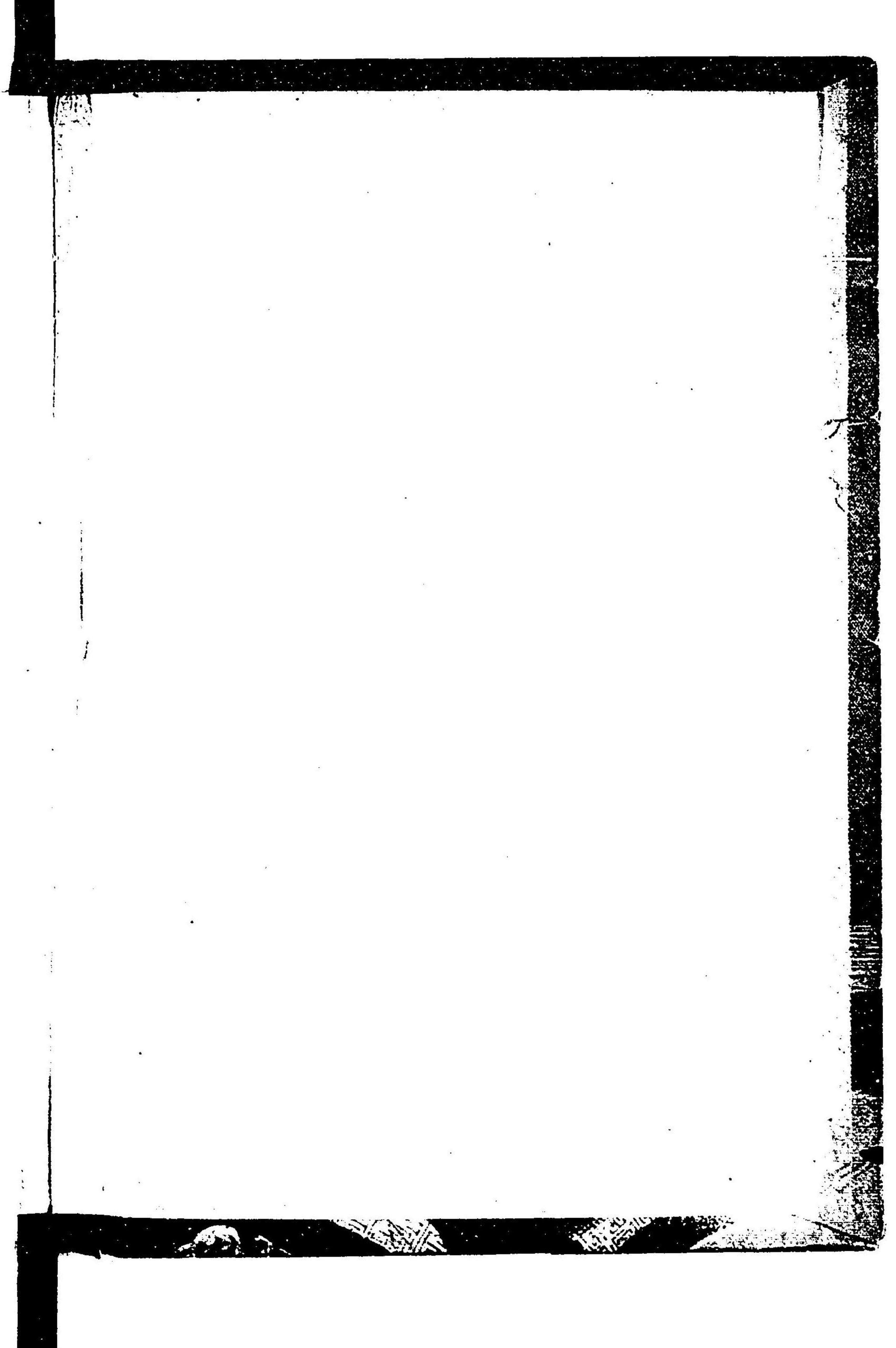
163

106



繪

東京
金松堂發行



ろれ一休和尚は後小松院の二の宮にてましませり世の人の耳に懸れ
 る御歌にも後の小松の三葉と詠し玉ふも有けるとや賦にいと賢
 くまし〜尊き高位とふみちらし大内とかどり出て十宗とた一目
 ばにらみつけ建た〜となゆ玉ひて九年面壁と盗人のあどの様ちきり
 木と見立て御身は〜のらほと共思しめさす浮世とひやうたんよりも
 ありく持なしよ〜まなるととさらはせ玉ひ御心は歳や竹と二つに
 めりたる如く諸人の口碑にあれば舌の先の障とし侍ると仰られしは
 いよ〜有のた〜ける御幼年の頃より才智英人にすぐれさせたま
 ひて諸國御雲水の御より諸人と導きたまひます〜御一代濟度の御
 意のみに渡らせ玉ふ事の剛しのふるき文どもの多きと見るにつけ聞
 につけ拾ひ集めて諸國物語とはなしけるとや

止 水 敬 白

○和尙若年わしやうじやうねんにおはせしより才智衆に勝れよく人と導玉ふ或人問ていわく何に小僧るれ地獄極楽と申事ありげに候しのしるがら死後ならでは證據あらずし承はるさもありぬべし若人ありて惡事となせば死て三途の大河死出の山あらずいふ難所と越てやうく地獄に入と申なりさて又極樂淨土と申は是より十萬億土と申せば遙の道と經て參るとなれば我等がやうある不違者ものは極樂の申はさてかき地とくへも行がたらるべし此儀いらひ一休とたへて夫地獄遠きにあらず眼前の境界無鬼外になし淨土といふは爰とさる事遠のらずとのたまへば此の者申やういやく左様に目の前又地獄とくらくありとのたまふとも顯はれて見へねば合點ゆのす小法師の分としては委しくめし玉ふ事成まじとあさ笑ふてぞ申ける一休腹とたて扱は其方は我と若年ものとあるとり給ふとて願て一休總ともちて後るへまはりの者の首に引のけ思ふさまにしめ付なんぢ是はいらにと申さるとき此もの合點して尤これ地獄なり其ときまた總とと給ひて汝らくあるときはいらんと云給へば淨土なりと答へ其ま合點してさてもく小法師は何のわきまへも有まじさやうにあもひあなせりしに幼稚なれどものくのとく智恵ある事わたくしならぬ事とぞのんじける一

○一休十一歳のときの事なりしが師の房他行したまひける留主の處へ余所より餅一ツきたりければ一休とし割て師匠のあり給ふに取出して奉る師らたうけ人にて滿月無片殿問は何地にあるとのたまへば一休そのころより智恵さのしくましませば直ちに返答に雲隠有是とて

の間と出されける此心は滿月は丸くみちてのけたる處なし此餅も滿月の如くまん丸にてあるべきにのけたとはいらにと問ひたまへば雲に隠れてこゝに有とこたへたる也師うち笑ひてさても小賢さ小僧のなどて彼餅とみなたび給ひけるとなり

○一休御諱と宗純と申せしが別號と一休と名付たまひける或人さたりて一休名付給ふ御心はいらなる御心得にて侍るやと尋ねければよくこそたづねめされけるさらなら一休によるき心もあらざらばのたりて聞すへきやうもなしとてのく

有漏路より無漏路への一休

と遊しければ彼ものさして扱もあもしるさふる御歌や有漏無漏とはいらなる事にておはしけるぞと尋ねればうばある御拂子ととつて彼者の顔とあでたまへばいや何事とらなさるとれぞらさたるばかりにて何とも心得ずとや一休の曰その何とも心得ぬところが無漏路ありはづとおぼろさし處が有漏路なりと仰られれば彼俗所と冷じて有がたや即時に大事とさづのるけるとよろこびて扱御歌の一やとみとは心得ず候雨ふらはふれ風吹ばふけとは何なる御心にて侍りけるぞさればよねづの道のことなれば雨も風もいとふ事侍らすと仰られれば扱も有がたき御歌のあらせるがら只今さづのり申せし心と一首申てあんと申ければ夫はききくなる心ざしやとのたまへばのものよめるは

うろまむるじ一休ととくときは
十萬億土とんささとしる

と仕りければ一休さとしめし善哉くとして所解ついでよるこび玉ひてのる例しもろこしにも侍りし事を四休居士といふ人ありけるお山谷といふ人その四休の心と問ければ四休わらひて答ていわく

三平の二満過即休 補戒進善睡即休
不貪不妬老即休

と申されければ山谷がいはいく非安樂の法なりうれよく少ときは不伐の家なり足る事とするは梅樂の國ありと感じてしたしく語りて四休の心と得三首につくりうたひ樂しみしとのや其一首に

富貴何時潤二滿 守錢奴與二抱官一四
大醫診得人間病 安樂延年壽事休

と有りしにより似たり一休の心とひて今其方の歌よむ事よと感じたまへば彼人申せやう一休の二字とたづねて四休の四字としる事求めずして得と幸と註したりこれ幸なりとよるこびけるがのの四休のうち三平二満とはいのなる事やらんと申ければ其方の内方よとのたまへば合點まいらす見にくきといふ心のといへばいやさにあらずおとせのどるまとのたまへば扱もめづらしさとのみ誠は三平の兩の類と異二満は類と異よさてもおもしる事也さりあから女どもに聞せむば一休さまとつめり申べしとわらひて歸りける

○和尚幼稚さときより常の人にはのはりたまひて利根發明なりけるとのや師の坊とは養叟和尚と申けるこびたる且那ありて常にきたりて師の坊に參學なせし侍りては一休の發明なるを感

芝折くはたはむれとて問答をせしけり或ときこの且那皮袴と若て來りけると一休門外にてちらと見て内へはしり入べきに侍付立ちられけるは

一此寺の内へのはのたぐひのたぐきんせいなり若皮の物入るときは其身にのならずばちあたるべし

と書付て置たりとの且那これと見て皮のたぐひあはちあたるならば此寺の太鼓は何とし給ふぞと申ける一休聞たまひさればとよ夜達三度づばちあたる間其方へも太鼓のばちとあて申さん皮のはのまときられけるはせけとおどあられけるそのうちこの且那養叟和尚に齋よふとて一休も御供にとやしかの返報せばやとたくみけるが入口の門のまへに橋ある家なりければ橋のつめに高札とよなにて太く書てたてける

此はしわたるものたぐきんせいなり

と書付ける養叟和尚齋のしよしよとして一休とめしての人のたへ御出あるに橋の札と御覽きて此はしわたらでは内へ入べき道あし一休いのにも有ければいや此はしわたるものみにて仕たればまん中と御渡あれとて真中と通り内に入たまへばの者出合て禁制の札と見ながらいで橋とわたり給ふそとどがめければいや我は齋はわたらず真中とわたりけるぞと仰られければ亭主も口とどちけるが何かな不審申さむとて又いわく凡沙門の形といつば忍辱二躰の衣と着罪障さんげの袈裟とつけてこそ僧とは申べければいに小僧なりとて俗衣出たち心得るなく候と申せば一休幼ければ歌一首とよみて答へらる

若てきたぞ本來空のくる衣

そでるがうらで人こそしらね

い六

とよみ玉へば旦那も養身も手とうち口とわひて寒きおねられけるどあり授御齋と出しけるが
今一度不審せばやとれもひ一休にはわざと魚類の膳とぞへけるめづらしくやとほじけひひた
もの喰ひ玉ふとさに旦那のいへるは人しれぬ衣めしたる御僧のしたる魚とまゐることよと
たわひれければ一休聞たまひて口は鎌倉海邊なれば貴きも行さいやしきもまぐとのたまへり
こらへのねるる物もど何り候哉と刀とそらりとぬきけると一休亦せしむさわがす敵の味方
ると問ふ敵也といふしおらば通す事ならずいや見のたなきといへば其まへへんくとのた
まひてくせものはとほるとて只今俄に關がぞはりたるはといひ玉へば旦那も和尚も此小僧の
口みはのたれましとて言葉なく舌の根とふるひてやみぬ

○十七歳の御とき引導し玉人或とき下賀茂邊と通りたるも折ふし途中に死人あり一休たちより
引導とさすけ玉ふとさみ或人見て愚のなり小僧死人にひのつて何事といふたりとも耳に入ら
きやいゝんといふ一休答へていはく芭蕉無耳雷之音聞則自出と此文のこゝろは夫はせよとい
ふものは耳もなく目もなければ芽と出さんともふときは雷の音と耳て則芽といだそ
となり斯のどくの非情艸木のたぐひまでも因縁加合のことわりありいはんや人間にといて
とや彼是もつて同事あると返答したまへばこのもの實もともひけん一言の答へにも及ばず
立さりけり

可笑記曰達十大師のあしの葉に乗り佛の遺とるたる紫野の一休和尚はの世法講とろしらす
興がるおどけとなして釋迦としのり玉ふも助んための本心こゝに懸川新左衛門親當といふ

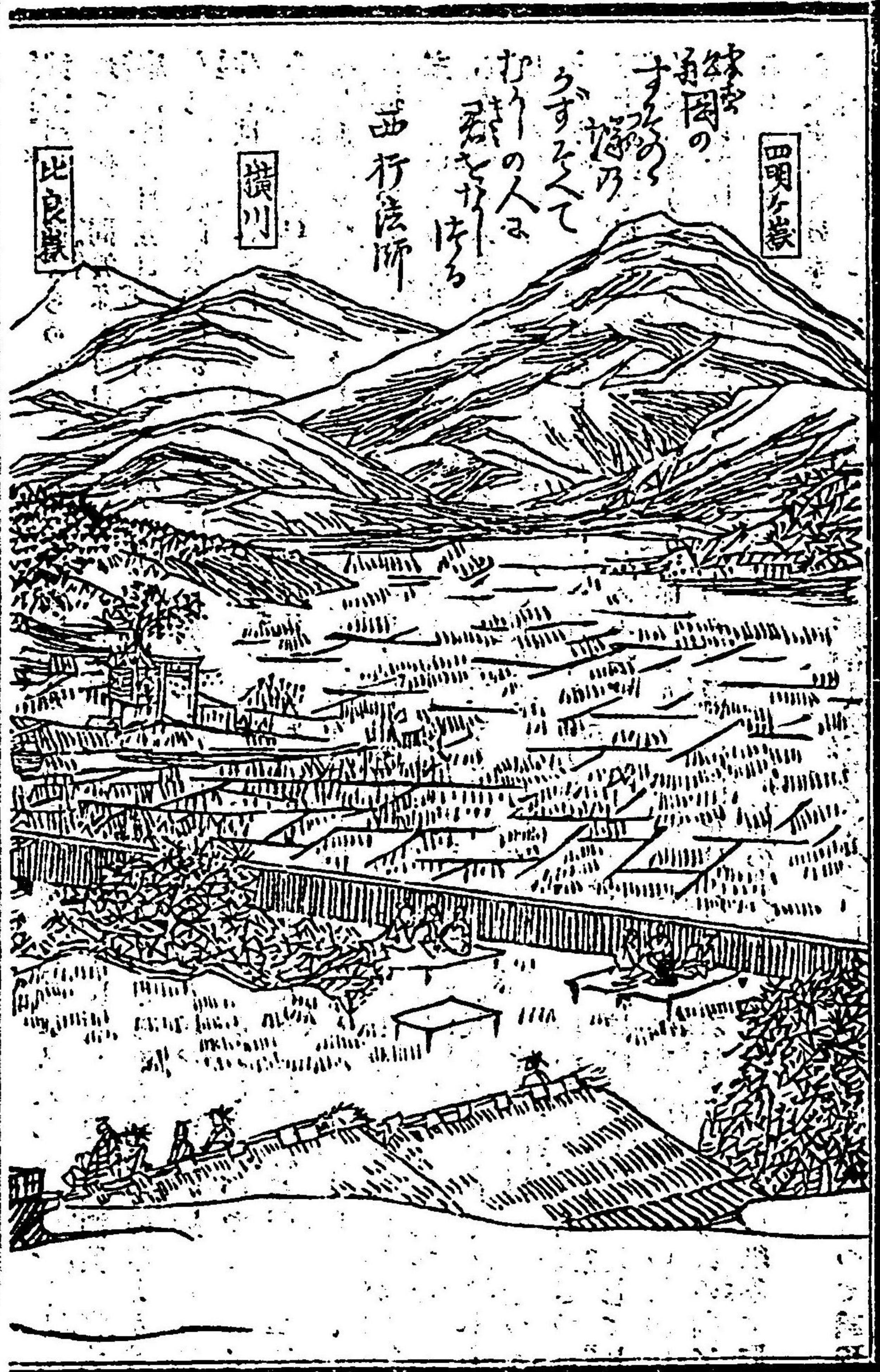
武士弓馬の遠くらのらず殊お佛道は祖師祖宗とまなびて座禪の床に入れしへの道としり
ねて一休と問答なしけれども終にいひ得そ秋の夜長きつれく友とらたらひ酒興し實大
唐には五月五日橋と酒に入て飲めば老せそといひて賞飯をる由さもあらむ先身の年より若
く見ゆるは此水の徳ありといふに同じ氷鳥一座の中に三十ばのりにたらぬ男白髪まじりに
生しはいのにと問へば口をしこき男酒とのまねば腰がふたへになる善なりとのたまへばこ
そ霜のみふれとへらす口のまなき盆中場は紫野一休わん内しきたりて是はれき所へどかさ
へぬ盆三ツつゞけてはしさらは慮外としたむととる懸川よき不審と一滴七十粒そもさん
の捨る事いゝん一休こたへて法界に手向く懸川また法界がのむべしや一休また法界が飲ま
るさといふのと答へしにつまりそれはしらすと閉口して大笑になり肴にこのけたれども淨
るり小歌もふるめりし今の問答のよのしきにまのせ善惡五戒の講尺せひにどのぞみこれの
はつた精進さのな音曲と無理に引たて土座になとし高座は火燧のやぐらと取出し行燈つり
上のうべとのたむけはじまるよ待に一休くわんくとしてとも興がる想なるちほさつは
三十三身と現じて其機にしたがひため法と解せたまふ普賢菩薩は江口の遊女と變じて凡
夫にちざりよとめ十羅刹女は太敷女郎となりて貴聖人にまみぬたまふ愚僧はるの菩薩に
はあられざれどもしばしばるのなかれの末と汲て川柳花は紅の色衣はなしすみの衣の袖と
あへすさへげ奉る調師と名付説上る
あへすさへげ奉る調師と名付説上る
夫つらくれもんみれば分段同居の風俗は陰陽ともつてし有爲の掟は夫婦ともつて義理

い七



山崎の
 神田
 女
 人
 読
 人

丸



四
 明
 山
 横
 川
 西
 行
 法
 師

丸

とす鳥に比翼のうたらしひあり木に連埋のちぎりありいはんや人倫にたむてやひそのお
 たもへば容色たよやうにして梨花の露と含むがとく心中あらはにして行水の物に随ふが
 とく天生の美麗世にたぐひなき西施が容貌貴妃が顔色一トたび笑は白の絹あさやうに見
 もの思ひと動のし聞人心とくたきぬらむ春の朝にはうきめさくらの下陰にたゝすみて三
 味線とひのし秋の夕は幽尊のまがさに立もりとりてなげふしと吟じ翠張紅圍の中には枕
 とならべしさゝめ語紅綺翠黛のほばせ二世のちぎりよ結ぶといへともりきりあるは浮
 世のならばし生者必滅命者常離のかきてなれば一人もとゝまるどのなん紙にこしるたよ
 思へばいたすらにくらし空しく暗とあしくやしめるな悲しい哉今このときによき苗と種
 ずんば何の春のはだいの花よなるめん早く無明の酒の酔狂とさまさんにはしるじと先
 座の小歌と一づめてのぞむところの講談なりまことにこれ希代の發菩提心あげていふにた
 らすこの善根にこたへて現世には長生とし金銀米錢澤山に當來には極樂に往生しだい
 にしてあとばんのみあそ酒宴請中 敬白
 次に經文とひらきて頂き一關子あげて大悲經第三に曰く佛阿難に告てのたまはく若衆生
 あつて涅槃とねがひ求めずといへ共しるも佛のところにかねてもろくの善根と種つれ
 ば我説ところのこの人ならす涅槃と得んといふ
 ○上京に糸屋山右衛門といふ者あり内々一休和尚の答話よきと古今無雙のよし承はりいつぞは
 紫野へまいり何にてもめづらしき事とうけたまはらん左みくば此方へ齋に申入べきとらね
 く思ふ折ふし和尚且那れより歸りたまふに途中にて行合さてく一段の處にて目目の

り候ものな序ながら明日少し志と日にさしあたり候御坊さまへは齋と進じ度候衆御寺
 へ伺公いたし申べきとぞんじ候處幸是にてゆめにあり候 必々と申すば和尚心得申候さ
 ながら宿所はいのんととひたまふとき此人宿は室町通るんじよ其處なりといひてわかれぬ一
 休心得さて翌日早天よりこしらへ彼もの宿と尋ね行玉ふに此者もすこし心あるものにて店
 にちいさき錠とつりて置けり小さきたよ釣たるはこゝろといはん事なりと判し頼てうちに入
 たまふがまた座敷の口に犬のがわと敷たり和尚さしきと通らるゝときに亭主出合さてく今
 日の折ふし路次あしく御太儀の御事なり御足よこれ候はん洗足するらせんと申一休いやく
 只今かはと越へてまゐり候もゑとこしも苦しめらすと仰らるゝに亭主扱こそ早一はいくわさ
 れたりと思ひさて御膳とこしらへ出そ和尚ふたと取て見たまへば何れにも小嫌と一はい入た
 り一体さあらぬ体にてゐたまふ處へ亭主座敷へ出れば一休さてく今日の御志は三七日あて
 候のと仰らるゝに亭主いよく感心しやがし和尚坐と立玉はんとせるとき亭主はなほもこゝ
 ろと引んとて錢百文ととり出しけると今日この布施にまゐらざるなり是へよらずして居ながら
 御請われと申一休さゝもあへす心得申候是まゝにてうけ申べしと候は、扱にこゝへ馬は
 り候へと申されるれば亭主はいよく感心扱を御坊さまはさゝたよびたるよりは答話僧にてま
 しまし凡人はしばらく思案して申出そにいますた舌も引入さるうちに早くも斯く仰よるゝ古今
 まれなる御坊さまやどのんじける
 ○和尚さる川邊と通り玉ふに女のはだのふ成て居けると見たまひ陰門とめざして三度禮拜して
 そきたまふ折ふしありあふ人よ是と見てさてもあの僧は狂氣の出家の身とし女のはだのにな

りたると見て三度ふし拜みせむのる、はいのなる事やらんいふさまにも狂氣なるのさもなく
はるゝる事はし玉ふまじめづらしき事なりいざ近づきて仔細とたづねんげにもつともありと
て我もくどあどとしたいやがて追付ろでと引御坊た、今女のはたへと見て禮拜し玉ふはい
のなる因縁やらん聞まほしく候但し佛道修行にのゝる事やましまそのいゝにくどせめりけ
て問ければ一休うけの事にもおよひ玉はず斯いひとて、過玉ふ

女とば法の御くらといふぞ實

しやのも達摩もひよくと生

といひすて、こゝろ通りたまふいゝなる坊主やらんとふしぎなきにしる人ありてあれこゝろ一休
ありといひし人ありさてこゝろ彼僧ならではのやうのといふべき人ありとも思へず殊勝やな世
の中の坊主ならば女の朋と見たらんに心ちよげあねぢのへりく、目もはあたで行くやらん
く禮拜あして通り玉ふこそ有のたけれ實も女の胎内より貴人高位も出玉ひ諸宗の高僧たちも
出なる、ぞのしと人みな尤とのんじける

授今晚に先夜酒宴談の次ととき申なり講談興起の義は讀誦文にもさこへたとふり酒宴講中
逆修現常安樂のため一つに笑のたねとしてつとむる所の説法講談で侍るある經にもし園
の中林の中もしは白衣の家是中皆應起塔供養とせられてけやうある在家俗籍の白衣の中に
ても一偈にても演説とせるときはたとへはけがらはしき所も則三世の諸佛來迎影現の道場と
いふ物なれば信心と決定して聽聞あるべきことが肝要にて侍る次に愚僧義あんにもしらざる
金坊主ものしりがはに子細らしき事必さやうまんの心と起し玉ふが大惡人じやそれにはな

世おと不審あらん涅槃經には依法不依人と説てろの人にはよらず能所の法によれと教へ玉
ひ成實論には經と引て我意におらずとも各々正理に順するとは聖教とすべしともあり
が衣と着たりとも法の道と説よき所あらはうやまひつゝしんで聞取べしとも釋したとへは
未曾有經像法決疑父母恩重經等と佛説にあらすといへどもはるにして其理佛のほ心に叶
がゆゑに諸の祖師これと用ひて証文とせるとく我等ときもの教化し説法せんときは佛も我
も敬ふやうに沙門と供養せよとのへ玉ひぬれば信心の手前からは慮外ながら某と末世の佛
老やとも思召がよく侍る授た、今披露の經文は訓讀のよく大悲經第三の卷なり惣して經と
講ずるには來意釋名入文利釋なせいとゆさあれども淺學のそれがしるれば萬端さしあひ
てた、經文の表によつて談すべし今の文の意は釋迦如來阿難尊者對して仰らる、やふは
末世の衆生等下根下劣にして直に涅槃にいたるべしとの文でござるが佛のみもと、いふは
釋迦はすでに入滅なり後佛の彌勒はときいまだいたらず何くよさして佛の所とさたむべき
とおもへば文字はこれ法身の氣命といひて遠らすこの金句の説法と一たびさ、てながく
わそれぬ阿難尊者如來滅後獅子の座にのぼり一代の法藏と結集し一千の阿羅漢これと具
多羅葉にしるすはすこしも佛説にたがはずこのとき大衆ふたつうのたがひとなして如來の
さねて世は出玉へるやまた阿難今爰で佛と成玉ふると偈よもつて讚したるところの經は義
とさばめ理と詮め生と度し物と化す中にも大悲經別してしゆしやう千萬あり此等の文義と談
する此處が則三乘開會の卽世道場まつたく諸佛來現の所といふものなり實より涅槃とは求
めざれとも座興にらおせけにも名利にもうるにも佛語論談とさく心が其ま、善根と種ると

いふものあれば佛説にいつはりなく未來成佛は歴然の同理なりさて逆修は七分の善徳まつ
たく得て現世安穩のあしたには榮花のはるとうたひ命期臨終の夕には法性の月と詠せん事
はうたがひもなき經論の旨にてござるほどに頼もしくおもひたまひてねがはくは眞實は淫
樂どもども玉ひて一遍のなむあみだなむ法花となへ玉は、往生成佛は決定でござるまづ
これで經の句はさらりと聞へましたア、ねむけが出たぞよ

○下立賣堀川邊に道意と申ものありあるとき一休と齋に申人よろづはなし終て道意申されける
は和尚さま某は娘一人もちて候がさんぬる春の頃隣町へ縁に付申候がや、もそれは姑との
らのひて歸り候親の身に候へばなんやういやくにぞん志色々異見申てわのへし候と度々に
および候和尚さまお智者にたまはせませばおもしろき因縁はなし候は、そと御物語さのせたま
へらしよく覺おき娘の諫言のため申聞せなばすこしわ聞入とも侍らん和尚さま、玉ひるれがし
一とせ修行のわきり關東にての事なりしに是わ姑女にあしくわたる女なるがたちまち其むく
ひ歴然たりし事あら、のたり申さん下野にての事なりしがしうとめ久しく病みてなやみけ
ると其子深くあげきて醫師とよび療治しけれどもさらしに驗なく日と送りけるがあるときいし
や申やう此病にわふたのさもと養てあたへなば忽ち本腹あるべしといふさらばとてふたのさ
もと求め是とよく、養て母にすゝめよとて妻にわたしてその身わ他行しける此妻つねく
姑とにくみ老病の事なればせんあき薬ぐひるりと思ひける折節の孫娘子とみければ其女
なと密にとりてよく養て、姑に勤めふたの肝わのくしておのが薬ぐひにぞなしたりける程な
く赤いろなる蛇のよめの口へ飛入ける尾四五寸ほど口より外へ残りけりるの娘なきさげび

もだへぬる事いふば有りなしまことに奇代ふしぎの事なれば聞傳へ見物の人とはくあつまりけ
るが老たる人の見るとさわ尾とうさす若きもの、見けるとさわ此蛇尾と右左り上下へう
このし女の顔とたゝさけるころおろろしけれある人釘ぬきと以て蛇とはさみ引ぬらんとしけ
れども尾のたきと黒がねの如くにて奥へわ入といへどもそこしも口へわ出さりけりるの
とく悩む事三日にしてつるにむはなしく成にけりこれといふもつねく、姑にあしくあたり
しむくひれり、姑の口へ入れまじき胎衣とぞ、め我口へくふまじきふたのさもとぬそみくひ
ける惡逆によつておろのくとく口へわいるまじき蛇の飛入ける事天罰なりおたちに影のしたか
ふとくおろろしき事なりけりたまりたまへば夫婦どもお手とらつてあら恐ろしやとのんじ
ける道意またやけるわ和尚さまそれがし此ころわたらしき就屏風とこしらへ申候これわむす
めが方へねくり申心得にて候何にても一筆あそばし下されと申すに一休やすき事なりとて筆
とりよせ

萬一人事一口ひやく惣而壁に耳岩ふ口、姑夫唯、主かやとあふぐのみ
我男けにたいせつにれもひなば

なせしうとめの見にくるべき
むねの火のもえたつときの有ならば

このやうに書てたびけり此屏風今に傳り侍るとぞ
さて前夜の講談申せし文中に淫樂といふは天竺の詞ありて、お滅度と斷して空寂の理に歸

とる旨なれどもたゞ成佛至極の處を覺へたまへこれ經の中の要は然も佛の所にかゝるて善根
と種つればと説種るといふ文字が法壁にかなふ聞所にて侍れば耳のたひけて講談と聞た
まふべし此種の字はらゐるともたねども草ども讀てたとへば草木のたねの如く瓜とゆれ
ば瓜と得豆と取にも同じ事善種とまけばよき果ととる因果ともいへり世間には仕合のよ
いとは果報といひよるしゐらざる因果といふは誤りなり因果も果報もみなひくひといふ
心にて文字に善惡の差別はあけれどもやうある誤りは世にあまたみて侍る弘明集お續齊
の惡は劫と塵どもはろびや毫厘の善は世にも滅せずとて微塵髪すぢはせの因果も果ならず
といふとなければありあも惡事のたねとてほとべらざる生へきは決定にて侍るされば法范
珠林に經を引てみはく愚癡の人因果としらそみだりに邪見を起し三寶四諦もなく禍もなく
福もなく善もなく惡もなく衆生の業因もなく惡果も無とのたるものは決定して阿鼻地とく
に落べしといふ文にてござるはせに何れもたしあみ玉ひて因果撥無して佛法といふものは
あいものじやなと垣やふりたる事はかまへていはしやり升るされ共今ときの人多くひが
みて地獄も極樂もありとは聞て見てくるものなしたまへ見るはあつりに紫の雲と空より
糸にて釣下し箱の光とはなつ佛弘誓の舟に二十五の菩薩一度に尺八とよき三味線とひめて
つらふは上手にてまたかほし鬼といふも虎の皮のふんせししたるが濃たる角とより立しく
わいらいしの弄ひがたろろしるものよいらげんなる事と佛もたくまれて子どもたらしのた
はむれと仕出し玉ひけらよといふ者もありいや／＼何らしの法園は地獄に行て有し皇の苦
痛と見たてまつりて歸り唐土の僧も奈落のくるしみとあもひ出して日に三度血のみだ流

そとも書こしたるはといへばうそつきの末弟どもがいふ事あれば何と證據にそべしなとあ
さける人こそ淺ましけれ同じ論に曰無にかちて因果と問する者はたとひ萬牛挽とも永劫地
ぞくの門と出じと書て是とのなしみ給ひてこそ三世の諸佛も十方の如來も世々番々に出世
し給ひ此まごひとやめさせ一切衆生我ごとく一佛來道ならしめんと五十年のあひだ聲と
して説法教化したまひけさ仆に心得るは惡の中の極惡あればまことに那羅延力の牛のあすも
惡趣と引出る事はあたるべし此等の人のあつる所の地とくはくげんやうくるに間なき
がもゑに無間地獄と名作る其跡往生要集因果經等につぶさにあれと只今申事にかよひ
ませぬ何といたまじひ事では侍らぬ惡僧などはまづいやでござりまを愛に一つのふしき
がこれあり自問自答して聞せ申さんさりながら御退屈でござらふ一ぶく致さふ
○一休人と殺そものに證據とひき得道させたまふ事ありこゝに早川治郎太夫と申もの和尚のも
とへ行申さるゝはそれ人ところすに其理もつともならば千萬人と殺ともくるしゐるや又殺
まじき其理なくば一人なりとて惡逆無道なるべしと申けるとは和尚仰られけるはそれ殺生は
もろくの罪の根本ありたとひ生る物にといはのみ氣にてもころす事あるべからず同はた
い殺ざるにはしるし男とたへ申やう少もくるしゐるまじ或は主命と申又ははうばひとみにた
のまれぬれば是非なく殺事ありのくあるときは其たのみたるものころとがあらん我はまつた
くどがはさましと利口氣に自慢して申和尚舌も引入させずして汝あの柳に雪つもりたり枝か
もげに見へ候はちひてたびてんやと仰られける心得申候とて柳陰に立よりふり落しければ
しら袖のうへに雪ちりのりしとやちらはらふとと和尚の曰汝いゝあれば雪とはらひ給ふぞ某

がたのみ申せば某にこそちりあるべき事あるにやと仰らるれば此人ははと行當りるれよりしてのさねて殺生をやめけるとのや是に依ておもへばいの人に人ところす罪科なりといふとも朝敵とはるばし悪逆のものたいたいせん事はいく千萬人なりとも苦しめるまじ一人半重なりとも殺すべき道理あるくば其責ともあるべしされば人と殺にたむてはもつとも害すべき道理なれどもさむらひの余にすぎこのみてさるべき事いあらん然ればこそすへき道理の内にもたさるままき道理あるへしよくくこゝろうべし

○爰に木屋平次郎と申ものきはめて長ちいささいろくろき男なり世間の人々これとあざけり笑ふ事よの常ならずまして他所へ用事ととのへに行とあれは指とさし子どもあまた付したふて道とも安のらしぬめはれのすのら歩となすとならずあるとき少し心さす事ありて一休和尚と請じ我身の不具とつぶさにはなし今更これとくわあしむ一休仰らるゝは生質たる身とちいささとして何とすへき左やうの事とのなしむものにあらず其子細は金はちいさきものなれども天下のたのらとなる針はちいさけれども衣服とぬふ資となる墨はくろけれども佛經註録聖賢傳の書としるして天道の助となる漆はくろけれども諸道具と助たり山は高しといへども貴のらす樹あると以て尊しと霜雪は白けれども萬民これといためりたどひ肥ふとりたる人がいのはと瘦細りたくねがひたりともなふまじしものと強てやせ細らんとくひものごとめらたちとちてたらばとて必氣血とへらし病と生し身命あやふるべし又瘦はそりたる人何程こゑ太りたしとねがふともなふまじ肥太りたらんと飲食物たぐさんにして寐仙居のびとせは必氣血とみだらし食傷してうらしげく牛の糞ののさねくゝなるゝ寐所にも包おき後に

は俊寛僧都の鬼界がしまに住し、ありさまにありなは命もそでにあやふあるべしされは藥師如來の出世者婆へんじやくが再來して藥とあたへ療治する共いのでろの驗と得んしらは天の黒白脊の長短も又のくのとし爰におもしろき咄ありさる所に才のく利はつの人あり此男いのにも脊がちんちくりんおて我身ながらもうらめしく悔かなしむ事せつなり余りむねんさにつくくと思案しけるに我身そのくありとも是非子どもにかゝては脊の高き子と持べしさあちはまづ女房とむのへんに好ありみめらたちは少も望なし只脊の高き女と尋るに其脊六尺余にて無雙の悪女ありいろぎこれとむのくとり夜盡のせぎけるはせに程なく此女懐妊して九月とも過て程なく産月ひもとどくよるこひ取あけて見れば娘なりあつばれ男子にてあれのしと願ふ處に女あり捨てさにもあらず育てけりかくて此度は是非に男とまふけんくとのせぐ程にうむ程にくつ、けさまに女子ばかり五人までうめり彼男あら腹立や無念やといひありおめさけれとも甲斐もなくつなさうの拾ふのどせやけども流石さうもならず養育するはせに成長するにしたがひ何れも母親に似て色黒く脊高く鼻筋ひしげはうにへうつむきにころぶには一ツの徳には鼻の用心ゆらすまなこ細く、ひささ驚みせの如にて六尺ゆたらの女なりむことり嫁入ならざれば何ともてあつひける有さまなり何事ものやうの事と聞のらに諸事悔あなしむ事あらじと言葉に花と咲せて語りてこそ歸りけり

さて自問自答のつゝと御はなし申さふ縁と無縁は三ツの品あり問如來は是實に一とい衆生の父母にて大慈大悲あまねくおふて更に倦とさなく影の身にろふ如く護念し玉ふあらば其佛の力にて衆生とことくく惡とやめ善と修すべきはづなり何と日夜に惡業とつくる事

いふんふ申難問はなふてあなばね所でござる此答へは尤佛の大慈は本等にして差別なく

一味の雨の如く日月の光のとく何方にわけへだてはなれども受る處の衆生が同ならず縁

と無縁との相違ある事は尺加如來舍衛國に於て説法をばしたるに合點が参りるれば

いなる事と申に佛この舍衛國の祇樹精舎に廿五年おはしまして説法なされたるとき殊勝

のあまりに猿鳥さつね狸のあらもるも如來の説法とさして頭とらふだれしとくおは

れば皆れのづから住所へあへりししるに此國に住む人數九億ある中に三億の衆生は目の

前に尺加如來を拜み奉り音聲と聞て得道し又三億の衆生はたゞ佛の此國にて説法し玉ふと

さゝ又た三億の衆生は佛といふ名もしらす是と見給へ同國に住み同じときにあひながら縁

の有と無とは此三ツの品のはりあり佛の手前よりは少しもへだてなければども愛は力にねよ

ばぬ所あり又醫者の藥とるに何とろして人の病と本腹させたくじのげんに心をつくして

藥ふといへども飲ねば醫者の答にはあらず全くのよく佛は八萬四千の煩惱の病といや

す大醫王ありとのたどへ是にてよくさへ侍るさそれは初の難問はすみました此上は随分

さよひとしりそく所の彌陀念佛や法華題目などの良藥と飲て安樂世界寂光淨土に往生成佛

とどけたまふべきが一大事にて侍るも一ツ因といひ果といふは人のうたのひとなを事かこ

れ有はせに次手に講釋して聞せませう先しばらく此間に世話方講中御らうらくと厭せられ

ませ

○さる人一休の草庵へ尋行和尚にあひ奉りて申やう我等文盲ふつゝかもの候へば耳がたき事

は聞てもさうござるがとく何にてもおもしろき事候は、御はなしたまはれと申とさし和尙され

ば唐土に虎さつねと追つめすでに喰はんとするに此狐の申やうはいのに虎よくさけ必ずわれ

とくらふ事なれば今日よりしてわれがしとるの獸の大將に天道より仰付られたり去程

に汝我とよくするならば天命にさむさ忍ち汝が命めつすへし若此事いつはりと思ふらば我

あとにつきて供として参るべしとるの獸われと見てのならず恐れおのゝきにげらるべ

いふんふ

二十二

持たるるねは親身きん玉

とよみせて、こそこのへりけれさる人の申けるは一体和尙へ参りあげ給は、さだめて和尙は
 じひふのくましましと程にすこしは給はらん事はよもあらじはやく参られよ殊に其方のよる
 しきときは相應の用事と度々なへられし事なれば其方の事は和尙のけにても念頃ねんころに仰られ
 候ま、御うけのひ玉はぬ事あるをまゝとくくと申せば此者げにも同意してやめて和尙へ参
 る折ふし和尙出合給ふ先四方のはるし二つ三つ仕り序よきとさに見合申けるはいに和尙さ
 まるれ人間は四百四病の其中に貧苦はどつらき病はなしと古人も是とのなしめりされば御借
 も内々それがしが年月持病御存なりとに此頃しきりにさしおこり候さる醫者に尋候へば此煩
 ひは我等が療治には叶ひがたしやうの病はつるに醫書にも見へ申さず然ども曾て病の名と
 申さねば醫者の見立としらざるに似たり多分此わづらひは積金といふわづらひありい成者
 婆へしじやくがのりたりとも治しがたあるへし妙藥金銀丸ともらひてのみ給は、即時に治
 すべしととしへられけりもし和尙さま御持あらば一包御ほうしやにあづのり度候となみだ
 はらくと流して申せば和尙さま給ひてさればこる其病は年に二度づゝおこる病ありまづ當
 月今ころ秋は七月中旬何れも遠國までもはやりわづらひ申なりさもあらば愚僧すこし持あは
 せたり一包まるらせんとて奥へ入たまひ銀一つみ取出し上書には養命補身丸とのきつけも
 し再發のときはしらぬなり早や歸られよ
 さて因果の差別目前の道理と講しましやう唐土の子才と士嫌といふもの、問答にて侍るる
 れとふまへては論せねども今少し因果の道理と聞いつりたるものが申事には因果といふも

のがたねと木の實のとくならは同じ田地に種蒞子小角豆の中にも枝葉のしげりたるもあり
 やせたる枝に出のつきて見苦しきもあり何れも其肥たる枝は前世にていなる善根ありや
 やせたる枝はいなる惡業とあるして是はどのちのひがあるにて侍らんその上松の木が後
 生ねがひてさくらになりたるためしありや天地の間に生るものは萬物自然の理にて種は同
 じけれども所によりて大小高下のあるは別て養事したる瓜のあしき事したる豆の葉といふ
 やうあるいふのしき事あらんやれそらくは佛法あやまりて因果の差別と説なるべし是いの
 んくこれと士嫌がこたへに是不類の談なり變化は心に依是木たる事豈心あらんやといへ
 り此心は不類の談とは耳とつて鼻とのむがとく山と船にのるににたる不審といふ事なり
 れといふに申に成實論に

前世の妄執は今四大とまねく虚空と國て假名の身となる前世の業因によつて法界の五大
 假和合して五腑とあると釋して善惡因果と論するは有情の群生心のあるもの、上にこ
 る沙汰とる事なれ誰の悲情草木の心あさうつ木後世と祈れば善となせといふべきかゝる
 ゆゑに變化は心による木たる事わに心あらんやといへり變化は品形のものはるといふ事な
 りしければ有慈悲情こゝるあるとなきとの差別と合點すればるの疑問みなはれ申では
 べらんやたし右のものいひ華嚴會上の樹神の偈に甚深の子細あるとみればこゝにて論
 する事くあり誠に昨日あれば今日あり今年あれば來年ありたれよくあそその日とつけて
 來る事はなけれども今日あくるれば明日もあり現在あれば未來あり因あれば果なふての
 なはぬ道理極るならひ薩婆多論に曰むらし牛溲比丘といへる人は常に牛の溲のむやうに

口と舌をくしりられたるは先世牛の中より生とうけられたと申又ひとりの比丘ありの
 り初にも鏡ともつて我面と見られしは過去傾城のうまれはりなり目蓮尊者は神通と
 得給へともつねにたはむれととり歩行たるは前世猿の中より生れ來るとしるされし又佛
 弟子の中に夜半あらずに眠りたる僧あり佛にこの因縁と尋ね奉れば千城の間辛螺がいの
 生と得たるものなりと宣まひしとはづのしくおもひ晝夜またくもせと七日の間まなこ
 とひらいて居たりしは忽ち明言と成しと菩薩に見せければ是いゆべのらず病にてつよ
 れたらんには藥あれども生たる目には眠りて休るが食物なると此日數ふさがさればつ
 えさしたる目なり藥のあはずとてさすがの名醫とてはらいて去けり其とき世尊それと
 あはれみたまひて金色の御手とのべて双眼とまで給へば即時にやみはれて明眼になれる
 事もあり生としいけるもの三界二十五有の生死病流問六道四生形ことにし果報ひ
 としあらざる事は皆先業の習氣にこれをも一切の凡夫罪障ふのくして因果としらそ皆み
 づなら苦の因と作してみづのら苦の果とうくるのいこの我身としはり夏虫の火にこがる
 いたぐひ皆自業自得誰にむのつてうつたへんあるうたに

奥山のすさのむらたちともすれば

そのが身よりぞ火と出しける

ともよあり曠刻苦海にひやうりんし多少業火にやるゝとぞ

こりもせそら世の暗にまよふのな

身とおもはぬはこゝろなりけり

終にろの苦じみにあらずのへつて五塵六欲におぼれて恩愛にしはられし種々のちきりも命
 のさへさるうち驚愕のふすまどらぬるも身軀のやぶれざる間大梵高臺の闇も火血刀のく
 るしみとのなしみ阿育の七寶も壽命と買ふ息たへぬれば又三途八難古塵に飯り犬とうまれ
 ららそとなり不淨の肉に樂しむあといはい糞中にそまり蟻と變じ角といた毛とらふむり
 生る世との其間四足にてやあらん無足にてやあらん覺す淨ぬしづみぬ紅蓮大紅蓮のこほり
 八塞にとじられやうく餓鬼にへめぐりあるひは畜生にさまよひ修羅にうつりふしがや過
 手遠く劫のすこしきゆのりにひのれぬらんたましく人間に生とうけあひがたき佛法にあひ
 寶の山に入ながら現世後生とぶらりとくらしだらりとあらしやまうべき三寶とも信せず
 放逸に悪業とたくみ手とひみしくしてまた三惡道にのへるべき事はさてもく淺ましく悲
 しき事と思ひたまひて日頃願たてまつりし念佛目やられくの宗旨の方便さづあみ取付
 て此たびはせめて少しの善因とまいてなりとも生死の家とはあれ未來の淨利の臺に置べし
 と大願のちのひとたてひとへに後生の道に身命となげうち給ふが肝要で御さる又さまと
 申談じたき事侍れをもへたの法師が辨舌わらひくさのたねもしや此次んのぞみならば明は
 ん講談して聞せましやう

○和尚のまた小僧にておはせしとき師の御坊につらへて物よみ手ならひなぞして居給ふ折ふし
 夜さひのころあれば師の坊はらさげとあつものとしてたゝひとりまわりて一休へは豆腐や
 うの物ばらりまわらせられけるに一休これと見て凡出家はなまくささものとくはさるよしう
 け給はりしが師匠はらさげとまはるはくるしめらす候のさあらば我等もたへ申さんと申さ

れける師の坊よりしくおぼしめされなんぢのやうなる小僧の身としてなまぐさき物くふとき
 は忽罰あたるなりと仰られければ一休肩とひろめしばらく思案して申さるゝは同人間の身
 として小僧にのみばちあたらむや老僧こそなまぐさき物まらば罰はあたるべけれどあざわ
 らひておぼしければ師の坊のたまふはいとけなき身として心だけたるいうやうのなさればよ
 老僧とて御ゆるしはなけれども我等は引導として喰はせにといひたまへば其引導はいある
 ことやらん少しうけたまはりたしと申されければ扱ふわごせはこしやくなる人やいで引導し
 て聞さんとて一盃もりたるのらさけとさへけて箸おつとりのべてのたまはく
 汝元來枯木のとし助んとすれども生て二度水中にあそぶとあたはず愚僧に服されて佛果
 と得よ陸どのたまひてひたものまひりける一休つくくくと聞て又肩とひろめてしあんして
 夜の明ると待のねていろぎ魚の棚へはしり行さも大きくしたゝなる鯉と一献買取きたり
 て味噌汁とこしらへるの鯉とひんにぎりながたなかつとりのべて鯉首ちうにうち落さんとこ
 せられける所へ師の坊たち出御らんじてこれはさたのるぎりなり昨夜もしめし教しとくに
 いとけなき小僧の身としてうらさけだにも無用といひしにその生てはたらく物と害して食
 はん事以の外の事なりといましめ給ふ一休もさはがす我等も引導おはしまとて去ぬ体に
 おぼしけるが師の坊もあされはて大いにわらひてうれはいるなる引導ぞやもし尤しおらば
 ゆるそへししらすばのがそまゑとての御家の一棒とこわきにい込引導いるにとせめ
 られける一休そこしもさはがすいで引導仕らんとて左に鯉の細くびひんにぎり有にはなが
 たるとしやにうまへてはく

汝元來なま木の如し助んとすればにげんとて生て水中にあそばんよりは如し愚僧が糞と
 なれ賜

とて鯉の細くび水もたまらずうち落しとつくと煮てしたゝの喰て空うそ吹ておはせしおは
 師の坊これとみてさてもよき引導よりて手おはりなる心得のな昨夜われらが引導にてはうら
 さけは佛果と得ずして糞と成べし汝が鯉にくそとはならで佛果と得りさてく活機なる人や
 禪僧なるぞや小僧のどて皮の一棒とあらうとて舌とふるひての給ひけるは三年になる風
 と今年生れの猫が取とはのゝる事とやとくは汝はたゝものにはあらまど感じたまひけるが
 案のこく程なく天下老翁とみづのらたたまふほどの活祖師にて一休とて名と千歳に傳へ給ひ
 て田とらへす翁のりとする尼までも物語の種と人にいひもてはやされ給ふ事誠に凡人にては
 ましませうりける

○一休和尚は鯉が御好物にて或日つれく〜に鯉と買につらはされけるに折ふし店にされてなう
 りける彼つらひの者こゝのしこと尋ねわたる故あるうりしのは待わび給ふまゝ

此たびはいろぐといふにながそでの
 たこの入道みちのれそまよ
 と遊しける處へ鯉四五はい買もて来りければ一休よろこびて此たこむさ〜と食もむさたの
 事なり引導の頰なくはとて

千手 観音 天竺 然別 他 兼 戒 任 老 釋 通
 佐州 一味 天然 他 兼 戒 任 老 釋 通
 五二七七

やれ引導はすみけるぞ火葬にすべきの土葬にせんらやしく水葬にせよとて手とり足とり手にて沐浴させて袖酢ののけてひた喰にくひたまひ去る檀方へ行て酒などまゐりけるにあまりに多く蝸をまゐりける故吐却なされけるがみな蝸なり且那衆これを見て大に驚き申けるは一休和尚は佛のやうに思ひしに蝸をまゐりけるななさてうなまぐさ坊やこれはしくとあざけり笑ければ一休そこしもさはがすいやとて我は蝸とたべねども口より出ればせんらななしさりながら我蝸とくひしにはあらずとあらがひ給へば口より吐出したるもの食ぬとあらがひ給ふのやいよくさこへぬ御坊やとおどろあがひて笑ければいよくわこせ達たどへ口より吐出たりとも喰はぬ證據と見せんとて皆々引つれて百萬遍に行て善導法然の畫像と見せてあれ見たまへ人々善導のみだよくひしとはなれども口より三尋と出給り善導大師さへくわさる物の口より出ると制しがたしめて愚僧くわさる蝸の出るとさらにせんらななしと仰られたれば皆人よこ手うつてさても頓作なる御返答やと口を閉て歸りける

○初一休和尚は生佛にて魚と食して水中へ吐出し給へばその魚たちまち元のとく生のへると浴中に此事と専ら申傳ふと或人來りてのたりければ一休とらしく思して浴中の辻に高札とてそあげられたれ其詞に

来る何日の日さのり松のやとり紫野にたむて魚と喰て其まゝもとの魚にはき出し水中におどららしむる事なき御望のたゞ御見物に御出待たてまつる

大夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ書れける浴中の諸人は是と見てうその誠のるはあり人といひければ實しらす思ひしに切

はうたうふ處なし正しく御自筆にて高札と立ち上はしるしなくてはなふまじいざや人と見物して未代ののたり句にせよやとてしるも知らぬも見しも見ざるも其日の來ると待らねて門前に市となし我見もうさしとてころまでののひ上りて浴中貴賤くんじもせり其刻にもなりしのは大鹽に水と入なるは魚とよく料理してのたらいのはどりお御膳とすへける一休出たまひて彼魚とひた食に食たまひて扱はんきりにむひて喝ととのたまひて暫く目とふささなぞし給へど見物のくんじゆは御顔とまゐりて生たる魚とはき出し給ふは今のしくと待居たるにしばらくありてのたまひけるはのしくはるの御出なるはきにいづもよりも一さは手ぎはに吐出して見せ申さんどて種々思案するに中々のれさうあもなしせひにおよばず裏にありとひりて捨申さんばや各も御歸りあれとて内へ入給ふ上下萬人さもつふしさてもおどけたる御坊と興とさまして歸りけるが其中に心わるものいひけるは只今參りたる魚は皆生て淵におどるなり有がたき一言のな誠に正法にまどくなしとてころうけ給はりしに人の余りあいはんとてふしぎなる事といひて得めんが爲お返してしるなれば其理としめし給ふ有がたしくと感じければ皆人は是る氣がつきて合點したる合點せぬもうなづきあへりて歸へりしととなり

さて前晩おやくろく申たる因果の二字とあらまし談いたしたる其次と只今講まさせう因といひ果といひ善と惡とのふたつに生れ苦と樂とと身にうけさるものなにぞとせんさくして見ればみる我一心より作りあるそとわが心にさせるといふとまて銘を覺ながら善方へはうつらす惡しきとといへば先ぞしむ我人の過去の惡業が多く残りてまた五道六道に引もど

さんと心の鬼が身とはるれず日夜つきそひて少くも悪念がふればたよりと得て善心や
 さまたげぬるともつてあらゆる六賊といふ六の盗人めが目と鼻と口と耳と身と意とに入の
 はり目はうつくしきものと見れば人の親たるものはあのやうなる衣類染ものと我子にして
 若たや孫めにこしらへてとらせたしと罪とつくりまた子と持ぬ女はそんなじよ其娘子の今日
 は花見の着物見れば死ても風流なもやふ當世のそめ出し帯は何うたしひながたの内にあ
 つたのりと覺るさし櫛のけつうさおれもあのやうにして寺参りするならばこれほど見に
 くゝとも能見らるんものとしやはしやと欲とおこさそ扱又一盃なる親父も伊丹鶴のいけの
 こもの太りの梅片荷は辨當旦那どのははや向へ出てとしやると久三がいうがしげに通ると
 見ては何とよいものが行着がくも大事あるまいとれもひ其外者男どもは色ある女とみ
 るに煩悩たまに行合袖のふり合にはや心うのれわととしたひ百度も見のへりたるも見ぐる
 しとに坊主の女ねぢむけるほど淺ましきはなしこれ皆眼に彼の色欲の盗人が入るはりて其
 心とうばふ也仙人が通と失ひけるもつふさにいへば八十八仗の見惑あり其外の耳に聲と聞
 てなづみけはひ物としに形は見へねども氣とうごのしるる穢土といひ浄土とねがふ念
 佛の音聲なさへれもしるるさこの音やと後世の心は余所になりて聲にれんはとなし鼻にはの
 りの物と思ひなふら袂に留し薰物にも心とどきめらし舌にあぢはひ身によれ意に録し口に
 いふ一日一夜四千念年々に思ふ事は皆惡道に引れとすなるあたなりたまさるに發る善心も
 此六塵の盗人にぬそみとられて善心のはやくさめてあしき方にのみはだされこよひの講談
 とも只何となく聞たまふべけれど中々御法のさしくひ事でなく一目の龜のたどへ大海針

の事は方々にててもんある事なり只今此法問とさくうちなりともせめて意の駒にくつは
 とはめ意の猿とつるきとめてさく玉へ觀念觀法はならず身にいとまなく世路にさへられ
 親の命日にも寺まわりさへならぬ世の中ははんや聖教にまゐることさら事もいとまを得ず
 しれば聞といふ事一つの樂しみもとの聞法の得益其深ははなはだふのければ只一詞
 も佛のとしへとあらばたろろの内に聞ぬやうに先心とあらつくべし聞といふに三つの品ある
 と法苑珠林にこれありろの内聞ともつて聞が三つの中には下成としめされたしければ何と
 もつて聞といへば心とも聞がまとの聞やうあるが心愛にあらざれば聞ともさこへ
 ず食へども其味と知らずと儒書にものべたが莊子にも神とこらして寂お聞といひ前漢書買
 山が傳に天下目といたいて視耳とたふけて聞とあるもうつうのりで見ずうつうのり聞
 ぬといふ事也しるしなから惡業煩惱のころにはぬふてさく事ろくには濟す只佛法とあらば
 ありがたやとばのり信じたるがよし萬物の理とすますといふは知恵がなければならぬとし
 るべし

○或人和尙へ参る折ふし和尙たいめんあり諸事のはなしおはりて後此男申やう和尙さまわたく
 しは此ころ病中にて本服いたし今日うるだち仕まづ和尙さまへ御見舞申たりさて和尙さまは
 は御答話がよきと申事凡日本中に流布仕りて候わはれ何にても御はなし聞され候へさりあが
 ら今程世間に高直なるものもてあつらひ候先何々にてのや一休さこしめしされは高き物と
 いはんとあらば

ふじの山に

あさまのだけ

伯耆の大せん

高間のみね

三十一

あたまさん

東寺の塔

天狗のはる

三十二

品こそははれ きたふの墨跡 大燈や扱 賞之が歌書 定家が色紙たんざく扱 ちか
かねの土のものにはまつはふんりんのかたつき丸壺なとびのふらやはるのふらふらし
徳の一聲せいしとてわささしや太刀のたなよしみつ正宗國とし波のひら行安しら
よのうつすに日でりの年の米の直とるんすはあはも高きうねありられうびんがのこま
たて、蓋のうたへこへばんしきらむけいのみむてう

これまでなりといひおさめたまふところへ旦那のたよりとて御衣と一衣これは和尙さまへ進
上し参らすとて持来る一休さまのみうれしくもおぼしめさる氣色もなく一言の禮といふべき
言もなくたゞ狂歌とそへ給ふ

のら衣またのらころも唐衣

のへすくものらころもあ
のくいひて是と返事にしておくり給ふ也

○又さる人一休和尙へたつね行きさんとの段と申ければ和尙さま給ひ安き事や其望ならば先
金剛の正体といふ物とあんど出し給へどおはせらるゝこの者聞て取あへず其けんがるの正体
あらば案ずるに及ばずそれはわらにて御座あるべし子細はまづわらといふ物に作しこんがう
は作る物なればのくあるべきなりと申和尙おのしさのさうみくしていやくさやうの物にて
はなし金剛の正体と申は音あつて目にも見へず手にもとられず火にもやけず切てもされず水
あてもぬれず色にもとまらずのくは無ものかとおもへば元來其ときにしたがつて又あるも

のなりとおしへ給ふ此ものさへてはこは六のしきたづねものなこんのうなればどのく葉あ
らでは別に余なるものにてつくる物あるまじさ候はゞぞんせぬと也とて出けるが門のほどり
より又とつてのへし御坊さまたゞ今としへ給ふこんがうの正体わらりました門前にてとくと
合點いたし候ぞやられは屈にて御座あるべし子細はまづ屈と申ものは音はありて手にも取ら
れず目にも見へず色にもとまらず火にもやけず切てもされず煮てものくても元來なまきもの
おもへば腹中のことおよりていくつもある物にて候としまんがほにいへるはあらしのりし
和尙あるとささの早がてんも徳ありと引とにたどへばのなつんばなる者人に何と商ひして
よのらんと問しにどても聲にては合點行まじと思ひ耳とおしへて兎角ひやく次第にて何し
ても利ありといへると此のつんばが心にさては耳に似たる物とあさなへといふ事と思ひ木ふ
しと大分買込込けるに折ふし諸方にされて此もの大に利徳と得て後は長者となれるは人
の言も真直にうけてうたがはす誠の心よりなせる故に利と得たりしければ佛法の一句と聞
ても少もうたがはすたとへば愚痴にして法の深理は合點ゆのよともたゞ有つたやと思ふ心
が則來佛のはじめとなる爰と源空上人も一定と思へば一定と仰られし安心決定の處なり
に

聞とさの實もとおもふのりのみち

のへるとさにはわそれこそすれ

とよめる聞た一座きりとまらすみなあつたつ人ばのりなり耳は地ごく耳がよし淨土双六
にもえうちらん地ごくへ一度れちては二度出るとのなひがたきゆゑ地ごくといふなり能耳は

氷がとまらねども水中にひたして凍らうらば一はいはあるやうにこの一座にゐてさく内は水の
 のあるとくちやうもんの座とたつときはたさると思ふ法の水はみなもつてしづくもなきゆ
 ゑかて耳といふなり人とうまれて覺へのつよきとよきと利根根上根下根は有ならひあ
 ればせひとすともくるしめらさしばらくも法問とたもつものは我則觀喜と諸佛も又しのな
 りと説給ふ刹那片時の間にても有がたき御縁によつて佛度さつものとしてうけたまはるは
 大切なる事と信心と發し一編の後生と底心より中そが専なりたへば火とゆふ物の重寶な
 る徳ありて大寒小寒の氷面川わたれば手足の切るいごとくつめたく五体ちみあがるはせ
 の朝夕に火とたきわたればそのまゝあたゝまり其外食物と煮金物ととらゐして自山自在に
 つのふ能われども火事といふときは盗人よりこはく家の五軒や十軒は日時の間に灰となし
 人もやさころすはすそとてはいいやなやつなり彼五体とあたゝめものゝと煮たく所の火と此
 わさはひの火とは別とつとふもへば少も火にちがひなく余く同じ火なりたゞ用ひやうによ
 つて善惡明白なればみあ我心とあしくもつなと是にたとへて仰置れたあるは又生子と金銀
 とつてやしなひ一二ヶ月ろだてしのちは我子にちゝとあたへ養子はいつしゐのつゑ殺し罰
 あらはれつひに刃にゐたりしも惡心のもちひやうゆるなり現在かくのとくろしやくせら
 れたるは其まゝの地獄しゐるややくめゆるは因果ぞらしむらしは血今は針はせにむくふは
 目に見にてとほりたらさこの殺生戒もは大乗門のときはじめに置は佛は大慈大悲のたま
 りたるなればものゝ命をとると別あひましましめ給ひしなり殺生にのゐてさまゝこれあるは
 せに三世のむくひやうとつよきにはなして聞せませう去なら余りのたい事はありではみ

なくたいくのでござらふ先一ふく

○或寺の門の被風に猿と三ツ作り付たり一ツは兩手と以て目とよさき一ツのさるは兩手にて耳
 をふさぐ今一休は口とよさくあるとき三人づれにて此門前にたちとまり是と見物を折ふし一
 休と通ひ給ひて立より是と見たまひうちうなづき笑て過行たまふ三人のうち一人が申や
 う何も三ツの猿のいはれとさまゝなんぞけれども終に合點ゆるす只今これにしばらくあり
 と行たまふ出家のうちうなづきと通ひしは定めて合點し給ふならめいさ子細とたづねみん
 と追付て一休の袖とひらへ御坊に物たつね申さん只今門前にありつる猿と御らんありてうち
 うなづき笑たまふやうは定めて御僧はよく御ぞんじありつるものとぞんずるのやうに申我
 は愚痴文盲にして何の辨へもぞんせざる者どもなり子細とあり聞せたまへや宿へへ入りは
 なしにも仕らんいらにくと問ければ一休されのころ其猿のいはれは我等もくはしくはぞん
 せず去ながら何れもれきくの若き衆の尋ねたまふにしらぬといふもいらゝ斯いひし事もあ
 るげに候

何事も見ざるいはざるさせざるは

たゞはどけにもまざるなりけり

とよみ聞せたまへば三人の者どもさてく尤ある俗歌のこゝろな是はめんくの心得にあ
 くてゐるはざる歌也さて今の坊は佛神の現化なるべしと皆一同に感じまら歸りしが一人の
 申やういらにめんく此歌の必とつて三人ともに今日よりして見ざる聞ざるいはざるの願
 とたつべし皆つともと同じて授けたばらに立よりければ折ふし遠寺の晚鐘のそのふ聞へけ

ると聞ざるの願たてたる人何とあぐれどもひ出て
今日の日もいのちの内に暮にけり

あそもやきの入相のね

とよるき歌とらう吹ける處にいばざるの願たてたる人のいひけるはいかに其方聞ざるの願
なしくありぬる事のおさまじきまじきと手と打もびとさして笑あざけるところへ見ざるの願立た
る人のいへるはさてくゝのたぐゝは何と聞何といひてどもに大願とやふり給ふやれるのにお
さましき事などごがめらるゝ三人の心ねのし

○又さる初心ある男ありさいく一休和尚へ参り萬うけたまはる和尚此ものと見るたびに其方
はたんき人地物ごとく随分の元になせられよと仰られる此もの答で申やうもつともおんにん
仕候事隨身にこたへ過て覺へ候去ながら我何のうまひもあく無異無事にまあり候ときい
たづらもの來りてくれがしが面にのそはささきさのけ候とれし拭ておんにん仕候と申和尚聞
給ひて言同断るればわるさるんにの心得やうのなへすも其のそはささきさのこふへの
らすもし其のすはささきさのこふ候はいはさのけたる田夫もの我等がらすはささきさのこふへの
とれもへばこそこのこひたれにささきさ仕るたなりと猶もかひのさねてはいるなるめにあはせ
んずらんさるはささきさのけける馬鹿ものは生有ものにはらすひとへに狂亂といさやうばの
き人の面へのそはささきさのけける馬鹿ものは生有ものにはらすひとへに狂亂といさやうばの
たくらだ非人ともいふべしその蠅といふむしはいう成貴人高位の人のつむりへもあはれずあ
がり夫婦のたらし事ともあしあるひは糞といひりくるされば其蠅はもとより出ありとこも

へば腹も立す真ののこくはい同前のものに対するときは人倫のそさはふにあらず勘忍のこ
ろへ是後にもなくてはいであらん

因果歴然修羅の二ツとははなし申さん過去の因としらんと欲せば現在の果と見よ未來の果
としらんと欲せば現在の因と見よといふと略して現在の果と見て過去未來の果としるとい
へり因果といふは遠い事ではなく經文多き中に大集經の十來といふ事のあり其中に命長きも
のは慈悲の中より來る命みじかきものは殺生の中より來る未來もまた然なり今此悲しき浮
身となりたるは己に過去の業因によつて四苦八苦よきに付あしさに付叶ぬ世となげく近く
は成敗は行はれておはねとさらし籠獄のすさまじいたすと見給へ其中に重さるるさかむつ
ていづれおろはなけれども人と殺したるもの助あるはなし但し侍の戰場にむのひで凶徒
としりぞけ盜賊と討て國と治め義とたつるは佛法には一殺多生とも慈悲の殺生とも申侍る
うれとひとの事でありし梵網經にとくがとく一切衆生は皆これ累世の六親げんぞく只頭と
あらため面とのゆるによつて各相知すとありて六道りんるのあひだ生と世と生るわり死に
のわりあるときは父となり母となり姉となり伯父とありいとこととなり縁者となり親となり
しゆらとしうとめとなり師匠となり弟子となりあるひは士と生まれ百姓と生し大工とあり
商人となり夫となり妻となりて形はありは所はへだつれどもたがひに恩愛のはあるいとき
なせりしと凡夫は淺く隔生即忘として胎内より生まれいづるときはのくるしみは過去のあ
りさまとわされていなるもの今人にうまれて來りしや何としたる因縁によつて親子
とありたるやう世にもしらす少しの利欲に目がくれては入ところじつんさきて又るれに敵

ともめ切もあつらるゝもありまで未来までは遠き事あるひは口論して人と切たし打れ
たりしたる事は聞えよばれん其如現世に修羅道のせめとくする事は扱も浅ましくあるしき
事であらずや扱未来の事は諸經に多くといて曰殺生のつみよく衆生として地獄がさらく
生に落ちるもし人中か生れは二種の果報を得一にはたん命二には多病弱加經には殺生の
ものは號叫地獄に落と説き因果經には切ころそもの死して刀山劍樹地獄の中に落ちるとき
てつるぎの山に追立られてまた身とさられ血にひせびてあちゆるくるしみとくする事其の
すつるにもりつくされず

○北野邊にて十二三はりの童女の菜つみて居けるが俄にひれふし死に入けり處へ一休通り
り立より見たまへば四五尺ばかりなる蛇はひのりける和尙杖にてはらひのさ童女を引
おこし子細とどひ玉へは只今こゝに若ものゝ来りてここによせしと仰られて其後むたいに
引ふせられ候が何とやらん頭のまはりてれそれおさるさたるふせいに左ながらよりも付す
して其まへにげさうたまふなりとるたる一休ふしきにねほしめされしが髪元の結とどりせて
見給へば尊勝陀羅尼の書たるを引さき元ゆひにしたりける是にせそれ近づるさるぞふしき
みれと和尙あるとき且那方にて此事とはなしたまふ去程に此尊勝たらにの功徳によりあまた
の命とたすありたり扱こそまもりといふものはもつべき事なり

○扱爰に一休一大事因縁の御工夫なされしとき諸且那あるひは御友達衆毎日とむらひ來まして
さまたげとなりければうしきしく思召て御心地あしとて一ゑん人に出會たまはず皆人こゝ
ろもとなく折々に御見舞申侍れば御長髪ぼうくとし玉ひて何とも色みへず御惱とのみ仰ら

れける且那として先御智音衆もよりあひ是は氣遣はしき事ありとときの名醫と入のへく
辨まらせほいまはりはいのにと明は降師申されけるは御脉はいのにもよし不審なる御煩と
せれもく申けるあるとき且那智音衆皆集り此座なやみの様子はいのさまにもしつ熱の病と
は見ぬす若し御僧の事なればもしや戀などとなされてのく思ひわづらひ玉ふ事もやあらんと
口々に申されけるがいやく人多く知りたりと思召はあかし給はぬ事もや侍らんひるのによ
き中の智音のみ二三人見廻てをとうのひ侍らは誰と名さしあるべししあらば誰人にてもあ
れ此者どもがのりなばなどの御本意とどげられぬ事はあるべからずと頼母しく言合せてひ
るのに三人参りたり一休出わひ四方山の物がたりをみて一人申出けるは此間さまくの御療
治にても御心は常にあわらずと師とのく申なり平生にはちがひて何とて心深くわたらひ
給ふぞや定て戀となさるゝと見つけ侍るはひが目の有のまゝに仰られよのなへて参らせんと
うちつけて申ける一休いのにもうれしげなる御面はせにて此上は何とものくすべき此日頃戀
わびてさてのくの如くやつればて候なり能ころ仰出されたり何とやらん我等には似合ぬ事
にて侍れども各は口頃のよしみなればひとへに沙汰なくのなへてたべ去ながら系ならなくに
必見だれてはづのしやそれと名とば面上にはのべがたし一筆のきで参らとべし門外へ出給ひ
てかのくひらいて御覽しているそぎかなへたまはれば我追が命はながらへてかのく方へは
其かはり能き道教へ申さんとておくの問へすと入一筆さらりと書て引ひとび彼三人に渡し
給ふ三人よるこび御心安く思しめせとて門外へはしり出て扱こそ申さぬ事はとていそぎ其名
としらまばしくて被文ひらきで見れば歌に

本来の面目坊がまらそがた

ひと目見しより戀どころなれ

我のみの迦尺も達広もあらのんも

この君もゑに身とやつまけり

この、れたり三人のものども案に相違して横手と打て日頃の御心もしらぬ身があらぬわざと
 思ひけるこそおのしけれ今にははじめぬおどけけるころなるのなれまことに有がたき御坊の
 書にうつし本にささめるは多ければおわたもちの釋伽如来なりとかがまぬ人はあがりけり
 峨嵋に了意坊といふ道心者ありけるいつの頃よりの首に蛇まどむ付てはなれずさくゝの事
 となして漸々とはなせば又夜の間に元のとくにまとい付きとにひじり切たる坊主なれば日々
 にさがより京へ出て鉢こひけるに彼蛇とくさんかためたんと首にのけて見へざるやうに
 して出ける此事ひとへに難義に思ひ其頃二尊院に一休ねはしけるにの坊主たづね行わが身
 のやうとくはしくのたりければ一休さ、給ひいのさまるれば女のしうじやく成べし汝是よ
 り高野山へ上り候へさもなくば退く事あらじと教へ給ふよるこびて高野へ登りしに不動坂よ
 り彼蛇うせてなした意いよく有がたき事に思ひ高野山に二三年も住しが今は早蛇の事も打
 わすれ過しる里のあひしさに又さがへるへりしが二三日は何の子細もなかりしに又夜の間に
 彼の蛇まとい付けり其ま、高野山に住ならば彌めでたあるべきに何ぞや古郷へるゑり二度
 難義にあん事定業の程ころのあしけれ今に坊主のぞみしわと蛇寺とをみな申あへり
 ○一休旦那衆二三人同心して東山邊へ遊藝に出たまふときしも春の中ばにて箱の花さへ中にし

てこの、らしこにゆさん多しさる片はらに五七人うちより手と打た、さおどりあがりて大笑ひ
 してあそぶ何事なれもしるのりけるとときく所に屁とひりておもしろがる旦那の内二人の申や
 うあま酒にでうじ何がそれはと屁がおもしろるべし一休アさる、はいやおもしろさころ
 事わりなりよく、昔よりおもしろさ事なればこそ、道にもおもしろのはるべやあらおもしろ
 の春べやとうたふほどに扱ははるのへはおもしろさ道と申されさ
 ○一休和尚いまだ十二三歳のころ師匠師匠つぼと一ツ持てた、一人ある小僧にいさゝのも腹せず
 して汝是とありにもくふへうらすもし是と子どもがくへは忽ち死る毒ありといふてひたもの
 我はのり食ひては取置る、一休おもしろは衰れ毒にもせよ死るとも師の出られるはくふべ
 しと思ひて待ける處に折ふし師匠用ありて出らる、一休やがてさのし出し棚より取あらしさ
 まに打てばしわたまへもさる物にも付ける日頃くひたしどおもひけるま、に先二三はいくわ
 てあまつさへ師匠のひろうせらる、壺とうちかとしみぢんになすのくそる處へ師のへらる、
 に一休しみくどなる、師何事ぞと問る、されば大事のあめつぼと打わりたるなり定めて
 御たすのときは何と申べしとおもひ命いさてもよしなし子どもが喰へば死ると仰られ候は
 どに一盃たべ得死とも死なす二三盃たべつれとも死なれずわたまにもさるものにも付て死ん
 ぞんま候得ともそべてしなれはそとの給へば師の坊も言の棄なくてうちわらひてぞ入たま

扱談の次どおはなし申さう一すの虫に五分のたましいと申事の候鶴の逍遙と好むもの
 は死して銀鍬地獄の中に落ちる類とてし罪と棄絶するものは灰河地獄にしづみ銀鍬地獄中

に落て豆とにる事く尖石がくんにいつてうつふしに熱鐵の上にもし其せなるに尖石のせ
 石の中より猛火さへはどばしりて重くして熱きとがふばありなくたへがたし皆これ殺生は
 因果より此身と請るさて鳥類肉類とてろそも同じ凡血とふくみ氣とうくるもの皆これ地
 ありせ、なきのもへは、づき迄とく死とある、事としつて人の足ととさ、て蚯蚓
 もちやつと聲とやめ蚤のやうなるちいさき虫も人にとられじとてびまはりくもなぞも空に
 家つくるとうち落せばしんだ顔して手足とちりめすくみたる氣色も命と大事にそるゆゑ
 り大唐の交抄といふ國の實けんそる人貞觀年中のはじめつらつとめとやめて樂々と隱居
 していられしが此人自休のら鷹狩がすきにてひたと犬とてころして四五十の鷹の餌にらはれ
 しが有とさふとちりけもどよりつらみ立るやうに寒くなり大ねつし頭痛がしてくるやう正
 解もなくうちふしなやみ皆料術も及ばざりしにある夜人しづまりてのちまたちと赤さしる
 き犬五疋きたりてとく其方が命ととらでいふらぬと五臓に取つきせめけるとさ此人おも
 ひ當りて汝と殺せしの家來通達が科なり我はころさすといへば犬の曰通達はるなたの差圖
 にてころせり余の人の仕業にあらす我等すでに他の食と盗ます門番のあてがひと喚みて命
 とつるぐ何のあやまりありて殺し給ふを此詞につまりてしらは汝らがために後生と吊ら
 はしといふに四ツの犬は合點せしに一ツの白犬頭とよりて曰我すでにつみなきにころさる
 いのみあらす未だ死もさらざるに生ながら我肉と割れしくるしみ其とさの怨念心肝にうみ
 忘れずとて承引せずこれと四ツの犬あつらひていまは此人の命と今どりたりとも我々が命
 うへる事なしと思へば退善ばだいと祈り給は、願に苦るしみとのがる善根ならずやと還と

つてしていふに心とやはらげぬるとおもへばよみかへられたりしわれ共猶手足とらごのす
 事らあはず夫より約束の如く夫のために運福なしたるに此病たちまち平癒したる事もあり
 其外巢とつたふけ宿鳥と射ひ離とらはざる事師教にもいましめいはんや佛道の大慈悲門に
 おゐていましめさらんや空とつける翼地とはしるけだもの水にそむ魚子とあはれむのこゝ
 る人より切なるとは子ともつ鯨といふ魚と追うけて三尺ばかりある鱈のやうある物にてく
 し、と突ときは母なるくじら子の脊中におひがさなりて我死るまではつられて終に子と
 いださながら釣鯨のとくなる聲と上て鳴はなれそきくに不便あるといふ斗なしこれ畜類の
 子と思ひらの身は死ぬるとても子といふいともなるに人間に生とうけながら己が子と尻の下
 にしきあるひは殺したるは世間にいふ熱火子にはらふとは此類のこゝろ然の畜生は人にま
 されり

○あるとき白河野に住する柔門に名譽あるる口の人待りけるが一休のる口なるとときと
 よびていつとては行て難句としのけ心見んと常々心おけられけるが不斗ともひ當たる趣向あり
 ければさらば参りて御知人おもなり扱一句して見んとはるく、と白河邊より紫野へとぞいそ
 がれける折ふし一休も庵にまし、とて御知人となりとのくするはせふ内々たくみし一句の句
 作も出来ければ彼僧申されけるはうけ給り及し御る口と何にても一句遊せのし何とぞ付て
 見侍らんと申されければ一休仰らるゝは客發句に亭主脇とて申せ先其方あるばせとありし
 ろば内々たくみ置しとなればさらば申て見んとてなん句とてころは出されけるが此度は何と申
 す所ぞ一休むらさき野と仰られければ

紫野丹波近

とせられければいまだ思も引入ぬにはや付られければそなたはいづくの人ぞ白川のもの也と
答ければ

白川黒谷郷

とわそはしければうの僧肝とつふしさしも六ヶしき章句なり一句のうちには二ツの色字二ツの
所の名いかなるひやうたんの川ながれなるる口の少しふらこふらとし給ふべしと思ひし
に見とる海士あらで思もつきあへず付たまふる名對ある上にはぢやくはしとて空うるふ
ひて尻とらげてにげられけるとなり

○又番工の土佐守に内々掛物の湯としふくたのみたる人ありしが終にのきてつのはさず彼人心
せきて直お土佐守の宿へ行て申ければ折ふし太鼓うち殿にはあらねどひる寝してころ居けれ
彼仁つねくしたしくかたる中なり内々たのみおさしとなれば引ずり起しうされける土佐
守ねふりかたえずたとひ一夜ねすとなりとも晩にのきて參らせんとておさすしられ共又晩と
いは明日の川の淵瀬と心のりもやせん世中なりひらにといふに是非あく筆と取ぐるく
とまはしはけつとりさつと書てこれくとてふせりける望み足りぬとろの書とつてのへ
りひねくりまはしてよくくみれ共さらに何ともしれず水とのきて其中に一筆ぐるくとし
たるものありさらに見分られ余り合點のされば土佐守方へ持行何あるぞと問へども我等
もしらすといふうゝる誓ともつて何のせん引やふらんとおもへども三國一出来たりとやせん
角やせんと思ひけるがいやく一休和尙に讀とこひて掛物とせんするぞといそぎ大徳寺へは

しり行和尙に申しけるは此書は土佐に書し候がさらに此水中の物しれすいの御はあると
ければされは何とも見へねども讀かのぞみならはしてさいらせんと仰られければ恐るしと
讀とらふ一休筆とりて

水中に物ありろの一物ととへば書し書工も
しらす持ぬしもしらす讀する我は猶しらす

と遊しければこれと見る人さく人毎にさても真すぐなる御心はせや無二なし三國一の掛物な
るべしといひしが今にとひて其のけものたゞ人の手にあらずとや

○或寺に五百羅漢と作りて堂供養しければ貴賤群衆の見物ありけり法事やみてのち其寺の僧ら
かんのまへに香花など取りいけるにこびたる世俗二三人羅漢と見物し居たるが余の人は退
けせも此仁一人つくくとながめいて傍の僧に問けるは此五百羅漢に一名ころとばすらん
御僧はさだめて御ぞん宏あらん承りたしと申ければ此僧はたゞ三尊の外は一佛も名としらさ
りければ何ともものはすして方丈のあたへにぞ入ける折ふし一休行合を居給ひて何事なる
ぞと問給へばしかくのよし申されける一休のたまひけるはいらざる凡俗のこがめたてやの
くて慈にもならざる事たれのは覺侍んやされと望ならは言て聞とべしとて羅漢堂へいさなひ
さらは一々とひ給へ真中なるは釋迦ひにひたりなるは迦葉右なる阿難さて次はとへは南
無さんんを其次はとへはすきやとや其次はとへはねらこちたど一くれんげ呪の文にて答
へ給へは五百らうんはさて置百千羅漢と問其何のは答へ給はざらんだんくと問はさらく
と答へたまひ凡そ百ばありもといひしが此俗入さて和尙にはよき御覺へるふと申ければ和尙

わらひさもなく候いとけなきより一卷はうりは中にて覺へて候へと仰られければ此俗人心付
取入てのへりけるとなりさはは時にどつて頓作なる御心入とさく人成じけるとや物事問て
用にたらず登ても用ゐたらぬ事とはいはざるにたさるめてたしよしなき事と問てあやつられ
けるぞすべて羅のんのみにもあるべからず

さて殺生と止るべきのはあしあり楞伽經に曰佛衆生とみる六道輪廻しれなしく生死にあ
りてたがひに相喰ならふしたしきものにあらずといふとあしと説れて先祖の祖父祖母の
なる罪業によつて今嗣とうまれ伯父坊がくじらになりて來やら兄弟がるびさになつて來
て肴にしらるゝやら凡夫の眼うらはしらの事なり出家たるもの肉食とたつにひとつはこれ
らのいはれまた不淨あるものと殺生にも當るも悉にくはぬとの事なり必あじはひにふけり
て彼魚この肉とてろしてしてやつたらはと思ふ心のおこるまいものでなし此も悉にいまし
むると思ふべし初今の經文のとく六道りんるのうちは生としいけるものしたしきものでな
いものあしといふは彼の殷の紂王西伯ととらへてひろのに西伯の子と殺して身とこまやの
あさへださておくりしに西伯思はず是とくひてわが子の肉といふととらへず紂王大に
にわさけり笑て誰の西伯と盡人といふ我子と喰てしらすこといよく惡逆さるんなりと
史記の文にあり是と合點すれば此西伯は盡人にしてしらす子は生ともへぬ肉さへしたし
きものとしらす我々は愚智の凡夫またくらふ鳥類肉るいも生とへたるものなれば正眞の
母親が生のはりて來たるともしらす宇治遺拾にも論にうまれればりて來る人ありといふ事
とのける近頃近江國に鯨に成てくる人もあり紀の國に人の親たるもの那智の犬にうまれた

おはなし其外な双紙にもこれらの種多きともろこしの書なを引て申さはこれも一日や
二日には申つくされぬはと澤山にある事なりやうに申せば向後常住しやうじんとなされ
よ魚類でもくふ事ならぬやうに申と思しめさんがさにてはなし是はたゞ經文のあらましと
申のじや肴うりがもつて參るはしんだものなれば此方の殺生にはならず去ながら因縁はの
がれぬゆゑに只みづら手に綱とはり釣とたれて呑なきものと殺し給ふは御無用此わらち
とよく合點してなる事あらはうまい事して人にもふるまひ參るのよしししし出家たる
もの、徳利にせじやうと入たるいひあるいひわけあるも存せずく申愚僧もしらす物
して畜生のらすあまたなる事五行大義といふ文にあり初のはへたる物三百六十其中にうし
らは風毛のはへたるもの三百六十中にきりんら可うるこのあるものが又三百六十龍がの
のさとなす甲のあるもの三百六十龍が司禪なるもの三百六十八人間がらしらなり又ある經に
畜生不同なれども約めて三種あり魚鳥獸あり是て無量あり魚に六千四百いる鳥は四千
五百品獸に二千四百種ありと説き正法念經には種數不同にして四ヶ億ありといひあるひは
金翅鳥尾頭の間長さ事は八千由旬兩のつはさ横三百六十萬里に羽うつ其飛とさは塞天の雲
の如しと書駿難陀龍王は須彌山とまどふ事七めぐり鹿嶋大魚は長ヶ三百山旬七百由旬是壯
子にのけり鯨といふ魚あり少きものは蚤蚊虱人の身の毛の中に住む八萬の戸虫さて其外は
山に住川に住海に住里に住土に住空に住むる小虫とねらへはくちあは又あるとよく
し又なめくじり猪の鹿にとられ鹿また狩人にうたれ強きものは弱きと伏しまたみぢのさも
のは長さにまられ香だりのまされたりくはれたりつささあひさしあひのみあひていりい

ありとろさね苦しみにくるしみとまし幾度の死ひく度う生れられたちとへで苦惱とくるものは何ぞ現世は過去の業因未來また現世の悪心より惡所にうまれわれと我身のところよく分別ありて少なるとも悪心とつまじ入事いはし物の命ととるまし何れの宗に取つてなりとも未來とたすのりたしと底眞實よりしんくともやうし是非この度は此五道六道の火宅とのがるにうにひとへに佛力經力とたのみたてまつると一筋に思ひとりて如來の大慈大悲のさすなみすがりたてまつらばやうやく億劫にもあひがたき身と取はなとと又もとの三途とかへたばとに日夜心得のある事なりた安心決定が大事の所ならず忘れ給ふな又殺生にひて鐵輪地とくの糞尿地とくの野狐の身うくる事何のの酢のこんにやくの牛戸大根のと申へき事あなれどもまづ講釋はこれにてとめませう

○去るなまこびたる男一休のものと雀と一羽もちているに御坊このとめは生の死のいのん和尚と答へたまふ此ものいとまもこはずさうけり此心は生なりといは殺すべし又死なりといは放ちやらむとの事のしらす一休其後のれが方へ行給ひてはいろ口の心さむとふみまたげて亭主くといはれけるとき亭主出ければ一休此敷居と出るの入るのととひたまへは亭主あにの返答もいはずた手と打て笑ひしとなり

○又或とき一休のつら川とわたり給ふに何とらし給ひけん川中にて倒れ流れたまふに折ふし川ばたに人多くあつたま居てこれはくといひながらたれひとりわけんといふものもなありしるは一町はあり流れて幸ひ川杭にありやうりくにてあがら給ひしるば人々よりのとるさて御坊は運のよき人かな何としてあがられけるやといひしるは一休打はらひてされば我川

へはまりたればこそあがりたり上りたればこそ生たれさまで珍らしき事にはあらざりけりと申さるれば人々聞てさてく口がしとき坊主のなごつと笑ひて打過ぬ

○爰に山里に或ものつまさる男とひそののたらし互に情にやのくちざりあさのらざりけり或夜のむつとにいつがいつまで斯はしのびあんやいのにもしておつとと殺して思ふまゝに契りなんやと互にうちとけて談合したくみ出して或夜男は酒としめてゑい臥さしめ夜ふけ人しづまつて後まことと二人してとこの頭に針とうちてころしさて家に火つけ焼殺たる体にしうたがふ人もなきやうにもてあし死たるのばねにとりつと聲とばのりになきさけびけり折ふし一休通り合せ此女のなき聲と聞き不思議のれもひとなしたまひてあたりちのき人になづね給へばしるくとのたる和尚さ給ひて此女のなき聲はなれたるてうしにて更にあなしみの聲にはあらずふしきなりといひて通と給ふおとにて今の修行じやい人間にてはあるまじむかしよりいまにいたるまでけんとなん放逸の在處へは弘法大師のさたり給ふと言つたへり定めて大師さまなりとればなたり聲はありきとてあらし給ふは奇代ふしぎの御僧あ

とてみあくゝのんじけるとあり

○世に一休和尚は天下の活佛ありしとして諸宗どもにとしなへて尊ひけるなれば何れの上人長老もあがめ給はずといふ事なしあるとき黒谷へ御参りありしに寺中の人々一休と見奉り申けるは今の世に活佛と人ごとにするはこの禪師なりよき折のらなればいざや普寺に侍る善法然の畫像に賛とたのみ申の念佛無間とておさける日蓮宗に見さて禪宗の佛心宗だにのく此方の祖師は尊み給ふと高言にせばやのるき僧なれば定めて賛し給ふべしと申ければあのか

儼しかるべしと相談してやがて一休と方丈へ請じ申件の畫像ととり出し贊とたのみけるに案
のとく易き事なりとのたまふゆゑ則硯と畫像と御前に出しければさらりとひらき一覽あり案
とりたまひ先善導大師に贊していはく

末法出現名善導 則是彌陀化身也
濁世末代導惡人 一切衆生易往生

法然上人には

傳聞法然活如來 安座蓮華上品臺
尼入道同愚痴輩 一枚起請最奇哉

と即時とあるはしければさて社とておのゝ大ききよろこび侍りて此兩佛に淨土宗として
く贊といたさは家の事なれば手裏なりとて又日蓮宗があざけるべきにあらうれしき事
なければこの謔と日蓮宗に見せて大きに威言とぞ申ける其頃は殊に日蓮宗と淨土宗とは中
しくて犬のいがむが如く牛のつき合がとく眼とぬらうしければ日蓮宗の贊を見て大きに
はらと立一休とろねみにくみける其中に一人申けるはいやく一休の御心はものゝごりの
なき直なる御事なりいざや日善大聖人の像とらゝせ贊とこひて見んわれはどの褒美はあ
しと申ければ尤しあるべしとていとぎふためきて畫とらゝせやがて和尚の庵もち参りて贊
とたのむよし申ければ元よりある御僧なればやすき事とのたまひ彼の畫とひらき御覽とけ
るに此像はさても少くのさてうと賣なる衣とさせけるよと笑ひたまへば人々申けるはさん候
いゝにもけつらうに大きあうとせたく存候へとも實は先日淨土宗法然が贊とじまん仕候ゆゑ

訂として候ひてとるものも取敢ず先ちくりけにのゝせて参り候いとぎ贊してたべと申せば心
得たりとて先の法然の贊と所々と直して

傳聞日蓮活如來 香座則是妙法臺
尼入道同愚痴輩 一遍題目殊勝哉

となされ其奥に

ぼうすく小坊主まめの粉おぬりばうす

とぞあそはされけるとや其頃また永觀堂の住持黒谷の贊のよしとさきてよき寺ののうのつ
なりと浦山しく覺しめしのはどるる御僧なるに何がある此方にも贊たのみ申さんとてまづ一
山の人とよ呼よせ談合せられければ其頃一人申けるは何と申までもあるまじ先宗の祖師あ
れは當寺に傳る半金色の善導大師の畫像に贊とたのまれよと申せば各々申やうげに是は
代々當寺の重物なればこれに増したる物あるまじさらは其方便僧に成り給へとて彼の半金色
の善導大師の畫像と持せ一休へまわり一休に對面して申けるは黒谷の贊のよし承りあまりに
うら山しく候ひて是まで参りて候あはれ此方の善導にも贊とあそはし候へと申ければこれ
を安き御用とての畫とひらき御覽ありたちながら一筆さらくどるさ玉ひ元の如くした
め使僧にわたされければおたしけあしとて謹んでいたさいそぎ永觀堂へ歸へりしらくの
よしと申ければ扱もある御僧のな本望とげたりまづ一山とよびよせ贊拜見せばやとてやが
て人と廻しければ各々よろこびはしり集るさてその畫像と方丈にのけ拜見しければいゝにも
大文字に歌一首あり其うたに

くろらんころものその黄になるは

菩薩大師はことたるらむ

とあるはしければみる入つとわらひ興とさまと人もあり感にたえたる人もありしが今のよ
まで傳へて天下に一輻の名物となりけるとのや

邪婦戒といふ事と御はあし申さんさても月日のたけは手間のいらぬ事入日のとれもへは明
てひるになる又八ツ七ツの鐘は諸行無常とひききぬると余所に聞事のあとして此無常といふ
事とさへひとの心にわされねは余り後生に遠き事はなけれとも世ありく〜と千年萬年も
あるべしと思ふよりあらゆる罪業とつくる事なりよう氣と付て見たまへ目と耳にふる、事
一つとしてながらへ止まる物でなく人の死別れ行はさのふまで語りあぐさむ男女今日はひ
あしくなり願死はものといひなるらも怠たゆるやうのとは世間に多き事なり花のちり木の
葉の落ち露霜のさへ雲煙の行く水のながれのへらす泡のはなく淵わせになりあるひは
山もくづれて海になり川もくがちとなり長明が方丈記とみれば地震火事お幾度の幾千萬の
家居もめつしあるおと家とあさがはの露にたとへて書たる如く一物として常住なる物よ
りさばる物ことしな無常なれば我命もたのまれそしおれはうつりといつても十二月に思ふ
てくらと内い、の無常の刹鬼がせめきたるとさ俄にわはてさばぎては詮ない事なりかねて
臨終の用心が第一とや談義説法も明日の日のあると思ひゆだんして夕とまたで死たるとさ
は悔ても甲斐なき事とつね〜合點したまふがよしある人のうたに
あすありとおもふてゝるにはだされて

けふもむなしく日とかくりけり

といふにむろのれよしれぬは人の命談儀とさくもけふがのさりなるとおもへは一事と聞
も大切に思ふ道理なれ、此心得がよしさて談義はなしうちつゝいて大悲經の文の中の種
字に心と付てはなしました昨夕のは彼の人と殺し子とこそせしとに付て殺生のひくひとや
ましたが逆ものにとに殺生戒よりついでに五戒のすがたとはなし申せとの御望もる今晚は邪
婦戒の所大ていあら〜申ませう惣して戒律については五戒八齋戒二百五十戒五百戒十重
禁戒四十八さやう戒とて異類異形のいましめなどは梵蒙經四部律等にあまたなる中に儒は
五常とつて國とふさめ佛法は五戒とつて悪とやめさせん其こゝろはせはかなぶ物に侍
る先此邪婦戒といふ文字はよこしまに婦とあるすといましめらる我妻にあらぬと妻にする
とな邪婦といと申さるはとに此戒と在家戒とも申ると出家にはいらぬものと思へとも出
家にもさま〜あり是はた〜の身のうへと思ひ給ふがよひはづの事妻といふは女
の手前より男と妻といひ男よりも我女と妻といふは男女通する詞なり鹽屋判官が妻の方へ
ある者文とつらはしけるに女の方よりの返事のうたに

さなきだにれもさがうへのさよころも

わがつまならぬつまならぬさねる

とよみこしたるは何れもおぼへのある事此やうある不義の事とするゆゑにひらし今の代ま
であられぬ死とするものあまたあり何國も同じ色の不義京大坂には殊に繪草紙に賣るゝも
のあまたあり現在に恥とさらすは淺ましきことなり扱未來のことは經文の邪婦の罪衆生として

地獄が畜生におちりし人の中に生るれば一種の果報と得る一には婦貞良ならず二には二の妻相争ておのが心にしがはすと説給ふはじめの婦貞良ならずとは今生にて人の女房とぬすみたるもの後生にたましく人間と生まれ女房ともちても其女ひたど又余の男にあひて我心にしたがはずとなりるれも急にはらとたて、又間必めとあさへてくつてと心意のはむらやもやすうなると婦貞良ならずといふ義なりとこれみな報ひやうのしあゝあらはすもの二に兩の妻相あらうふとは或は本妻の手つけねたみ妾は本妻とねたみ針とうちたりとくがひなんとしてそねみねたみたるは大きな禍ひとなる誠は國に讒言の臣下あれば君らあらずはるふとは聖人の事は下々に多きものは夫婦いさかひあり大きな聲としてつらみあふやらなくやら敷がねとはなにのけて後はづらしき事とわすれて常はのくすこともわめさちらしあたりはどりの外聞も方便もへりみずとがもあき鍋とわるやら釜となげはるやら道具家則たまつた事あし何事かと思へばのりんさより事れこりての騒動これははやとてものんにんもせまし又それなる時宜てもあるまじとおもへばいつの間にもやらなき寝入してたつた一夜のうちに中直り何の氣もないのはしてゐるせつらく人のあつらひ中直しのときは角もゆるきつ相して明朝はるれに引のへ小ばしなしあるはさてくおのしい事と人の指さしとして笑ふとしらぬといふ其人もおのが非わ見へぬものにて何國の夫婦いさゝらもみなにたる事は等のものいひ口舌があれば面々家職におこたりていのはと損のたつ内證のつふれやらしれず然どもたびく有ゆゑに終に家のはるふすいさうといつれもおもひあたりあるべき事也るれまでは遠い事先此邪淫戒といふ事は天下の御法度あれば道と心

さし義理とたてんと思ふやどの男は念もあゝ非道はせぬ事じやや一心さへみださねばうのまよひのやむといふはあしと申さん

◎正月元日より三日の元三といひて歳のはじめ月のはじめ日のはじめなれば一天四海の人々のうしこきも恐るるも愁あるも愁なきも貴さもやしきもいはひよろこばざるはなく屠蘇白散にはどぶろくなるも髭につけ御鏡すはるとて尻もちなりとも空のけしきものどやかに霞わたり大路のさわりさまは誠に昨日にのほりたるにはあらねとも空のけしきものどやかに霞わたり大路のさき松立わたし家には長き代のためしとしてしめ細ひさめくらし昨日の夜半過るまでは人の門打たゝさて何事にあらんことくしく足と空にまどひたるもた、一夜あけぬれば引のへ心もゆるく、と又晦日の来るべき心もなく野邊の小松に千代萬世といはひそめいつ死ぬべきものとはなしに萬の事といみあられ朝の露に名利とむさはり夕の陽に子孫と愛し蟻が茶うすどめぐるがとく同じ事とぐるりく、と五百七十年七まがりといはひて世と秋風の心は露ちりほども人心と一休とくしく思しめし誠にかろなるな朝がほの日蔭待まもさのり久しき花とあめめかけるのを青天に羽とふるひて樂しむ間もあき世中に葉に箔ぬる正月とはたゞ時の間の煙とありけん打見るよりい物見せん人々よと墓所へ行て觸れとひろひ來り竹の先につらぬきて正月元日の早天に浴中の家々の門の口へこのとくしくと彼されうへとさし出し御用心く歩行たまふ皆人いまはしくとて門さして居けるより今に正月元日の門戸とさしけるありといわりしるるに一休と見参らせて或人のいへるは御用心とい尤しとくなりとたはひいはひのざりても終にはみな人のとくされとも世の習にてのくいひよりこぶ折に



其むくつけるさしやれのうべとば家々へ出さる、事は御違成すやと申ければされば我よもいはひて此されのうべと各、み見ざるなり目出たしいふといふ、心得けるぞやむのし天照太神岩戸とひらきたまひしより事おこるといへども此されのうべより外に目出たき物はあしとてよめる

にくげなき此されのうべあなのしこ

目出たくのしくこれよりはあし

是見給へ人々目出たる穴のみのこりしはめでたしとこそいふなるぞ皆人あくとはしるとめどきのふも過し心ならひにけふとくらしてあすの川の淵瀬つねならね世也とは目に見ぬのしに風の音にもれどろきぬ人々に用心せよと思ふてたゞ人は是にならねば目出たき事は何もなしとのたまへば諸人これと見てさても賢き聖とておがまぬ人はなありけり

○一休のものと犬あり或とき子五つうめり其五つの子のうちひとつと親いぬにくみて乳も自由のまさずしていがみくひふせけり下人とも此親犬にくみうちけるがある夜和尙の夢につげてぬふ我身は前生にてのしはといひし遊女にて侍しが五人の夫持て候ひしが四人はこになさけある心ざしにて淺らさ思ひしが一人はいつわり心多くして却て我とわそらはしくせし事たひく侍りしかば心にく、思ひあふらうち過ぬ今此五人の子はの五人の夫なり四つはむのしのなざけ深きが故に乳のましめていとどしく思ふ也一つは我とあやめし夫なれば乳とさへのまさん事心にく、候ひてかく當りしありとにまやのに前生の事とありくどなたりしと一休且那のうちへはあし給ふと也

○七條邊に有徳なる町人ありあるとき佛事供養のために出家は申に及ばず乞食までものくこと慈悲としけりあるとき一休と申入しゆく不審ども尋ね次第に問ていはく何れとさして善としいづれとさして悪とするや和尙こたへていはく善悪のきりなし只善悪をしらんとならば其よし悪となすみなもとにあるべしおれに行て尋ねよと答へたまへば亭主尤も感じける和尙た給ふ折ふし雨降ければ亭主暫く待て雨と止給へと申は一休申されけるに
ふらばふれ降らすばふらすふらすとも
ぬれて行べき袖ならばこそ

と言捨て出給ふ

○加茂河らのき邊に五郎右衛門と申ものありおれがうちへいつの頃よりの犬一疋來しが打ども去らずある日人と頼み二三里外へやりけるが又踊りおける此度はとらへうち殺してつるにまた同じやうなる犬來るとき必らず夢見あしければいひ、心もとなくおもひ一休へ参りくたんの事と一々はなしけるに和尙のいはくゆめく其犬にあらく當り玉ふなそれて其方が前生にて其の犬のものと借ついかへさずして今人となりいぬとなりてこゝに來れり全くわたくし事ならねばすつるともころしたりとも業方の犬なれば其家とはなる、といふ事あるまじ實々うしなひたぐばおれに米一二斗はどあてがひおきたまへ喰盡たらん時はあへるべし左なくば何となすともあへるまじとぞ教へ玉ふ左らばとて歸りて米とあたへ置けるにあり夜の夢に汝われとなやます事たひくなり打ともころすともうせまじされとも今はあの佛和尙におしへられ我れとめぐむ事まぞくなりしおれば汝がもの喰盡す事やうく一斗はありなり此間我

につらくあたる事ありれといふと思へば夢さめぬ此者いよくおどろきさては和尙のとしへに少もちがはさりけりと猶々じひとほせしけるに彼がいひしとく一斗の米なくなりてのちくだんの犬のきけそやうにうせけりふしき成る事あり

扱知恵にまよふ女意といふ事の候もろこしに林茂先といふ人ありしが學文しやあれとも前世の因果のいゝにして貧にくらされしが其隣に大きな分限者の文もうなる仁の女房わが男の不學なると氣のどくありの隣の林茂先が才學にほれてある夜ひろのに忍びきたりて學文のまよとほとく音つれたると誰ぞと思ひてさしのぞけはせふしてこふして執心でござつてと袖にあまる涙とつゝみかねてのくさまよひきたり侍るとふのく思ひ入たるやうそにてくどきけるたれぞと見ればとなりの内義也もとより器量も人にすぐれとに金もちの奥さまなれば我がやうに貧なるものがこちらの戀しがるとも今せきの後家さへ承知そまじきこれはうたしけあき事御意はおもく下地はいやてない事夢のうつゝの最早人しつまりあたり誰とほゝあるものはなし明日は閑浮のちりともあれこれはじきに及ばぬところなんと若ひ乗此やうな事あらばなんといやとは申されまじまわ十人が十人なら飛つところと此林茂先じつとこゝろとじつめしはらく物もいはなんだがさそが學者といはるゝはせあつて血はせな目とむき出しの女房とさつとにらみつけ去ては其方は人てなし妻一人もちて居なららゝる仕のたの淺ましや天地がくつがへるとも道ならぬ事と某はいたさぬそはやく歸られよとせふたはたとつると女房はなみだとならし是はせに申事とつれなくもへし給ふのせめて一夜なりともとなけさてたちのさうしと林茂先はしり

いで李下に冠とたゝさす瓜田ふ履と直さそとこそいへまたあまめのしきくとき事ととて小がいなとりて引立のへしければ力およばずとく〜とたちのへりぬ此林茂先は其明る年つひに官位に經上り榮花にさのへける道とまもる人のこゝろはいのふちがふてゐるではある今とさの物讀ても道と聞ても耳と口とにねばへて居なら不義なる事には辯句もんもなる男の律義あるには劣りて悪事とするがちなり是と世話にいへる論語よみのるんぞしらすといふは此事ならん皆さまがたも朝晩口では結指言せられんがうれば世話しりのせはしらすといふ物ぞのし面々の身のうへは柵へ打あけおきて人の噂はいひ交ひものでござる又利口さふ申拙僧もろれば同じ事あり人の身の中でのしこひものは上下二まいのくちびると舌ばりあろくとも大事な事心と身とに先かこあはせられよ此心の萬事に通る肝要のこゝろでござる或經に人となつて他の女とぬすむものは鴨にうまるゝと説王ふは何たる因果有て鴨には成ぞととへは鶏のさじのといふものはめい〜に雌鳥と一羽づゝへて道とたし鳩といふ鳥は別て其やうなる事のさびしい物にて都にはない田舎では何鳩といひていろ〜羽色の見事あるとあつめて家を作りあらべ置にも雄鳥のゑとひるふ内にも隣鳥留主のうちちよつとのぞくと見ると其ま〜とびあがりて其男鳥とくひころすはせにせちがひ又わの女房鳥もつゝさまはりせちがふはいのさまとなり男鳥ののぞくらは合點の行ぬしゝたといはぬ斗るれば〜少々にても其けふらひなる事もならぬに鴨といふ鳥は池やあせ道にいろひ事むらゝり居るに是は誰の女鳥これたれの男鳥といふともあく常住あられとたつるやうに一日お男鳥の十羽や二十羽といふのまとしらす男鳥もまに女鳥の五

初も十羽ももちてあちらこちら相逢ふこれ此身になるもの何の成どおもへばこの間男したるもの女房とぬすみたるものがみな此鳥のいに生るとしりたまへ此やうなるものに生たれば好色のわるひ事と折角して思ふまゝふ不義となされ御満足ではべらん願わすのある樂みに永劫のくるしみとまふくる事はあまりに愚かなる事なり過たる事はへらす今より思案して見たまへ別にあらざる事もなく刹那の娯樂に現世後生ととりうしなひ苦しむはいたましきこと一分別し見てやうあらばこゝろやそれに付去所に男女より合ふるしきけんへはせられたはなしといふて聞せさせうの先未來の物のたりと一寸いたさふ

○或人一休お問いはく人は死て躰なくなりはつれ共魂はとまると申のさやうあるまじき事たましひが死なそにあらは躰はあくとも矢はり其まゝ居て物のたりなともしきふな事にてあるまじき何れふしきなる事にて我等が存るには佛に成たるものはたのしみにはこりて愛の事とば打われそれ來へき心は露もあるまじ又地ごとくへ行は鬼せもにのしやくせられて少しもあるまじ又のやうにてもなきものやらん世中に冥靈とて死したるもの、來てさま／＼の事といひなせすると承る何れ是はいのなる事にて候や和尙のいはくさればわれも其儀はしらす候へども若きとき談議なせとちと聞たるが誠のうそのしらぬたましむといふものが有て佛とも鬼とも成けし候のくせものがゑんま王とやらんの前にて公事奉行の手にあたりしやばにて作る罪とくる鱧の赤がねのはしらねせも帳とやらんにつけておき鬼に見せてまづ是程の罪人なり急ぎ呵責せよといふは色々の鬼どもが受とりてさま／＼のせめにあはるとよししやばにて作るつみはせせむるといふさりならん毒藥へんまて藥となるといふ事あればさのみつ

みの多さもあなちになげくべき事にはあらしと見えたりあくいひしときは

作りおく罪のしもみはせあるならば

ゑんまの帳につけてこるなし
とあるとき鬼といふものも鈍なものなり釋迦の一代の藏經はみな人間といためんがためなりあらつらにくの釋加とのやいろ／＼のうそをつきたまへりうればとどへは一字もいはぬといひ給へり又さふるとれもへはしゆそさんの語には一佛浮土くわんけんほうのい脚木國土悉皆成佛さう木ともいひあらちとひた物に身ぬけばありいひちらし人間は永代まわひの身にちあらしてありとれもへば又うたふも舞も法の懸柳はみどり花はくれないなれもしのはるのけしき

しやうといふいたづらものが世にいで

多くのひとまよはせるかな

○去さしきの天井に蛇とあきておける其座敷にて酒と飲けるに盃の中へ給のうつりしとのみてそれより煩ひけりある人きたりてわづらひのやうとしの／＼の事にてそれよりやうあわづらい給ふよしとさけりと問ふにいのにも其通りなりと答へければ或人の申さるゝは左やうの事あらば何ども氣分あしくてれきふしも是のみ心にありてわづらひども成べしさりながらさやうの事は一休和尙へ行て仔細と御たづねあらばしるるべしと申さらばとて参りし／＼の事にてあくなやみ申也いなる事にて候や和尙の御しめしに預りたくぞんず是まで参りて候と申ければ一休聞給ひやのてしめしたまふ其語にいはく

まぼろしと知節敵はばうべんとなさず一切のしよばふは皆是まぼろしなり何あれば水中影像とじつなりとおもふや悪也早くもたぢが自心とあき

らめよ

どて扇をもつてうくはたと打給ふまづ右のころはまぼろしとしりあば方便は有まじ一切もろくのなまわさは何事によらずみあぐなり水のうちらうつろふのげとみて實のじつなりと心得やまひとそるるれあろのなる心なり早みづのらの心と納て見るまとは實の無のあらはるべし其心納るときそなはち病本服すべしとしめし給へば此ものやめて得通して誠によくくしあんするに天井に繪のあるいふと事思ひ當りるれよりして心をさとなりやがて本ふくしけり何事も善悪の源とたづぬるときは心の一ツより生ると見へたり扱こそ三罪准一心と

いぬり

○伏見深洲の里に森本善兵衛といふものあり其内につらゆる下女もとより邪見の女みて朝夕の飯の残りどむさしとて非人にも呉ずして皆堀へ捨しに其ことく皆蛇となりてはひ歩行家内へ這入しのは家内のもの人々をそれいふ成とやらんとひしめさける其折ふし一休其近所へ來り居玉ふよしとさてやがて使ともつて請じ奉りここのよしとたるに和尚さこしめし扱をろれば笑止なる事な是は此身上のくづる、瑞相なりろれば全く蛇にてはあるまじ皆飯の残りしと捨し勢ひあるべし其蛇とのこらず釜へ入てたきて見るへし必らずめしとなるへしとのたまふさらばとて教にまのせ皆あつめて鍋に入一休教呪とじゆし給ひたるせたまひしに成程されいなるめしとなる此飯とあの女に變らずくひ盡させよ少も残るならば身代あやうなる

へしと仰らるゝさらばとてあの女ふくはせけるに皆喰つくを事ならずして又のくしてすつる此下女あるときれの在所へるに道にて蛇にさされ死けり口とへすいくはどなくて天罰あたりうせしはあろろしき事なりさるほとに一つ女にても噴吐したるあらは決してたるそのにぞへあらずとて和尚旦那方にて折々御物がたりあると今こゝにしるす

さて男女いたづらの評判あがりしと御はなし申さん此ころ町と通りたれば四五人うちよつて何やらんせんさくしけると聞ば世中に不義として浮名ながしたるもの、事と評判して一人の男がいふやうは世に女はどいたづらなるものはない一人のつとに定まりて居ながら不義なる事としたるはもだんのならぬ世界じや七人の子わあそとも女に心ゆるそなとはよふいふた物といへは一人の女房はらとたていやくそれはわるい了簡でござる男といふものはどあさはあゐいたづらなるものはない我手前に女房一人もつて居ながら人の女房とぬすみたるは正眞の生盗人じや其くせに男の心と川のせは夜に七度あはるとはよふいふたものといへばあの男ちとせいていやく男といふものはおとけにもいふて見るものしやに合點する女がいたづらものといふ詞の下よりいやく女の方から盗でくたされといふ女房がいつくにござるとうしても男がわるいや女がいたづらものどたかひに大きなけんくはにありて其あたりがもやくへへりましたこれは婿のあゐぬせんぎては侍らぬあゐんぼう男の口説たども女の合點せねはならぬ事なりたとへせのよふなよい男の火とくへといへはとてくひはせまいが下地のいやであいら御意はよしとついらちもない事になつてけるそれはいひうける男がひとりわるいでもなし女もまたあしく世の中にはまたなるは

を律義なる男に女の方より文なとやりてくときあゝるがあればそれも一のいにはてなしの
たしつまる所はせちらへもた付てきすは付られぬ二人とも悪といふのよき了簡といふ
もの也是程になき事さへ二人でらちと明でなはぬ魚角互に心とひとつにしてしめし合せ
ねべならず千人萬人の中でもせまひとおもふ事我心ひとつてたしなみやとし此界よく
合點すればせちのよいわゆるいのせんさくはいらぬと思ひ給へ然ども人にろゝのめされぬや
うにこゝろともつものはまれある事なりみだるゝ心のうは氣まははぢとさらそ高いもひ
くいも身と持てこなひ恥ぢよくともふくる事は皆此やうなよわき非義なる心よりこる
事なれば若ひ衆はよく合點めされて大事なりとおもひたまへ女の心もちのうへは梅枝のや
さしき枝お春の雪つもる如くよはくはのめき心の内は石金もあたくもち給ひてあり
ろめにもあたるふるまひとせぬように化粧ものこしにも氣と付たがよしとさる上の方の
教訓の文に遊したるの眞實なれども今ときは皆さのさまにして上はあたく見せ内心はよは
く心得るはひう事の第一じや女義に善悪のこゝろ申さのせませう

○愛にはなしあり其とやいへる人の奥方相果られけるに今端のときこの遺言にわれら此年まで
佛とも法ともしあすしてゆく成はつるありことに女はつみふのさよし後の世いと心もとなし
承はればむらさき野の休さまは今の世の達人とやらんいふある間我等が引導は和尙さま
へのたのみ奉りて得させよと念頃にいひひきしらは妻子ないく休の草庵へ参りて其山の
くと申上ければ其れまで佛とも法とも知らずはたの事にてはうのみかたし去なるら我等
が一句とさづけそくふべきなり永辭にせん間鴨川へつれ行とて其まゝ座と立ち打つれ川のは

とりになりしのは其死人と出せよとて和尙の死人の首に繩と付けひつらけて川岸に立て
のたまはく
河ふねとめてあふ瀬のなみまくらうき世の夢と見ならばしのれどろの

ぬ身のはらなまよ
とて川へさんふとあげそてはや一へり給ひける妻や子をもれどろきて御氣ももしやそゝる
なるのこの一句の江口とうたひ給ふなりゝる事にてはうのびのたしとての死骸と引あげ
念頃にとさめてある寺の上人にゐん導たのみければ其宵よりの夫も子もさまくになわな
き夢見けるは一休の御引導にてうのみしものよしなき上人の引導にて引もとされて中有の
旅にまよふに又一休さまとたのみて我とそくはせたまはすは夫子とも取ころし手と引て三途
の川と渡らんとまこつくと夢まぼろしに見へければ是はどおどろき一休和尙へ参りて其由と
しゝくと申上ければ我よく引導せしに又異人たのみしゆゑなりとてふたゝびのへり見給
はねば親子のものさまくになげさしらは扱も不便の事やとてうづみし死がいと掘出させま
た加茂川へゐたけ行川岸に立て一首
大水のさきにならゝとちがらも

身とすてゝこそうのふせもあれ
とてがはとしのひと川へなけそてゝへられければ其夜親子の夢にありがたき御引導にて今こ
ろうかみけるるとて白雲にうちのりて西の空に行ければみな人ありあたくを覺えけるとなり
○一休和尙山婆のうたひと作り給ひしときひぬい由に中よき人とはしければ談合に登の給ふは
五六七

傳われれば衆生あり衆生あれば山姥もありといいたしける此次といふはせんとのかまうは彼人
 もさそのの人にて定て柳はみどりになされつらんと有ければ一休さてもよく推し給ふもの
 る柳はみどり花はくれなひの色を授人間に遊ぶ事と仕らんとのかまへばさころといひて興せ
 られ誠に同氣相もどむる心さしいとはづのしく思はれけるさてよき次手なれぬ山の堂社と
 拜みめぐり給ひしに山法師とも是と聞て一休はあくれなき能書あり何にても書てもらわんと
 て手に硯紙と持きたりてたのみしるば一休思しけるは聖道のあて字とのや定て文盲なる
 法師ともならんと何かな書て取らせんといふにもよみかたき一句さらくと一筆に書ちらし
 て遣されければ一山の僧よりあつまりの能書の名僧此山へ來る事は後の世までも寶物と
 も成へき語とらへせ置へしとて其中の老僧のいへるは先より各のさてもらひけるは一字もよ
 めそ又語も余りにみじくくて此山の寶とも成たしいるにも大文字にて長く書てたべよみ
 たきは有ても詮なしのにもよみ安き事とたのみ奉ると一山とも望みければ一休のかまひ
 けるは紙筆は候の中々古へ大師のあそばしたる七八尺の大筆ありて紙は何ほどなりとつぎ
 べとし申されければさらば紙つらせ給へ御望の通長々と大文字と書よくよめると仕へしいそ
 ぎ紙つがせ給へとありしるば何ほどなりとも紙は御のよみ次第とてひたもの長くつぐはさ
 にぬい山の金堂の前とり坂本の人家までなるしくも紙つぎければさらば筆とぞめんと
 て墨たつふりとよくませべたど紙へるさ付て一さんあけて不動坂まで一筋にひのれてよめる
 る法師たちのかまへばいや何ともよめそといふ又墨つぎて不動坂より坂本まで一筋にはし
 り引にひきつよめるのしくとわめき給へば一山の法師たち肝とつぶしいや何ともよめずと

いへば是はいろはのあさきのくたりにあるしの字なりなるくどきとてよめやすきは是れと
 のたまへば皆人興とさまし扱も聞及しよりおどけびと哉と一度にせつと笑ひて興しけるとな
 り今の世までも其しの字ひぬい山の寶物とありて有けるとなり山法師たちも望し事なればい
 やともいわれぬ御作意とみな感しけるとあり

前夜申おさました女の賢愚の心のもちやうと申はさるところにうまれつきのうつくしい女
 房衆がありしお亭主の留主のうちに行し人あつて内々笑貌よき内義あればあるへき事と思
 ひよきとさきとくれくどきければ女房何となき顔にてそれは添るき御執心其うち折とみ
 あわせて御談合申べしといふに男うれしさをさきりあく此上は亭主とたらうそまての事と前
 方よりむつましくとさら亭主もさすしければ無心もいはぬにこゑたより金銀も氣と付て借
 などしけるに男は其心いれどは夢にもしらす後日のため手方書申べしといへば彼の男隔心
 なき跡にて合力とはあまりあまづりがましけれどたやり申べしとて金の四五兩もつらは
 して二三十日も日すたち男のひまと心がけひろの内に儀にちのづさせんと申たる事御
 談合せんと申されたる何と談合も今宵はどよき首尾もなしとしあだれらるうへは我身ながらわがま
 たらとたしされば談合と申は御せんしの通り私も男ともちたるうへは我身ながらわがま
 とならずこなたの望のとふりと亭主へ談合して見るべしと思ひ先日よりいひ出そよそがも
 なくてとやのくと思ふうち遅なはり申たり今少しまらたまへ明日は亭主と談し合亭主のゆ
 るして受たらば御心にしがひ申べしといふに此男大に驚き談合とは御亭主との談し合の
 るれば何とも迷惑なりさて念項になそなるに不義なる事といひのけしとさげしまれんも迷

惑なりとに短氣なるうまれれば我等が命にうららんもしるべからずさらば此事は決して
 思ひとまりのさねて申出すま必らず御亭主に御さた無用ありとさま／＼ことわりての
 へり其のちはたま／＼行せも此女の手まへもなんとなくはづのしくなりて後／＼は終に遠ざ
 るりましたなると此女はのしこい女房と見ゆました又人によつてたま／＼不義とせまじと
 思へば人の害にゐるとも思はずたけりまはるもあり去年の冬であつた日ころ念頃に入入
 たす者がひとり來り語りまそるは夕部さる所にて二三人はなしに参りましたが元來心易き
 方ゆゑ夫婦衆との一緒にこたつへあたり四方山の咄しのうちひとり男ろさう者にてい
 たりたりけんらの内儀のふともとのあたりへ手か足がさはりたさうにござるがの内儀其
 まゝこたつとつら立といふ物にばつと立て人の女房に手とさそは覺期してまやるのよ
 女とはちとふ所ころ多きに男のあるらばこれはあにとしたるじだらくぞやたいづらな女に
 はそのやうな事したらうれしうはんに木のそらへのばりやるなと大聲上て勝手へは
 りましたる此手さしに男たれと知らねど自身に覺われは顔に血とあげ巨達のやぐらに顔
 と付て夢になれとめいわくするわたくしはそばに聞何とあひさつものしやうもなく汗とた
 たらあさるたるに享主はさそが世間とひろくそる人はどあつて惣じてあの女は少しの事と
 も仰山にいふものでござる此やうによりこそつてあたるあらは手もわしもさはるまゐも
 てなれふぎやうきなやつにてはなしのじやまを申せしたま／＼の遊ひ玉ふに無亭主
 ぶりなごのく何れも御のまいなさるまじさて今のはなしの跡はさうでござつたといはれし
 にやう／＼色となはしるへりましたがこれは何と賢女といふせのでござるのと問ました此

やうなる愚な女もある世の中これはど人にきすと付めいわくのらせいでも女のみち立ふと
 おもへば何のさたなしに我胸のうちにてそむ事なるにに問男とせぬといふ潔白と見せ
 んとてたけ／＼しく是はあまりある事也能々合點してみれば此やうあひんしやんとはねま
 はる女の結句内しやうでいたづら事としてゐるものじやとさる人のいはれしものくあらん
 事ぞかしのく女は物事しづのに只心の内ひとつとどう持が道といふものでござること
 とさつとのみこんだるがよし成心得べし成實論の解あいはく愛慾無厭賊水と欲で其渴と
 増が如しとあるは此色慾にふける有さまは盤のあらさ咽のあらは物と仰山に取りこみてひ
 たもの湯水とのむ物の如くのんでもくわたるは事なさは丁どそのやうなもの又たとへて
 いは、犬の枯骨とのむにひとしと有は犬のひたるさあまりに死人原に入てしやれたる骨と
 くらふにのたさるものあれば己が口中とやふりて血の出ると知らず此汁は骨より出ると言
 て終に舌も咽も己がでにくひやふりて死すといふに似たりあつたるときにのわと先覺へ
 すくらふは愛欲さるんになみてゐんにならぬと何の事もうちわそれてまあるものも益
 み終にはなんなへとらへられてはじとさらし世の人にうき名とらたわれて我身と我心でこ
 るすはまよひのつとしり給ふべし戀の源とさがしてみれば濟とにござるとひふたつなる
 はに御はあし申さふ

⑤さて御目のさむる御のなし申さうさる田舎人はまめて京都一見のために登りけるに或人のい
 ひけるはろの方京都へ登らるゝならば文と一通ことづけ申べし所も名もしのどぞんせす定り
 京都は通り／＼明らのにしれ小路／＼は猶しれやそまよし承る何方にて尋ね候とも心やそ

くしるゝと申候間此文とまいらとる口上にて申さすたしに覺おられとけ給へ則名は
 さにし秋北春南五百の浪の立のへるとたづね給はれもし口上わとるゝ事もあらば此文と見せ
 て尋ね給へとて渡しける此男文旨なればいふより早く忘れさて都へ登り文と取り出し人に見
 せけるに讀もの有ともことばりのとふりしものなとりける此男申やうさてくさのどくな
 る文とたのまれしものな是ととけすして歸りたら頼まれのひもあくふがいなしといはれ
 んもはづのしたづねんとすればらち明すとやせんあくと案じわすらひしがある人申様此ふみ
 と千日千夜たづねらるゝとも合點とる者ありのたかるべし所詮この文ともち北西にむ
 らさき野といふ處に一休和尚とて名符者のまします此付に尋ね見給はゞ發明にましますはど
 に定て教給はむ早く参られよ先都ひろしといへとも是と合點し沙汰申ものはつて覺えずと
 ろたるとき此男さらは其紫野とやらんおしへ給れといふにくわしくおしへけるやがてたつね
 行き此よし申ければ和尚文の上がきと御覽して是は都の烏丸通りどころにて雨や千阿彌と
 たつね給へとくはしくとしへ給ふ此人さてくゝのたじけなたづねまへるべし并かし此義理と
 とてもの事にとさきさのし給へと申ければまづさにしあき北はる南といふときはみなあ
 め也五百の浪の立のへりといふ時は五百とふたつ合るに千なりさてなみとらくとさきに雨やの
 千なみとなりては讀くたらずととしへ給ふ

○又和尚御在世のとき下京松原通中ほどに制札あり其札のこしらへよふは板と丸竹にはさみ其
 竹のように錢と一ばい入札の書やう

一餅食たがるものゝ事

一酒すひたがるものゝ事
 一茶のみたがるものゝ事
 右之通くひたくば買て食べし只世中は皆錢也已上

年號月日

のやうに付立ありしが一休折ふし通り見給ひさてくゝめつらしき制札いゝさま是は子細あ
 るべしと立よりうゝひ見給ふに世の常のせいさつとはるはり柱と竹にてこしらへたりしは
 心ありけに見へたりとて供のものに汝はこの札を取てのへるべし我少し思ふしさいありはや
 どくゝと仰らるゝ男申やうは是は和尚さまとも覺へざる仰られ事なりそめにも是は定
 めて公儀よりの制札ならんしゝるゝとむげに念とつて歸らば後のわすはひいゝゝあらん我等に
 於ては御めんぬれと申ける和尚さま、給ひ尤も汝がいふは斷なれども去ながら子細としらねば
 道理あり先此札とはさみたる竹の内に錢あるべし此札とらばひ取べしどの書付あり早くとま
 てのへるべし若たゝりあらばなんじが身にはどがはのくるまじ此一休が心にまのせおくべし
 ろのは我あたさまとまん丸めし身なれば半錢も身に付じみな汝が穴一世にゝとらせん早とれ
 くゝとすゝめたまへひきやつもはしくや思ひけんさもあらば取べきとてはしりよつて押たよ
 しまづのあめと引てみてあつはれ和尚は神通にてましますとよるこびいさみ打たげそれ世
 の中にぬれ手てあはとつゝのむどはのやうのとといふらんとてちどり足にてむらさき野へぞの
 るりける其後公儀に此札と一休うばひと給ふよしはのゝに聞めし和尚へ使と立られけるに
 和尚のしてまつてやがて目代へ上り給ふ奉行のいばくゝの御坊何とて往還に立し札とらば

はとられけるぞ一休されば罰札のおもてと見候に餅酒はしくは買てくふべしの中には錢があるは途にとり候候も御公儀は御じひにましますのなとありがたくぞんじ殊に貧僧の身なれば取てのへりて候と申さる、奉行聞しめし根本これは君より御じひのために國々にたてられ此書付の面とよく合點いたしたるものは此ふだどうばふべしとのしたくなりよし、歸へり給へしこまりて一休のむらさき野へぞのへり給ふ奉行の曰さてもく、あの坊主ならでいのやうのふたと引ぬくべきもの、愛ぬすたとへ心と知りてうばいたく思ふともとやうくと思案しあるひの世間とは、有り即時あうばふべきもの、なれあるべきに何の、有りもななくばいしはきたいの坊主のな末の世に至るとも、うよふの坊主は二人ともあらじと感じ給ひけり

さて御約束の戀の源と申御のなしいたしませうまことに人の見と觀じて見れば地水火風空假に合してうすきはのうへにはりたるどころは男女の、はり有て美人もあれば見にくき人もへだてあれども彼一重の下は高さもいやしきも不淨穢らはしさうみ血のくさきと包たる斗書屏に似たりつばに色々のさいしきとして書とあきて見事なりと思ふものに、實と入たるがとくむさきものとのたとへなり先男女の八穴九穴とあるまづわたまに目二ツこれもやにといふ物がながれ出せしよるにしたがひて常に汁が出耳もあゝの、出る長崎法療といふ唐人のすがたしたる男が何やら陳ふん、んといひて誰ありとも耳とよくしてもらふとき見れば異なる異形のもの、が耳の中よりわきさてもくさくさたなきもの、が出るこれも不淨なり鼻のらは青ばなとたらし口よりはよだれとながし、或は口ねつありて人によりてはさしむ

のひにのあしもならぬはよくさいふはひがせる物もあり其外戀といふ其みなもととたつぬれば濟とにさる女の二ツありて頂上よりあうてまで一つとしてきれいなもの、のなしろれとたゞ有がたじりて戀しがりのしむ凡夫の心と佛の見通してさても、のいの乗生や誠にしたのしみといふ、此穢土といひて極樂といふ國、ふ生れてさむいともひだるいとも思ひでくらす極樂といやがる事、のむざんや何とぞしてすくいとつてやりたいと思しめせども、の、我等のたゞ此界、界のみに煩悩のりに戀とましていつまで、に遊びたのむれ能とあしたしと斗思ふより種々さまの罪とつくり又しても迷にまよひとあさねてのなる、とのあらぬは此邪淫といふひとつよりおこりてのせんさくありおもへばむさいものといひ少のまの歎樂に未來、惡道にださいして長さくるしみと受るとのやうららしいもの、すき扱邪淫と云の人のつまとあうすば、のりのと思へばさにはあらじ子とはらみし女とおあすも邪淫の内乳、祖母と犯とも邪淫ある、の非所と云て寺道場の内在家と持佛堂のあたりさて非時は盆や彼岸親先祖の命日、速夜さて、のわが女房の心さし有て精進する日持齋のときさのぬ男何の大事のあらふとて犯すと邪淫また非犯とて若衆と犯とも邪淫の内なりとある、經文、佛の説玉ひたしければ今さの出家も男色とあうすのまだ手がらのやうに人もねもひ其身も殊勝なる心さしてあると自慢しらる、の少と合點のしろこないと思へばそれにとり得があるといひ分となし先此やうなとまで邪淫戒と戒しめ玉へば覺て居たがよし何と思もすきもならぬ御制戒こそ、のまたあるいと戒門に就てのそれ、四重四提二不定僧殘滅靜、舍陀、單陀、五戒入齋とて、さうもならぬ動めが侍る爰が了簡の付とこるさ、給へ五戒の事、のさて置

りかたしこの法師も唯してさのせまされどさどらぬ内の心もとなしさて經文などみ給へ女犯は七百生三途にち非犯は五百生惡道にしつむとあり女犯といふは女と犯と事非犯といふの若衆とかかすせのひに人の數何萬何億あるふやらこの二つと犯さぬものはあり然ばいちにんもほごけおなる事はさておき皆々惡道へおらませうなれど落るにさまつた事いふふとあるの佛の戒しめられたせられたと破るのらはれちいで川ぬ事定めて惡道のせめり往生要集其外方々談儀講談にも聞玉ふべきがこいとも苦しいともいやといわれぬ荷責にあひ申そと思はるこへ落まいとて多半後生とねがひ寺參する事やがとくなく我うばんぶの力で地獄へおちたまひといわれず佛菩薩のありがたいといふが大事の所なるぞ然にあみだ如來末世濁惡愚顛なる惡業深き身の一戒ももたぬ惡人三世の諸ぶつの手とうちらひ玉ふ凡人と救ひ玉ふんと御誓ぐんむあしおらず不取正覺と誓ひ玉ふ此あむみだ佛ととなへ奉れば身の不淨にあらふとも戒律とたもたぬの罪深き惡人と方あみだなればこそ助玉ふ一心不乱の念十念の御念佛のくどくによつて八十億劫の生死のきつなとらりととしきり弘誓の舟にとび乗と大慈大悲の還手の風と揚てせつなの詞に極樂に往生するの何とありがたい事にて侍らぬの扱又この法華經に惡人の提婆のしめ龍女と女人の手本とあらひ乃至一不成佛ととき玉てたゞ一遍の南無妙法蓮華經に御身御佛とどくうたがひなしとく惡業のさんせすとも只しんくのひとつで往生成佛の決定と思ひ取てとなへ奉るより外のるし能たねといふに此念佛題目わるい種といふが此邪淫されにて種

○の字の心がすみました又御咄しの次にいたさふ

○ある人牧溪和尚の御筆ありし靈照女の繪と持けるが一休和尚の活機なる事としたひ讀とたのみ申べしとてやがて一休の御庵へまいりしものよしたのみ申ければそれ社安きとなれ靈の贊して參らせうと筆おつとりたまひさらく書ものものに渡されければありがたいたいささてもある御僧よるとよるこひ内へあふり友たちともよびよせ日ころの繪に一休の御贊なされ下されしどのたりければおのく拜見申さんとやがて床にのけて拜見しければあるまじりに

汝が親の策作り

馬祖にたまされて

齋と海あすつる

阿龍居士の娘

と遊しければ皆人よこ手とうちさてもたはけたる御事な龍居士も靈照女も唐土にての賢人なりとみな人いひ傳へしはどころ定て左様の心ともあそばさるべきのとれもひけるに格別なる御事な中事に天下の活祖にてましますとみな人感にたへたりけると也

○又一休和尚は金と山に捨玉と淵にあらべてもあらん御けしきなれば元より一鉢のもふけより兼てがくのへなりのけるに大勝日の暮方になりければ一候申やう明日の元三なりなにとの參らせん八ツ木の一合もあく青銅の一錢もあしとなげきければ一休さ玉ひてそれの歎く事にわらすいざ出よとの玉ひて一棒ふりのたげ山家街道へ出玉へば折ふしおらけ賣通りければのがすまじと追のけたり彼者おどろき一荷ののけと捨てにげければ扱ころとてめしつれし候ふさせして是としるあして初春とひのへ給ふがのららず大名にて玉ひけるとて和尚

導に請じければいや参るまじとのたまふ何とて出なきぞと申ければ錢とくれなば行んどの
たまふ安き御事哉何ほどの御用ると申せば一貫八文はしくといへり安事と申奉りされば其錢
ともらひて彼ふひのさしにまひしところへ行てのらけ籠に錢とく入りつけて札とたてられ
けるの先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文但一枚に付一せんヅ、根けし給へど書つけて傍
あ一句

貧のぬそみの偷盜戒にのあらずいゝんとなれば
戀の歌も邪淫戒にあらざる證據あり慈観和尚と
て貧の聖のよめるなり

わが戀のまつとしぐれにそめのねて

まくづがのらにのせさのくなり

と侍りけむとのやしめればとて邪淫戒とやふりたる人々とはいひがたし

我も貧のぬすみなれば作盜戒とやふりたるとはいふまじきなり

と書れけるどのやさて引導に出給ひて曰

人は六道の錢とて六文出と汝は引導とて一貫八文出すさつしんがいちじう
さては汝は人に一貫二文まされり十方に道あり行たい方へつゝと行成佛ま
さうにうたがひなし是いゝんとならば有地獄のさたも錢がする

とのたまへばみな人さてもおどけ人やどけ感せぬ人はなありける

○或時一休の活機なると聞つたへいゝ程ある道徳のありとて大徳寺へ行てたつねければ折ふ

し一休は門前の酒屋が方へゆき酒にたべよい前後もしらず臥し玉ふどころへ小僧きたり只今
唐僧とのや見へし大和尚の一休はと尋給ふはあ御歸りあれと引おこしければ一休御めいまだ
覺すうわくとしてればせしに酒屋の亭主出て御醉眠御心よく侍りたるると申ければさて
よき氣味やとて一首とよみて亭主に取らせけるは

ごく樂といつくのほとゝおもひしあ
杉ばたてたる又六の門

とあそばしければ亭主大によるこびけるとなりゝるところへ小僧またきたりてはや御歸り
あれ先お申せし和尚の御待のねと申せば答もなく又うちへしていびきのいてるりのへりて
寝給ひしのは小僧のへりて何程おこしてもおきあがり給はずと申せばよし／＼その寝入て何
とも思ひよらぬとき引おこし一問のけたらば志まよ／＼しれ侍るべしと彼唐僧一休の臥たる
ところへさし足して行枕元へどうと座し何ともいはず引つりれし目もいまだあき玉はぬに
一越聲と上て曰

西來意の祖師の話に俗語ありや
と問へばその息もつさあぬぬに一休も大音にて

汝が俗よ

とこたへてつさこのし給へば彼大禪師も舌根とふるみて立れけるがさても活祖師やさ／＼しに
は十倍せり汝が俗よとは即時に出まじき答話なりと感氣肝にめいじて歸り給ひけるとなり
或とき新右衛門誰の話とはとけるに一休しめしていはく

尺伽みるくは是他の奴しはらくいへ
他はこれ阿誰とひ玉へは新右衛門歌とよみて答へけるは

たりといふことはの下にあらはれて

たろこた誰よたそはたれあり

とよみければ一休これとるん迄て此一ろくあて千七百則とゆるし給ふとなり

○一休和尚老年に及玉ふ頃親ともてる若きもの心得べきと諸經の中にこれありとて示し玉ふには人の子として親に一日も孝行の心わするへさやうなしといへども就中孝行の心おこす

- 正月元日 五百日の孝行に向ふ 同十五日 百日にむるふ
- 二月五日 三百日に向ふ 同晦日 百日に向ふ 三月三日 百日に向ふ
- 三月十日 千日に向ふ 四月十五日 五十日に向ふ 五月五日 百日に向ふ
- 五月晦日 九十日に向ふ 六月七日 二百日に向ふ 六月十八日 七十五日に向ふ
- 七月十三日 五千日に向ふ 八月十六日 五十日に向ふ 九月九日 二千日に向ふ
- 十月廿九日 千日に向ふ 十一月七日 五十日に向ふ 十二月晦日 四萬六千日に向ふ

毎月朔日千日に向ふ

右の日親に孝行の心と猶更用ゆるものはるれくの日數に向ふと釋尊の經説にもあればうたがふべからず勤よるし孝行といふは左のみ六のしき事おもあらずた親たちに向ふもあしらくもいたしたならば安心し給ふの何とぞ安心させ申たきものありとする事なす事に朝暮

必がけるのみこれ則ち孝行なりさて計めとはりたると前に申た種となりて其子もまた孝の心父に増増するものなり主人に忠義といふも名目ころのはれ必持はこれに同じと常にしめし給ふは有がたのりける事也けり

○爰お天台坊主に秀清とてあまこびに悉てびたる坊主あり多の人によこしまある道とそめ凡佛法はわの心にあり身の外に佛のしあといふてあるひの官社等の木と伐り佛像と破却させ先祖ともとむらは邪見放逸の坊主なり内なるれが申は承はれば紫野 休和尚と申小法師は何程にだてとして悟道はつめの僧ありと世間にさたするとも是もつておのしきぞたとへは井の内の建が大海としらぬに似たるべしあはれこの坊主にあひあははるらく只一句を以て不いこみ都の住居させままあつはれ途中にても逢たきもの故とよりく是とらうのひけるある日夕ぐれお一休のへり給ふに其頃は和尚眼病氣にて一眼はあしき折ら彼坊主に大害通一條の計にてはたと行わひたまふ秀清さればころねがふところの幸ひなりとおもひてをるくど走りよりいかに御坊くといひのる一休あの方の事のと仰らるゝ其とき秀清のいはく汝一眠とてらし歩行する事もしわやまらある時は黒闇なりあやうき事全く頼みがたし一休やがて汝が眼より我一が星まなくたり一月にへたし見物するときはさんば明らなるのとしのやうに答へ給へばこの坊主のさねて一言に及はず尻のらげて足はやに行方しれず飛うせ

○或とき一休に問ていはく何と和尚さまつくく世のなり行あり様とみるに人間のやうな心とあんするに皆我々が知音といへども幾人といふ數もしれず大の先だち行けるのつむおたれ

あつて奇傳ありといふとも聞すいふやうの處に何とやらにして居るといふともなしにてのみ
心元たうともなりやう／＼あちこちとする間にはひつきのあのみ近づき車の庭にめぐるが
とく我々が番に當り侍らむたげのはしきとくもなりのやうにあるとき死ては先なに成侍
るぞ一休の曰

死てのちいなるものどありぬらん

めし酒だんを茶とそなりけり

と仰られければ此人また和尚のゐる口れいと出し給ふとつとわらひけるが又そばなる人の
言けるはさりとて御坊このうたの心面白く候がまた行もあり行ざるも口よしこれはまたい
成とやらむ次手ながらさかせ給へ一休

とゝまるをれもばゝそこにとゝまれよ

行どおもはゝとく／＼とゆけ

といひそて、歸り給ふ

さて前冊には邪淫のそがたに付て未來現世にむくふ次第とあら／＼佛法ばなしとのべまし
たがまた申とがのこつてあると少し申聞せませうさて經文は前によみました大悲經第三の
卷の中の重といふ字に付て申事なりと何の身なつても種がなければならぬ世界の
敷いの程あるやらしらねども同じ目口鼻手足はありあはば脊の高いもあり低いもありあるひ
はやせたも太つたもあり目のひのらめのたれ目のしはの目の筆奉行といふ目はやぶにらみ
の事じやげに御さる此種は方等部の中の經に眼目眼味なる者は他の婦女と邪看するものゝ

中より生ると御説なされた此眼目と眼味はそがめとも横にらみとも讀字なり他の婦女と邪
看するものとは他 女房とよこしまに見ると讀字あり是はせうしたる經の心と思へば世間
に人と横に見るやうな人の目がござのイヤア此内にも其やうな目の人があるのしらぬこの
やうある目の生つて来る人は過去にも人の女房のよいのがあれば人と語るうちにもひた
と見ねやうで尻目でよこみたるむくいによつて今生には常住よこばり見て居るやうな目
には生つくものなり見度は眞直には見ずしてなせによこには見ねぞといへば人に惡ふ思は
れまいそ巳とあやまりて横にみるゝ他の婦女と邪看する者の中より來るとはとせられた
るく申たらばまた目のろくに生れつゝれたる衆のおれの目はもはや悪い目てあいつと思はれ
て油斷あされたらば未來でまた味が目になりませうぞわると合點なざるゝなこれ目では
り邪盛してさへはや目があつたのとしどかく目といふが大事じや目のいたつ者千里と行も一
歩よりはしるといひて千里萬里のみちと行もたゝ一足よりはしるとくたつた一目見るとい
ふより事れこりて及ばぬ戀の思ひのと罪と作りて果はさま／＼のせんさくがあるはむらし
の人も

人の身に目ばりのつらきめのあらじ

みすばこひしどおもはざらまし

とよみ置れしも聞えたまたしゝらばせ座頭はなに事も思はずにくらすうと思へば見事必
とうこのし情の道深く結句目のあきらある人々よりはいゝうあり且ろこが鹽めららる物
のくさり味ひがとるやら漆あはの如くあるものと聞なればあながら目ばりのつらきもの

こもめめられぬ古人の詞に月花もさのみ目にて見る物はと書かれたは能をせぬかもしろさ詞しやまつ各われらは目てなけれぬ物と見ぬやうに心得て居ますとさのみ目ではありみる物はがろう見た物てさらになし心ても見よみる目さへあれば犬も小判は見のけれども是は黄金といふものにて七寶のうちのためらともこれさいそては何ものも自由自在に買るゝものしやのと見たる斗でのゝにしてもその見らるゝ物の正躰としらぬそれは目で見たはのりの見たといふものではない物とに心と付て其道理としらねば其方と今殺そのといふ書た物とみても其文字と受ぬねばい成事が許て有やらはる長さは見ずといふ文字にてあらむしいりやうにやつて見れどもあはぬしあらばさのみ目にて見る物ははといへるが面白であらぬのさらは目にてみる見ぬのはなしと引て聞せませう先御茶ひとつ

○洛陽に天文はあせ某といふものありあるとき一休の庵へ行けり和尚出合たまひるの方は久々見えざるに何方へ参られたるぞされば私は此ころさるる人にたのまれ南都にまありあり候一三日以前は登り申候和尚の曰何ぞめづらしき事もなく候や博士こたへて曰されは奈良にてめづらしき事と承り候ればいゝやうなる事によりけるぞ博士はんにや坂の邊りに齒ぬくものあり登つと二文つゝにて取を聞て去ものゝ出くひ齒ともちて時ならぬいたむとゆには休さへたゑがたさともたへける者のれり事と聞およひ齒ぬきに行一つと一文つゝなかと申此ものいひけるはるれがしは聞および遠方より参りたり一文にまけてぬれよといへはいやしく少もそら直はなく候御用ならは何ぞさなりとも御越あれといひてまけす色々とはり言つくしせんたなくのへるべきと思ひしのも切角此事に参りてむあしく歸るべきにもあら

すとやおもひけん是非々々まけなくは二つと三文にてぬれよといふ先方のいふやう扱々其方のこまのく直切たまふ人のなまけてたましやうとて二つと三文にてぬきとけりこの男のしこくも直きりてぬきたりともおもひ大きに自慢がはして歸りしをあたりのものゝ申やう扱々たゝ今の男はせんなき事としけるものな其ぬくべき齒はありとばぬらすしてぬくまじき齒までもぬくよ登文の錢としみてぬるてもくるしうらざる齒とぬくさりとて世にめづらしき笑ものこれは小利大損ともいふべきのと笑ひけるやうの珍敷事さゝて歸りましたとてはあしける和尚とらしくおぼしめしころくとわらひ誠あるれわおもしるきはなしなりされは世間の人利やうに心ふかきは事にふれて利ふんともふほどに因果の道理もしらす當來の苦果ともわきまへざるが如くあそゝ四方山のはなしおわりて和尚西の方の遣戸とあけて出らるゝ博士みてやがてのくぞいひける

いゝばのり西に朝日のいるづのな
二休やのて心得たりとて

天文はあせいのゝ見るらん

○といひ給へば博士手とうちて大に笑ひいとまもこばてのへりける
○爰に一休和尚の庵ちのきはどりに四十のらといふ小鳥と養ける人のありし物のあたりや生ある者なれば死する期やつて籠の内にむなしくなれり朝夕愛し手なれし可愛さに殊外不便に覺ゆいとまなくして子にわつれたる思ひとなせり凡非情無心のものにも各御性と具せりましていはんや生あるものや死出の山三途の河めいどの間いかゝ有らんしるべき智者と頼み

て引導のたさばやと思ひ一さう和尙の庵へ参りてしるく、の事頼み申たきよしなけきければ折ふし和尙の弟子出わひいとやすき事なりいへく成佛得させんとて佛前に向はせ

むらし釋尊八十二ばつたい河にゐるてねはんに入
今なんじ四十のら紫野に成佛とく

とたのら にくろさづけ、の彼者たのもしおもくひやがて参りてのへりぬ是と一休ものこしに聞しめした、今のゐんどうはやくでうしたる小僧のな風骨によると思しめし大さによるこびたまひ機嫌よき事な、めならずととのや
維广文珠のはなしいろふた扱維广經の中に文珠大士もいま居士の病とひに師こしあされて何と居士御宿に御見まひのため不來のさつともつてきたり申にと仰れたこのころは不來の相とはきたらざるすがたど現じて來るといふ詞じや何と來てゐるて來らぬすがたもつてきたとは何とやらむ六のしき公事ではござらぬのとき維广は方一丈の室の中ににはしました今とき寺の長老和尙の御さるところと方丈といふ此こゝろじやしるに維广この詞とさのれてこれはく文珠はさつようこそ御出あされたれと維广もいまで我不見の相ともつて見るとこたへられたその心は不見の相とはそなたの不來のすがたで御やしなされたなれば我もまた見ざるすがたともつて見まそるといふ心じや何としつた同士の出合はおもしうい問答ではござらぬのさのみ目にてみるもののはさのみ足にて行ものはと書たきものされどちなみにやさふなれば鴨の長明が海路とへたつる戀といふ題にかもひあまうらちぬる宵のまぼろしも

なみじと分て行のよひけり

これとあじはふてみれば寝入たるうちに思ふ人の方へ心がよふたれば此行やうでは足はいらぬしければさのみ足にて行ものはと書たいと申が實じやまたまつしまの法心上人のうたとて

足なくて雲のはしるもあやしさに

なにとふまへてのすみたつらむ

とよみ給ふよし沙石集の中に無住法師のさきたまひてこれ楞嚴經のこゝろにのなへりとありいゝさを雲のはしりのすみのたつは合點がまわらぬ春たつといふはありにや見よしの山ものすみてもよまれたのよふあよんでも同じ事じや歌に

足なくて舟のはしるもあやしさに

なにとふまいて浪はたつらん
實にも楞嚴經の中に釋迦如來と阿難尊者との問答に眼見心見不見の見なをいふ事があるぞと殊勝に有がたふれもふ事じや此やうな理に似たると申さうならばある者の聯句に舟に乗りて山の巔に上るといふ句をいたした世間に無理な聞へぬ事と山に舟と乗やうな事じやといひまそる是に和と付わぐみましたいゝさを付にくい難句なると是にさるものがつけましたは

田子の浦なみ間に富士ののげ見へて

なんどよく付たではござらぬの舟に乗て田子のうらに魚なを釣るがら下と見れば富士の山

のりげがありくどうつりてるの上には舟どうのべたときには舟にのつて山のいたゝきに上る心がしましよがな池に望めば天脚下といふ句もこの心と同一事となく物には感となして見たり聞たりせいで見たりうちても聞たり内でもない月花と見るにも月はいつもまるき物とばかり見へて花はいつも咲てゐるとおもふは本の目ではあり見たるいふものなり月も花も花もちるといふと合點とるところにも見るといふものでござるこのころとつて邪淫といましめたがよろければなせにと申にさうやうのよい女と見るにもたうつくしい執心やと氣とつすは目でばあり見るといふものじやること、どうへて見るといふはあの女いらう美目よふておれが心が何とやらとさめくあれとはやあの方には主があるによつてならぬとのくおもふまい主ある者にこゝろをくくるは生盗人といふものなればその證據は罪におこななるぞとじつと分別としてひたうなる事をやむるの心もつて見るといふものじやさてこの心と納めてあらは見たとて科にならずへりもせずともこの事に此ころがあらならば見ぬがよいはず見ても迎もらちがあらぬと男の胴骨とすゑて持がたしなみなりさて物事仕どこないもなし侍は然ら此つよき根性よさげねば武進も高名あらず先いやらしいは見聞あらなまぬる誠の用に立さふもなふ思はる、は兎にも角にも詮ない事は是ふのぎらすわはうれとう誕ながして見ぬがよいさて女房と山神と申はなしとめさましにいたさふさりなるら蜷川といふ男の才智發明の義とちよいと入ます

●蜷川新右衛門御當その身いみじき才智發明の道士あるが和尙のもとへ立入禪法に參しられける誠は佛心の妙具とつたへ正法眼藏とさばは英雄の士といひつべし和尙も心通相のなひても

、もくおはしめする、も事はり也されば定業期きたりて寂滅の室にいらんとす膝下のむのしより是と待と年久く思ひまうけたる道なりとて快氣の望さらにく既あ一門はせあつまりおのく今はのりぎりに名残ととしみ たひ歎くとよろの見る目もあはれにてしらぬ袍さへぬらしけるはことほりぞ見へにけるの、る愁歎のとりふし青々たる西の空より紫雲になびき空中におほひ音楽さこへ盤香薫しはなふに妙なるのな三尊二十五位さつ赫々たる聖衆と引つれ間ちのく來迎し給ふはふしぎなりとも中々ありがたのりける瑞相あり實にうたがびもなく新右衛門は西方十萬億七極樂世界に往生せしめて九品上刹の臺にいたらむとはたなごゝろと見るがとしとのく感あたへざるはなりのりけりされば落日にちのき老士また物なれぬ若輩のやのらむ天ふあとき地お仗しともお死なんとそくるひける道理の至極とそさこへし其の中に嫡子は新右衛門かひさの元によりそひ泪と袖に包みながらいのにあれ御覽候へ頼母しく思しめされて往生安全とどげ給へと指とさしておしぬける其ときお當ねふれる眼と活と見ひらき我子とはたにらみてそれ弓馬の家に生れけるものたへば安養淨刹にいたりて九品蓮臺に座ととて弓箭とわするへさにあらず書院の床に立たる重藤のぬりごめに矢とろへてもちさたるへしといふ聞人驚おさるはなりのりけりこはいのにと見る所お親當の弓勢何人はありとはしらねとせさしものつよあるらむと思しきかやめて引くはへ引しはり暫しのためて兵とはなつ其矢あやまたす三昧の中尋ひありと放ちて立たまふ阿彌陀のむないたとのなたこなたへ射とうしてければ空ふあまねき紫雲のよろはひも諸の聖衆とおほしきものもたちまち消て陰もなしいうなる事とと了簡すれば所に久しく經るむじまの化のうと經たるおぞ有ける誠に希有の

次第を終に一首の辭世と作り殘されける
生ぬるるのあつきに死ぬれば

けふのゆくへはあき風ぞよく

とかやうにつらね臨終ととげ玉人寄なるるな空寂の玄妙と會得し邪廣の障障とはらひ其身は
死門お入なるら活人のねふりとさまされけるは世の人の珍事とする所なりとの後一休と導師
とたのみ奉り御引導とこひければ一休もこの新右衛門には一はりのはりて引導すへしとた
くみすましておはしけるにはや新右衛門の亡骸と興ふのせてきたりければ一休たち出たまひ
てのの新右衛門の乗たる籠とたまたまへは死たる者高らなる聲と出して一首の歌とば一
休およみのけけるころよしきなれ新右衛門も只人おはあらしと今の世までも人のいひつたへ
侍るありうの歌に

ひとり来てひとり歸るも我なるよ

道としへんといふぞこのし

とたのらうにとなへければその詞のれはざるに返歌とし玉ふこそ有がたけれ

ひとりきてひとりあへるも迷ひ也

來たらずさらぬ道とかしへん

どのたまへば新右衛門も賢もとやおもひけんろのふちは音もせず成にけり世人これとつたへ
聞て一休は誠お人間ならず佛菩薩のかりああらはれひとり來てひとり歸るも道といへば來た
らづさらぬと即答なし給ふは所謂老子に死てもほろびざるものは命なりしといへるものなる

ためしあるへし

○又新右衛門が最愛の妻いとけなきときより萬お心みじかく武了しありければあなしき者おも
慈悲のめぐみなく召つるふ童おも驚のなさけ薄ありけりされば人は似と友とするあらひな
るお悟道の居士おあれそひて尊さとしへしらざりける事いのおさま報のばちなるべしと皆人
ことおさみしけし新右衛門あけれ不便おおもひてもとより道者の事なればたましひとくた
さ柔和のとしへすとすいめけるしおれども露ばのりもしたがふ氣しき見へざりけりあるとき余
りいたく制しければ女房顔とあめりて聞へけるやう

あさいとのながくみじらくむづかしや

うむのふたつといつのはなれん

とたのやうおよみてとともせず親當おどろき日頃のふるまひお相違して歌の心あまり殊勝
なりければはづのしくおもひわが教るお及ばずとてさおも銘じて感じけるふしきあるのな今
までは放逸邪見お身とまのせ誠おくらさ人なりと思ひしがさては我より先おさとけける物と
と思ひ舌とまきける其後は夫婦のなさけあさのらすひよくの契りふのりけり上しも水魚の
こゝろ同じむひびけるおつらさ者のいひなしおてやありけむ密お異夫とあさねてこゝろあ
るよしおことしやのし新右衛門お告げる新右衛門もとよりはつはり信するものおはあらざ
りけれども賢お思ひあたる事ありとて物お忍びぬとのこありければ暫の延引もなく離別して
こそ里へたくりける女房はとりよし懷妊の心ありて腦みければ恨みの心あさかちざつるさ
のみはのとれのしむらんともだへるなしみけれども力なく出にける無實の程ころあはれなる

然れども跡方もなきいつはりなれば誠つるおあははれて讒言のしむさとしりにけるより新右衛門後悔して又よび迎んとて我あやまりあるよしいひつのはしければ女房返事に
秋の世の人のふゝるお立ならば

みのらぬささみいねといはざる

とのやうおよみとこせて二度のへらざりける夫より女房のなさけたぐびなくいささよさよるまいは返てまさりけりと寝ぬものなりしとなん或人のたり侍りいみじきともしろく覺ぬければのこ耳の底おと、まり忘れもやらす有けると假初あははし侍るさらはの歌あいすれ
おもげうたわりしとなり

女房と山の神と申せば御さしつかぬのござるうらもしらねども山の神といふものお目と見台そればそのまゝ、死ふると柚人のつたへて奥山ふりく入て木と樵に山の神らあいのどもあたりへ来て態と見らるゝやうおとまん前ちららゝそれとも見ると死るによつて随分見ぬやうおとる也もし同じ山人でもさづきのやうななりな物ならんとともふてちよつとでもの横目として少しはありでもみると死るとの一度ぢやこれとわすれさせらるゝる世界のうつくしい人の内儀たちと常住山の神じやと思ふて見ると死こそはせまいければわさわわの種ぢやと思ふてちよつとも見ぬがよい兎かく見ると死ねるとさへねもへば手がつらね若い衆合點させられたるうれもへまとお人の女房と今どきのはやり詞に山の神くといひまそる此やうなとらいうのしりませぬた、く愕もじがさついによつて山の神のくこはといふ事がうれわいづれもがよく御ぞんじでならう身どもらうのやうに法師のしらね事く

迷の衆生は愛があさましう御ざるぞ何でものでもたが見るひとつとして役にた、ん事といたもの見たがるなんぼ心に合點して居のらは見たりとも何の大事のとあだ言にも辨口とた、きて運の泥より出て泥にうまらんごとくこゝろが清浄なれば一心が極てのらはとても見事にいふければ一さいさやうにされいにいふはどの人の泥にそめたも一心の極らんとも見てきましたによつてまづは眼で見るに煩悩にさはりものでござるさふる程に今の山の神とわそれん様にして見たりとも犬が小判と見たやうに心得てござれしたか今どきの若い衆や氣たいのよい親父たち笑止などは後生でみな數白眼のやうな目にならせられうと思ふてとづのいに存するの後は世界に生れてくる程の人の横ににらみやうてのさるうと思ふてとあしるござるそれにうき邪淫のむくひはなしと申てさのせませう御世話方御茶一ツくださ

○愛に雲州大原と申所にゆるりや藤太夫と申ものあり久しく京都に仕けるが元來出雲は生國なれば又本國に歸りて住みけう京より國へ下りさまに妻とあたらひて下りける此女京にてねんごろしけり男のたより度々たよりとらうのが互に文のよひありけり此よしざる者ひろの知らせば男あるときあまたの文ども有けるとりのくしければ我はひとつも讀ん無事なれい力なくたれにの是と見せはやとおもふに歸むべし人もかく打過しが折ふし一休この藤太夫が近所にましますにやめて和尙と請してよき次手なりとおもひて件の文とも取出し御坊さま内々ながら御ぞんじの通り某は目と持ながらの明めくらにひとしければ此ふみ少し子細ある事にて候もゑ一々よみて給はれと申ける一休安さとなりとて此文どもとよみのへて只

のふみによみなし給ふ時に此男さては苦まらふき文どもなり余入お請たらんおは疑ひもあ
へきの殊に和尚のよみたまふ上はさらおいつはり給ふとも思はずさては人の云しは皆いつは
りなりけりと不審とはらしけり此女和尚の恵みあまりのうれしさにひろのに禮ふみよつのは
す次手に

しなのなるさそしにのけし丸不ばし

ふみ見しときはあやうありけり

どうれしさのまゝのさつのはしける一休返事に

にじり一筆のうぞの、れける

世とすて、あたちとすてすびんはつとさりて煩悩とさとすのりに繪像と

あさておのが悪業とあづけ置給儀大きなるめいわくなり

と黒々と贊とあさてわたされける沙門つくく感やがて懐中して歸りける

○五月雨のふりつゝはれ間も見ぬす打しめり四方のけしきうるはひ梢も見へわのため徒然わ

びしく思しけん柴の戸とさし込みたん然として在しまそ處へ六十の男と見へて敬笠と

のむりいにもおもひ余りうれひて沈みたる有さまにてしづかに物申さむとうの、ひける一

休たろやこなたへと宜ひて柴のあみ戸とひらき玉ふ彼男いふやう我は近きはたり侍る者あ

るが明日はさる心ざしの日お相あたり候へとも智識とたのみ奉つるかたなく候へば恐れなが

ら和尚と請したてまつりかゝるこの我情とまらせ上たう候て是まで頼み來り候也とおもひ入

て申ける一休聞しめしむとより出家のいとなみにいと易となり何處のはせと問給へば男

こたへてさん候わが家居と申せばにどり川通ろこ扱びしやく町と申てのくれあき所にて侍る
なり尋てわたらせたまは、門にみるしと置候べし必らずまら奉り候ていとま申て歸りける
一休やとにてつくくと案し給ひ渠はふしきなる教へやうといひつる物のなさらば了見して
見たやとて懸て義理とぞひらのれける抑にどり川とは今出川なるべしそこ扱柄杓といひしは
ゑがわ町といふ處に行わたらせ給ひける印といひしは何なるらんと見給へば表に杓子とぞつり
たりけりこれぞしるしなりとてやめて内にいりて見給へばきのふの男にひ給ふ目出たあり
ける事な、めならず我等のふるなるたはふれと申參らせ候へと一々にとさわのち道とま
よはせ給はず御入候こそいつはりもあき天眼通おておはしますとて偏に釋迦のごとくお思ひ
ける男もくせものおてむつおしく難問とけんと思ひけるか法事も過ければ騰と出しそむた
りける其とき和尚膳にむのひ殊おは亡者法味のためぬらうとなして三界お手向と蓋とあけ見
玉へは飯にはあらで小糠也ふしきに思めされ汁の蓋と取見給へは是も同じく小糠あり残り物
も皆々焼成ければ横手と打てあら歎し扱は亡者の三七日お當り候とて頭も振す宜ひけり男は
愈々膽と潰し恐と成て敬ひける其時男言様は仰の如く某は父と失ひ候て三七日に成侍る佛果
にやいたりけんもし地獄にや落んらむ後生の事覺束無くのなしく候と問ひければ一休仰られ
けるは何事のあるべきた、存生のふるまひとは他人はよしとほむるや悪きとろしるやぬの、
いふぞとひそのに宜ひければされは平生は常によこしまあると候はずひとへに正直にてまづ
たき性なれば他人は佛おてありつるとほむる者多く候と申ければ一休聞し召しおれば氣つる

ひなる事なし是あみだにもあらず観音にもあらず則氏直佛なり佛果と得る事疑ひなしと事
もなげに仰られける男つく／＼と承りさては心安く候又それの兄にて候もの三年己前あ
むなしくなりたりしの常に佛道ともしらす徒あゝあゝて暮しはづのしなら天性愚頓にして人
の口に扱ひものど名と得候ことくちとしき次第なりたし罪もつぐらす候へ佛果も得候の
んやと問ひける一休聞し召中々つみどのなしといへとも佛にはなりたし左様のもは愚僧
あもるしても人のあもるさ、れは其落どころの地獄と則あ得う地をくといふなり但し今生のこ
とくに後生のとも侍れば佛果と地獄と少しも疑ふとあしと仰られける

さて又因果のむくひと申はなしといたさふむのし今都今出川のはとりに色ごのみなる男
ありあるとき水無月乳の森の夕す、みうちひらいたち河原にあり茶やたちならび京中の上
下うつして御手洗のなれにて汗とぞ、ぎぎとわそれあへる時分西山に入日のげ四五尺は
あり残りことさらひゑの山あろしもひやくと心よく又も御出の茶やの机床に腰をのけ体
らふところ今出川ぐちのたより大勢出来る内にもあづきのえりふのく風俗のよきが年
ふけたる姓一人つれてくるよ／＼と目とはなたずはるあふ詠てゐたる間お近く来て此男の
、けし茶やあつとはいりあつあつやとてうのいさめもさのそして水ごのみ片てあげのあ
たへおひたと顔ふりてゐらる、と見れば日ごろ執心におもふたる人の女房とやまでこれは
夢のうつ、のとり／＼と近づきて是はようこそ御参詣といへはされは最前よりこなた
さまとも見及ひて居まゐらすれども御ぞんしのとよりこちの人はいひ世話やきな人にて
のやむなどころへ参るといさらはれまするあ参るといふでは御ざりませわんたくしの里へ

ちよつと仕てまゐると申て横おされてまゐりましたためへ誰にも逢とのいやにてるれゆゑ
ともあけませなんだといへは此男それはわたくしよくしつて罷あるのらは暮んさきお神前
へはやふ御参りあされたま／＼の御出に此うらに見へしおくれ家は人の見んどころあれば
あれにてゆる／＼とみあされもし日のくれたりとせ私のお供といたし御里へ参れば別
儀なし御参りにならすおよりなされ見といふと聞ずてに女房は御前へまゐりたるうち男
はうれしく茶くむ候あ今の人のおはしたらんとも／＼とめて給はれといふうちにはや只今
歸りますもはや日も暮れまするといふと茶やのあ、も心得てむりに袂とひのへまづ御茶ひ
とつとさしつけてあとの奥の方のりさしきへ引ばり行ところへの男出きたりてもはやわ
たくしものへりまそとむりにとめて酒よそらめんよといふうちなんなく日も暮すましけ
れは此女衆もかねて此男のこ、ろあるはしはしりたるにや姓はあるしのの、と物たりす
るうちにつゐ間男になりて扱られより親里までかくり道そのら行末の落あふよとみよはや
談のうして人しれそ其夜はいとまごひして別れたげにござる世には性のぬるい男も女もあ
るものじや然るに人の心はるめるにいろとさすしやてそれはありでおくそののち二ヶ
月三ヶ月と逢にまさりてしたしくあり互ひにこ、ろとのよはすとりあら東山の後りにこの
女房の方の家へいつでも齋におしやる出家の給とせんたいたのまれこれも後生と念佛のた
てに縫しまひあたりに硯のあるにまらせ其ま、あとの男のたへちよと文して音つれんどの
さねはあるみに一日二日御とふ／＼しくあつあつに近きうちにあの方にて御めにあ／＼り
たさゆる／＼たりなくさみつもる御物たりいたし度神のけてなごま／＼と書てさり

しやんとむすぶところへ停主何心なく来りしに南無三寶どのほに血とあげなから立
 し此せんたくもの、袖にちやつと入ておくせしと停主これと見と、けなからさもなき跡に
 もてあし間近来りて飛のりまづせんたく物とらひはひとりこの文と取出し女め是はいの
 とひらき見上るに女房たまらずすのり付とつきたはして何々御なつめしさになとよむに女
 はもはやつ、まれすふくに走り込のみるり取てのとぶへさ、りたとれける停主はこれと
 もしらす文二三べんよみのへし名のきと見るにそれ様まゐるとはありあるにさては此せん
 だくもの、主坊主めにまのひなし袂にあるこそふしぎなれさても、畜生めと女房と引た
 て見らればや息たへたりいよく、のんにんならずと其頃の大守へうつたへければ坊主とめ
 して問はせ給ふにさらに覺へあきよし、疑りなく通りあさらのに申わけそれども相手の女は
 死しての拾のろでに入かさし、證據となりていひわけ立のたぐ終に引わたされて女の死
 骸と、もに木にのせられしは何と淺ましき事さても先世のいなる因果のめぐり來ての、
 るのらき目あひつらん人の身にはいつひめぐり來るやらもしれねば現世に覺へ
 なくとて此坊主のとき由断はありませんとてまたのの間男めが科なき法師と殺したる因
 果のむくひにてその身の果なが、しきとはなしがござる次におはあし申うふ
 ○さるところに何ともならざる邪氣なる男ありあまつさへ身とよるしくして萬不足なく殊に下
 人多くもてりあまわがま、といわんとて表の入口に法度書してけり其札に

- 一 へつらひあつて奉公はしがちの事
- 一 つのひたはしの事くひたはしの事

一 とんはとりがちもらひがちの事

とのやうに書て立ときけりあるとき一休と申入萬の咄と、りて一休申さるゝは何とこれは表
 にはめづらしきらよのきて立給ふあれば下々への法度がさにて侍るの停主な、くとこたふ
 一休おのしく思ひ給ひやがてのへりさまにとく、のさそへらるゝ
 へつらひてたのしきよりもへつらはで
 まづしき身ころころやすけれ

○或人一休にとふていはく世の中の人の申事にて候人の人たるといふ事はいなる事と申候や

一休答へてい、くされば此坊主もしらす足らん身にていゆるといはんや人の人たることと
 きやさりながら若き人の心さとおつてやさしくも尋ね玉ふとしらんといふもいなるものにて候
 むのし物しりたる人の咄しとちと聞はつり置候ほどに申て見候はんまづ人に人たる人と又人
 たらん人とひのゑるに人たる人と申げにいたとへは鷹ふどの鳥とよく取は鷹の鷹たるに
 ひ鳥と得取らすして鼠をせとするは鷹の鷹たるにて鷹とはい、かたし猫の鼠とよく取はねこ
 のねこたるにていへもし又鼠とは得とらそして着あんたと盗みくらひは、猫の鼠たるにて
 こそいへねこの猫たるとはいひかたし人の人たるとは人の道としりたる者と申げに又問て
 いわく學文にうけ賣と申とのいひなる事にていや一休答て曰くされば是もしのとは知らさ
 るとなら申て見ひはんまづうけ賣と申はあるひは四條五條の辻にこまもの店とて棚ひとつ
 といろくさまく、のものど取あつめあき人の用次第に賣ものには此者に一いろにてあつ

ちへて見玉へ何れにても我が職にわらそして皆上手の仕置たるを請買にいたしは聞御用なら
ば其人にあつらへて参らせんといふがとく學問にもうけ賣の人こそ多くはへあつらへて行
ん人はまれにこそははめことに老子莊子諸子百家のさたまでも取まじへて評論し物知りとの
しるは皆こまもの店に似てこそは買手の爲には用にくそ立ともやあらと賣手はさせる商人
にてもはば一言一句にても我ものにして守り行ふ人ははる前にとぐれてありがたあるへし
と申さるゝときこの人つくゝと聞居てさても理りのなとてあつと感じける

○頃は七月十五日の夜若もの、飛上りのあど先しらすの男一兩人申やうはいさやのたゝ一休
ののたへ行夜そのらあぐさまんと申一人が申やうされは我等もさやうに存する處よくこそ申
出されたりとの坊主もうきにうきし坊主の事にしあればこよひは事さら十五日いさゝ往て
うのらあさん尤とてうちつれ行はせに折よく和尚寺にましゝて何れもよくこそ参られたり
祝儀ありとてはや酒盃と出されて舞つたいつそるまゝ一休たつてたざられける竹の切よの
たまり水そますにむらす出ず入らず人とちぎらはうすくちぎりて未までとけよ紅葉ばとみよ
うすいがちるのときを先ちる物でいおせれやゝ人ゝ若がふた、ひある身のや只何事も
ともわのき時にはたれものもいたづらぐるいはあるものよそれもくるしいものでもおぢやら
ん悉く樂變じてくそりとなりひなにとなげくぞ川はた柳みづの出ばなとあけさひるれなけ
ばあげのうまでようらゝ、の身にゝる事にてあらはこそ牛はうしづれ馬はうまづれあだなふ
き世はごんなもの老やと破れ扇のひやううしと取てうたはゝうたへまは舞へ釋迦のねゝは
やしゆたら女ゝよい人々どとせりととさめ玉ふみな人はこれと見て扱々御坊のおどりと久

しぶりで見ました歌のせうが一だんおもしろしとて一度にせつとわらいけりいさゝこのな
もしろさに町へ出ておどらん御坊も同道申べし一休心得たりと太郎次郎と申下人どつれ給ひ
已上四人の人々思ひゝゝいでたちしが先和尚のしやうぞくにのつたいのきの布なげつき
ん紙子のろであし羽おりこしには九寸五分にひやうたんとぶらりしやらりとさげられけりわ
さざしい門前の六彦が一子お竹がしやうぶがたなとのねひらざしにひらめさわたして出たま
ふさておどりは五條の橋より四五丁西にありとてこゝぞくつきやうのとせり塙なりとてうち
まじはりて爰とせんせゝれどらるゝ、彼二人のつれも見うしあひた、主従にこそ成給ふ何とし
たまふらん足もともしどろになり若き女のたへべらゝとてころびのゝり玉へば女もとも
土つゝのむ彼とつとの是と見てろつゝなる曲者あなのすまじといふまゝ、に大でへ上てはりの
ゝる一休も心得たりといふまゝ、に大はだ抜きおはだ抜ひで大手とひるげてゝ、られけり五人
三人取つきてあなたへはむらゝ此方へはむらゝとおしゝるゝおしゝるゝおしゝるゝおしゝるゝ
まに頭巾早やふれとびければ紙子うしろのそそよりおぼんのくはまで引やぶり前後ふのく
にひしめきけりゝる所と太郎次郎は見るよりもおぼんのくはまといふまゝ、に大はだ抜きおは
のそねかど見ちゝへてとぼんのすねとむすとり曳やつといふて引はとにおぼんのつけに打
たふれ腰につけたるひやうたんも見ぢんに成て失にけり大勢打寄ろうせきはさせましと我も
くどはしりよるやのて御坊はとさああり東とさしてにげらるゝ、下帯はづれてけつまづき命
あらゝしゝのびて寺へ歸らるゝ、とのしゝりける事ともなり

○都にも大富家なるもの大事のとむらひとしける事ありけるに折節導師にはいゝなる人との請

し奉るべきと思案まじりに暮しける其頃名たるき知識あまたはしける中にもむらさき野
 の一休和尚にしくはあ人しと明日は法事になりければとていろき人ぞ遣しける折よく和尚
 脚庵のちりとばらひ庭のさうじしてとばしましけるの少もなづまん御僧なれば心安く領掌
 し給ひけるの思しよる事のあるにややめてつがい人に身とやつし手足にそよとにぞり付く
 さり衣とまとひもくづの中より出たるやうに身とやつし彼門にたちたまひ乞食のの、しるこ
 く御供養の御施行とたべ慈悲と下されよととりくくのたまひけるあると邪見に腹と立見
 ぐるしき奴原とひ出せよと下知しければ其とき下男二三人はしり出供養は明日のとあるに今
 日来てとめく曲者やとて元よりたれとはいさしらすいたはしや一休とた、さいだし奉りさん
 くにてうちやくしふみたとしてぞ入りにけり一休はあらさ命ちにやうく助あり無さんの
 しはさど思しめし紫野へと歸りたまふ明日にもありければ昨日のさまに引のへてあらたに湯
 おみし給ひて衣と改め召れつ、七丈の御袈裟とすそなるに引のけ金襴ましりに取つくらひも
 とよりしゆしやうに見給ふ一休御と給ふぞといひ込但旦那大によるこび佛前へこそせう
 しけうされとも和尚す、み給はずいやすれまではまいるまじ悪僧はこれにいとていしうそに
 なりにじり玉まはす旦那はもだべて是は何ことにてとばしまそあらいまはしやこ、は下郎の
 魁ありてなだへとふらせ玉へとて手と引たて奉れば一休御らんじてしらは此衣に料供と玉
 ばるべし悪僧がたまはるべき子細なしとて一首の狂歌とるく
 わらばくの三十棒とあてられて
 身にはれきたる蟬のぬけがら

とよみ玉ひてこのじきも思僧も同じ火と水なれ共きのふの棒とくらひ今日は御齋とたまはる
 事偏に此衣の色が光るもゑありとてぬき捨てころ歸り玉ふ

さて前夜御やくそく申たむくひははやさど申御はなし申ませうのまへに申た間男どの日
 頃の本望のとげ其うへ後難とさへのかれたれども其のち一人もいられずして女房とむの
 へくらしまつたが此女房お子たくして年の十二三年も家わざなきと人の命はしれぬ世なり
 とて親類のうちより異見して手のけ足のけありともこしらへられよいとめて去方よりの
 さもいりとして土手町邊にこのひ置しおまたこの本妻しなれたおよつてそくに御手のけど
 のと内へ入おきて一年たぬにさつそくれなゝた、ならずつひに安々平産とりわけ見れ
 ば玉のやうあわこさまができて是は末のつもの一家一門いはひよろこび御ふくるさま
 まで御達者にとていつしのどのとさまに直し興さまつなにてうの見ぬ女とあるしあるに
 御手のけはじめおやさにとにむられたとき一へんのた針糸ん結ばれし男のありしに貧福はし
 れぬもの不仕合にて渡世もなりたたく一先江戸へ下りておせぐべしとて四年己前にあらん
 別どあしあふさののせき越えて東にくだり三年が間あづまに住とも仕合おもはしあらずして
 たより音信もあし其のち親のうち存だけのびたる女子とかへかき事もなしがたくして
 爰に奉公分に出したるにゝる仕合とひすめののげうれしありしにの過にし頃江戸へ下
 りたる男のへり登りていとまもやらん女房とどにがくしくねだりのれを三年は待たる
 にまのなしとてどりわけすこの男元より身躰ふらちゆゑ外に足ものたられず何れにゝ、
 りてなりともとおもふ所に今の男は身躰よしあれば彼といひ是といひ女めもにくしと彼の

ところへ行てだん／＼とあたり尤我等たより音信ざるは越度によつてのやうに手とさげ申
 事あればはじめの女房にまがひなし只わたくしにへしてたまはれといふに享主何がひき
 ふの新内儀あれば念もあらはやめへそといひすしおらばもひのゝるからはらくといひし
 た程にとけしきそると手代や中間をもよりあひたゞき出してやつたせやまでされどもいさ
 ぎはり底心に／＼つして無念なれば今日にはなしにのけいん晩はさしちが／＼とさたそると
 一門よりあひ談合してのつひになり命があつてころと銀十枚より小判十兩までにておん
 にんしやれといふと一々勿までいとおもふ心があつてなる／＼おんにんせず又享主も命に
 ろもる事なれば一貫目や二貫目やりたとして身体のおいになることにもなけれども出してす
 ひべきだ然るべきに少のところのしわん坊どおくに右の通りにておんおんならずばとも
 ろくも分別しだといつきはあしけるたしおらばおくをいたしたとて宿にのへりましたくて
 其じぶん東山ちのきはどりに萬日の回向がはじまり貴賤の参り下回引もちぎる間もなく
 んじめの中より脇ざしのさやはつして切ていつるものは今の男なりしゝるにの享主がま
 ろりたると見つけての事なればやがてそれといふ間ににげまはる何がこんたんになつては
 内のものどもとくあたりにつらなんだとさきにの己前に問男しられた男よりふし参りあい
 近付かれをにぐる中にのけへだて、あはのはんどせしにつきのけ／＼難なく大げさに切た
 とし女のたき／＼へたるのどろのうへに腰かけて見事に自害してはてました何とむくいはお
 ろるしいもの何のあやまりもあさ出家と無實にころしたむくいがか此やうにめぐりきてその
 れどこもあやまりもなきに死しこの間男め命と大事につゝみたまりめて出家と殺させよそ

に見てかのがとゆづりても何のむくいもなふして今までいたるにむくい來てのくのも
 らまた取さへたる眞の男も甲斐もあゝ結句あまう太刀さきにて胸のあたりと手負しが當康
 には死るまでもなく百日ばかりなやめてくさり死になりました何と悪因の業報と申たり其
 のち此のなしとは乳の茶やめて取くみたるとき付ての姥たのはなしました此姥も姥ての
 坊さまの越度にありましたればこそ何のせんさくもあゝわたくし命もたせりましたと
 ろたりやたが此女めも出家ところさしてよくおのが命とらばうて居た事じやいづれもよく
 聞えやれこのだん／＼の因果そのどう分／＼に目に見へねと自然もくねんと此やうにの
 ろには追つめられて死ると因果との同じものて若さうちはいつ年がよつていつ死るといふ
 事とまた違ひやうに覺へはるの手のと、のぬやうに／＼とややくするうち一日たち二
 日たち今年が去年になり去年の又去々年になりきて來年が今年あなつて一ツ／＼年がよる
 はどに十といひしが甘になりろれおら後は月日もはやくめぐり心もせはしくつてくる三
 十六通とくるよりはな祖すみやのにはや正月のこれはしたり又盆の節句の朔日の晦日のと
 いふ内に暮ては明て玉手箱つい白髪の手雪といひささしおた／＼へは夏のよの夢よりみ
 じのき市太郎長松にはや子が五人三人またその孫にも子が咲枝がしけりさて冬がれのしぐ
 れさだめなきおたはしよりころり／＼と死ぬるとおくりて歸くる人もはや空しくつてあ
 るは無くなさばらすそひまさる世界お見しりたる者のみなごこへやら往て見んと思へば彼
 未來とやら來世とやらへ日々ばらり／＼と果行くはどにもばや地こくもどく樂もつまりて
 さう／＼借家もたてられまいとおもふにちがひて無量無邊のひろい國をして一人もつまり

て居られ世をよみて歸りたる者なしうこへ行ものはたぐさんにあそてへも生れぬにも録
 まきしてぬらりくらりとうみ出すは一日のうちには國々村々町々に何萬何千何億にもせよ此
 世に生ねくるはどの者はみる死ないでゐるはなんものなれどもいつのくといんぐわの道理
 も一度はひくわいで叶はぬもの也余所の人はわれ程悪いとしたるはなけれせ今も道者で息
 才で仕合もよふてゐらるればむくふものでもあいのと必らずあはるゝなと申事しやられ
 はくゝあういのはやいのせひに參ると心得るべしさて今の物語のありさまを聞て合點し給
 ふべしたまへ淫欲の少ない人あれば又妻子とあそそのにして邪見にあたるもの給ありの
 る物は狼中より來るとどのれて狼の生れありなり或は淫とこのむ物がたりと悦び人々
 はあいせらるゝものは鸚鵡の中より生とうけあるひは邪淫とすけるものは又これの女房
 にもみはだされて親にあしくわたり不孝になるのけつづつ淫のつみよりもまたふかしこれら
 のものは斬舌地獄にあちてくるしみとくとも説せ給ふ誠に三界に人となぐさづなつこ
 の淫欲なればいづれもやも給へしうゝながらとまらねば此色のみちなればたゞ往生成
 佛はなり申まいるとぞんじ候ふきのふ申たる如く戒とたもち威儀とたゞして申念佛にもあ
 らず成佛しがたき所のれのくゝわれらと助けましとはいさゝの思しめさねども願はくはそ
 こしにても御苦勞とけ奉るうとまじ又この積犯の惡業つよければとのつゝらあひのれ
 と引さうりてちのひの綱にもれなんも淺ましけれと二百戒五百戒はたもたずとも先さしあ
 たりたる所の御法度の邪淫とたのしてあらねばぢとさらし給ふなど申事也あつらやのせ
 給はずともすこしにてもあしきとばせんやうに心ともち扱そのうへ忽念佛題目はいとく

すぐれて佛もうれしとたはしめすべしたゝ種の字は今の因果のたね木の實にて有と目とる
 合點してござれこれまでに邪淫のしたはすみました其うはまたく御はあし申さんある
 うしこく

● 授も一休和尚は活佛にてましくけると世上に風聞しけるがあまりにいはんとして去人申ける
 はこの間一休へ參りければよく來るとのたまひ虚空に座し給ひて御底のまつ枝に御腰とら
 けられ御とみなされしなり不思議なる事にあらずやとしのくゝとたりければ皆人それは
 偽おこそ人間と生とうけのゝる自在のなるべしやと取沙汰しける事とはのゝに聞めし一條の
 辻に札と立られし音に

佛法の修行までお道なり天眼通と得たり虚空に座せんとすれば則ち座し座せましとお
 もへば則座せず通力自在と得たり若うたがふ人あらば見物すべし

とのゝれたる皆人は是と見て人の評判しけるがのく書せらるゝ上は更にうたがふ所なし去
 ながら魚とくひて生して吐と仰られしも誠ならず左なる事にてやあらむといふ人もありしが
 いやくゝるれとは品のはりたるとすこびたる人二三人つれたら一休の庵室へ行御礼の表う
 たがひはあつたしけれを直々ながみ申度候てこれまで參りたりと申一休出あひ玉ひ中々の事
 天眼通と得りてと仰られければ其中にそこひたるものすゝみ出申けるは是はいつはうにてあ
 るべし虚空の事思ひもよらず先この扇の上にあがりて御覽あれと申ければいとやまきとなり
 去るゝら其あふさの上へものらんと思ふ心出れば乘る今日は早天よりのらふとだもふ心なし
 虚空へものやらんと思はねばのほらす重ねて御出あらばらんとおもふとまじりて見せんと

仰られければ皆人あされて歸りける其中の人申けるはいふにしては休あり人のあまりにい

○或旦那さたりて申けるはこの伊寺へ出入致し人々申けるは話則の一ろくもぬけたるあな

と申ければ安事なりさらば参じられよと有ければ参ずるとは何なる事にて待ると申そいや何
ありども佛の道にて合點の行ぬと尋られよしこまつてはとて佛殿さしてはしりいづる和
尚たのしく思し召見ぬ顔しておわしけるせつなの間み走り歸るといつくへ行れしどのたまへ
は佛の道に不審ならば申せと仰のられしにより佛の道とは佛殿へ行く道ありうそんし一走見
て参りましたのいにもがてんのまいらぬ事こそいあの山門の邊りの松の巢と申けては何が何
の巢ども更に合點まわらず大方驚の巢ども見えては得共しかどわさまへそいと申ければいや
くゝのらそこそ今時分に巢とかくれとのたまへばいやとてもの御事に御慈悲とたれて示し給
はれと申ければ其儀ならばはひと持てのり見給へと仰られければものいそぎのぼり
て彼巢とれるし見ればなるに鳥の子もあく何とも見ぬなり一休何あるるとのたまへは何も
中には御さなく侍ると申せば

●驚の巢とあるしてみればうらそにて

これにつけて見またへこゝが一ろくなるはとおはせられければ彼ものあろく何ともつけ申
べきこゝろはなくと申ければ一休仰られけるはそこあるは我も汝に一則さづけしらすべき心
はなしとしめし給へばものれとるささては一休和尚様も仰られたく侍るかど申されけれ

●は自心自佛と答へたまへばにこ打うつてのくり終に自得しけるとなす

●洛陽にある通世しやありけりあるとき一休の草庵へたづね行はせめて見参に入奉らんよし申
ける折ふし和尚御病氣にて此間はたれにても御目にもゝる事ありあらず候御用の事もど
くのさねて御出あるへき由申出さるゝに此坊主のさねて申やう御病氣のよし御尤なりし
ながら立ながら御見参に入たきよしたつて申けり一休あるさ御僧ゆゑあはまじきといはさ
て隠したりとおもはれんもいひとやかてたち出たまはたいめんしたまふ此坊主申けるは某
は洛陽にまゝりある坊主にて候天台の法門ともうたのつくつけたまはり候しゆれども御坊
へすこし不審とたすね申たくそんじ参候一休いあるふしんばし候や我等は愚僧の身にて候
へばいはの講釋もしらぬべら坊にて返答申さんもおもひもよらざる事なりとのたまふ其ど
き僧のいはくいなるよりこれ草木成佛一休答へて云く卿木成佛よりなんぢが成佛としるや
又とんせいしやろの成佛はいのなる所にある一休なんぢが心にとへと答へたまふときやへ
て此坊主閉口して歸りける自心の成佛ともしらすしてなんぞや外とたつぬる事愚なりたどへ
ば盲目は黑白とあらうひるんが月とのぞひも似たりそれ道人といつゝ生死の一大事
と心にのけてむしのりんゑとたしむととるこそ道人とはいふべきにのれが心とさ悟らす
して外と求といふぞとのしとて笑ひたまふ

○一休和尚ころしも春の半の事なるに花にこゝろとよせ給つて幾枝せあつめ花籠にたてまじと
て酒など参りこゝろもわろくとなりておはします所へ一休の旦那の奥がた参りけるよく
そ來り給ふとてさゝなすすゝめおのしきとを御りなしありてひだもの酒のみて遊ばれけれ

は日もはや西山にかちこちのたつきもしらぬ御寺に彼女房もべんくとはなし居ける和尙い
 ろればしめしけんこよひは御とまりわれと仰られける女房の申けるは有りそめみ参りなが
 めのび仕候さへみにとやらん似合ぬやうに侍るに一夜とまり申さばうき名やたち申べし其う
 へ夫ある身の事にいへばいゝに心はさつぬもひるなひがたく侍るまづ御いと申すとして立の
 へりしと一休袖にとがりひらふこよひはとまり給へと引とめ給ふに女房申やういまいでは
 一休さまは生釋迦のやうに思ひしがわらはに御心ありてとめ給ふのや狂がるおはせのなと
 申ければ一休笑ひ給ひて其方へ心とくればこそ愚僧も是非ふと止め申せ心のけぬ者が御と
 まりあれど申ものゝと仰られければ汝沙のうきや夫ある身があらる事侍るべきのどふり切
 て興に乗立のへりけるさて夫にあひて一休は佛のやうに思ひろなた様もおぼしめさんかいた
 づらなる御坊なりわらはに酒とすめた給ひて今までひきとめ刺さへこよひはとまれとある
 に仰られけるのならずわの寺へ参り給ふなと二心なきいけんをくりかへししと申ける夫にさ
 るものにて手とば打てわらひさりとては佛なり汝がくいふも断るりよく思ひ見よのなる
 ものにて我とたのむ旦那の女房になれしげに一夜とまれとはあるしと出家の身にてい
 ひつたしよ一休和尙と祝とならふれば今生後生のうつたる成べし我等とわね侍らす急ぎ行
 て一夜遊びたまへなにくの誓言を我等のねたみ心はなしと申せば左わらは引のへし参るべ
 しふよるこびあるべしと申ければ急ぎ参りてゆるくと和尙となぐさめ玉へと申ければ女房
 よるこび一間の處へたちこもりれしるい口紅きつねの化たるがとく引つくるひ衣裳のさり急
 き興にのり一休へこそ参りけり一休はや寢給ひもに門はとくたたくおぼるき立出玉へばの

の女いゝにも細々としたる聲にてさきには是非に一夜とまれと仰られけれども夫の心うの
 いしくてふりさり立歸りしが余り御残り多くて夫にいとまご乞ひへば苦るのらんと申もえれ
 はつゝのしながらとまりに参りたると申せば一休いやくもはやいやにてはゆのへりわれさき
 程はこあたへ心のりたるがはや心のらすひはやゆのへりわれくとして門戸のたたくしめ
 音もせずさりとて御なふりひのど申ければとあへて音もせず是非なくのへりて夫にしよ
 と語ればさあらんと思ひけること、て笑ひて天下老和尙也心うとくときり動のしうこのさ
 れのうごのしたまのすもはやいやとば誠に行水の如き御心やいさきよしとく凡人にて
 はなしとていよく尋みける

○扱一休和尙の時代までは方々の寺々より七月十四日には大内へ灯籠とさしげ、る大徳寺にも
 開山大燈國師よりもあるありてさしげしのは後々まで例になりやめがたくなりければ一休こむ
 つのしくや思召けんあるとき大裡へ灯籠とさしげるとて狂詩と一首つくり灯籠にそへさしげ給
 ひける

性靈今日出來迎
 挑得燈明天上月
 雨露直供萬葉柵
 松風流水讀經聲

と遊しければ 帝敎覽ましくてまことに一休の詩なるものやうなき灯籠とともめけるなり
 自今以後大徳寺よりも何方の寺よりも七月に灯籠とさしぐる事あるべからずと仰出されける
 とあり世の人これとさしさてもく名僧のなる御心さしにては定て御寺にも性靈祭りは
 あるまじ若あらばさこそはりたるとにてやあるべしいさ人々一休の御寺へ参りて見物し未

代の語り句ともなすべしと四五人つれにて参り一休へ歩目にあり此間 禁裡へさ、け給ひし灯籠の詩浴中にて是のみさた仕候定めあり御心ざしに候は、性靈まつりも遊し申問敷いと申ければいやくわれらは三界の衆生とおもふもゑに有縁無縁の悪鬼と祭りてしゆくの物と手向いもる廣大憂邊なる性靈まつり仕いと仰られければ皆人案に相違して此御寺にの見え申さずい何れにて御まつりいぞと申ければこれより四五町にさとりていと仰らる皆人申けるはとてもの御事に見物仕度い御人ろえられ下されよしと申ければさぞ成事といひ給ふ方々や人までもなし我等同道申べし水むけし給へと誠しやりに仰られければ皆よるこび御跡に付て行ければ東の河原へ御出あつてこれく見たまへとて兩手とひるげ給ふ皆々をこもとにていぞとさくしければ一休は見給へとてくるく舞ひ手とひるげたまへとて皆がてん行ざりければおのくは見物がなるまじさそといてさすべし只耳にて御聞あれと仰られければ皆人あされて立居たり一休一越調あけて仰られけるは

山城のうりやなそびとろのまゝに
たむけになれや賀茂川の水

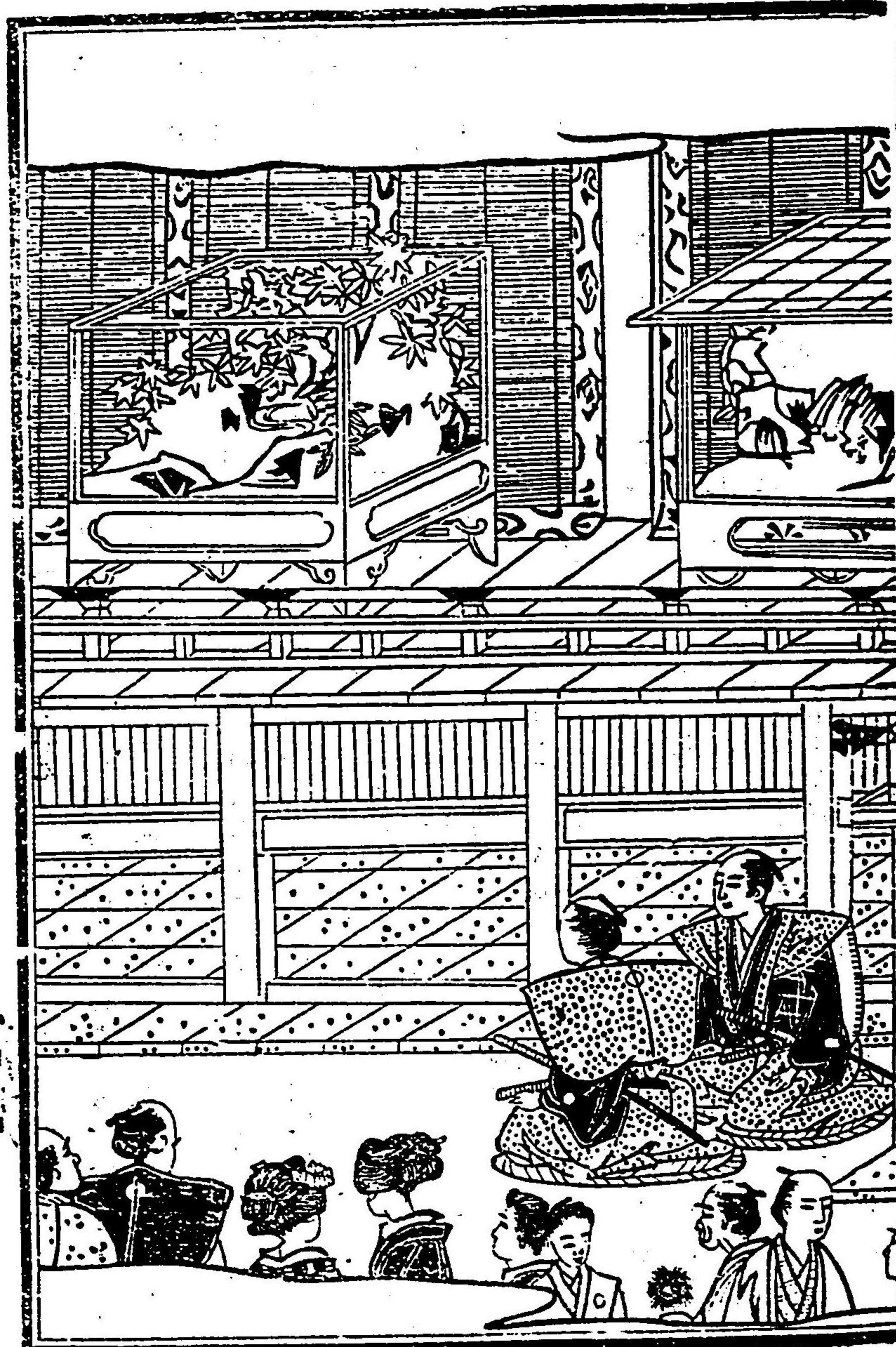
聞給ひけるが是大なる性靈たるにてはなきのと仰られければ皆人さてもくいやともいはれぬ御意やとて感にたゑてのへりける

あるとき嵯川新右衛門来て佛法はなしなぞしてあそびるけるに一休の仰らるゝは今さきの出家必ざしうとく佛は五百戒とさへたもち給ひしとのやせめて其のす取の五戒とばよくたもつべき事なりとのたまへば新右衛門申されるは眞に沙門は申におよばず俗のうへにても

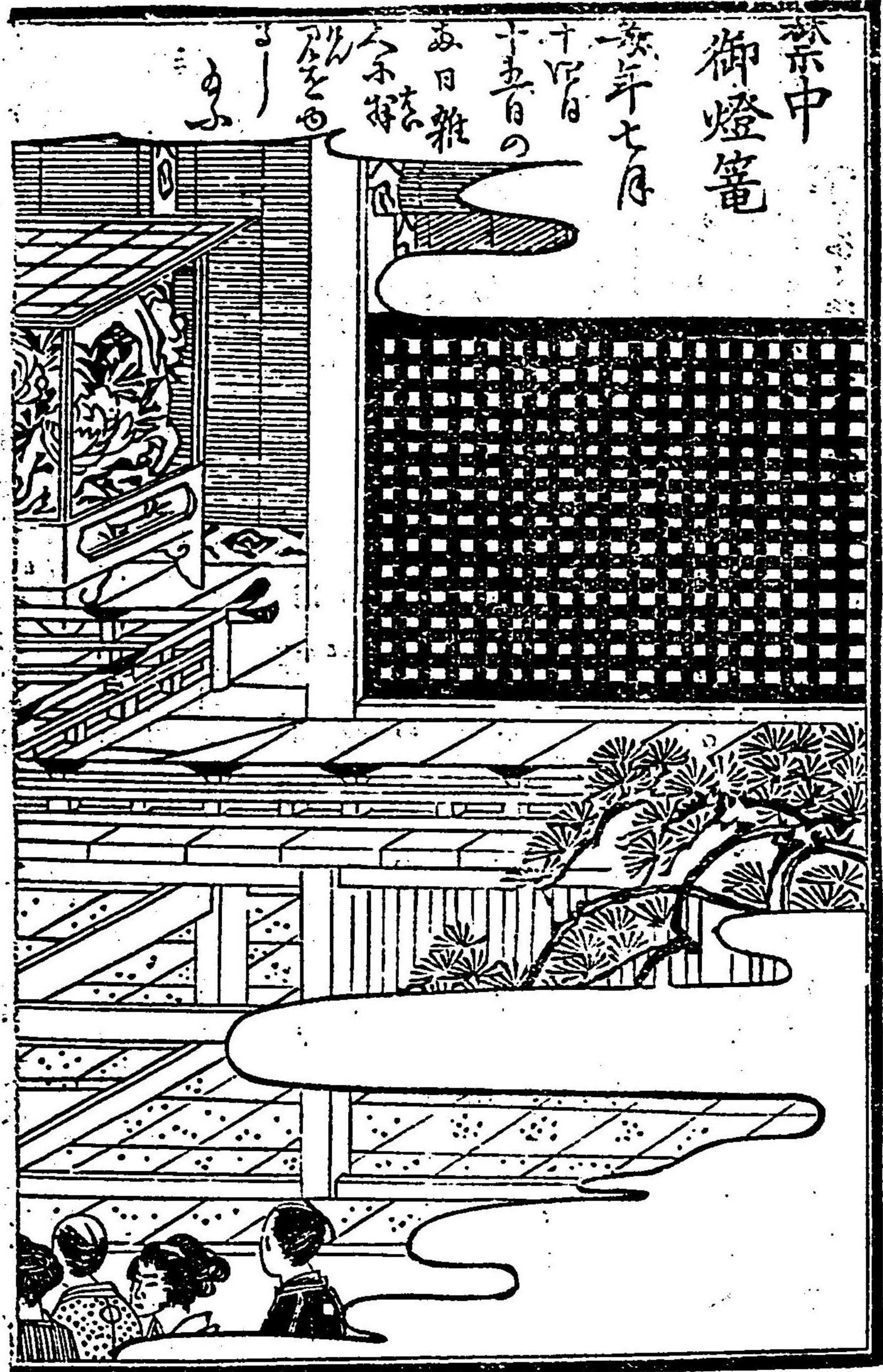
せめて五戒はたもちたき事にと申に一休いや俗は是非なきと也出家にはもたせたく思ふ也去ながら目に見て耳に聞ゆるもの五戒とたもちがたしわすの一尺の扇さへ五戒とやぶるうへはまして俗生としいけるものたもちかたきはとほりなり新右衛門これとさくして此扇子さへ五戒とやぶりいや中にやぶりたりこれ又和尚の出来口にて侍らんで一々とひ申さん答へてさのせ給へいつもの御願作の御る口うけまゐらせんと申ければさらは一々とひ給へ新右衛門とふて曰

- 如何是殺生戒 答て曰 竹と切て骨とはなさるや
- 如何是偷盜戒 答て曰 虚空の風とぬすまざるや
- 如何是邪淫戒 答て曰 かなめとくあはせずや
- 如何是妄語戒 答て曰 繪ろらととのゝざるや
- 如何是飲酒戒 答て曰 開てさゝんさいはさるや

るれ扇の破戒ならずやと仰られければ今にはしめぬ御口ありけれども一入ありがたくぞんじたてまつるさりながら五戒のうちや盜戒のねん答に不審申たくい和尚の曰いなるふしんいぞや新右衛門のいはく古語に
扇走日本扇 風不日本風
とさくときは扇と日本のおふきとさうさうしめ風は日本ばかりとはささる千重同風とあさうらはぬとむとこるいらやとれとけて一句申ければ一休新右衛門とのたまふやわといふ音もあく音もあさ人のこゝるはて



五十一



禁中
御燈籠

一
年七月

十日

五日

五日

五日

五日

五十二

よへはこたふるぬしもぬそびと

とあそはしければさてもよき御口や先ほどよりの問答と御六のしあから一筆あそばされと
て書てもらひてそのまゝ掛ものになされけるとなり此のけもの都の中に持たる人ありこれ
と聞す

○或人一体にとふて云く何と和尚さま世の中に化ものは人毎にきこふしぎと申ものと覺えい
さやうにていや一休答て曰いや只中にふれりとこたへたまふこのとと大にはらとたてさて
も御坊はさこぬ申さぬ御返事なそれ人の物ととひのくるに凡そ法ころ有べきに中にふらり
といふわいさつは終おうけたまはらずそれは人となふりたまふの御出家には似合ぬきふんや
是非とも此うへは子細とたつぬ申さで置まし坊主とはいはせまし諏訪八まんも御示現あれと
大にいり申ける一休この有さまと見給ひさてもく其方はたんさなふそろしき人のあろな
たのやうなる人とはもの、咄しるあらぬ子細は其はなしくはふといふ氣ふんなり先よく合點
してれみやれそなたはもの、不思議ととふもあそなたへ幾度も申聞せる事なるに同じ事と
又はいひ又云おさめるにがてんのゆのぬ人のあるとおもひて只今のやうに返事いたす事也るれ
もの、ふしぎと立れぬふしぎ不思議もなしと思へばふしぎ成事は一ツもあつた佛も神も有
とおもへばあつた無とおもへばなしさればゆるにもあらず無にもあらず扱あるときの中におら
りといふ物ではなきふしぎといはるれば此人手と打てのんじけるとなり

○一休和尚の御弟子に雲知坊といふ者あり九州お住けるが年月と経て師の御もとへとむらはん
とて紫野へ参り寺門へ入らんとそるお小法師棒をもつてうたんとそこは何事ぞといはんとす
れども物もいはれずにけ去ぬ是はいの成事やらんはるく思ひたちて來りしひもなくむな
しく歸るべきのとおもひて又行とときに二法師此うしはひのさと思ふ事のあるやらん度々來
いひてまづのたはらに引入つなきかく其時我身と見れば牛なり心うき事のさりなし是は日來
の信施のつみふのさもゑにこそとおもひて登勝陀羅尼こうしんせのつみとせうめつとる功德
あれとさその聞登て誦せんと思へどもならはざる事なればのなはすせめて經の名なりどもと
なへんと思へども舌こはりていはれそ只る、めくばのり此牛は病のあるにや卿もくはず水も
のますそ、めくと人言けれども心うきお食物の事ともうちおそれ三日三夜そ、めさしが心
さしのつもるにや登勝陀羅尼といはれたりけ物とき本の法師になりぬさてつとととて和尙
の御前お行ぬ和尚仰らるゝは御坊はいつきたれりといひ給ふに三日己前に参りたりと答ふい
づくに今まで有つるをど、ひ給ふに馬厩にさふらひつととて有し次第のたりける和尚不便
におぼしめして彼尊勝たらにとかしへたまへばいよく此坊主得道しけるとなり淺ましき事
なりれそるべしはづべし

○江州しやうれん寺に一休ははしまりける時ある夜ふしぎの夢と見たまふ其隣家に角助と申も
の、親喜助といふもの三年己前に死けり今生に居るときはましく片目にて有しが一休へ夢
中にのたり申やうはわれは死て雉子になりたりいつ幾日には地頭より御狩に出たまふさらば
我命はたすのりがたし此寺へにげ入事あらはのくしてたべ生と世にうれしとおもはん我も
とより御ぞんじのとくうた目しいたりしが其折のらなれば定めてまじののすも多く飛入る事
あるべけれども片目しいたるとしにたすけたまへどものおもひたるそがたにてなく

い百廿七

のたると見て夢覺ぬやしく思しめ所に次の日あんの如く地頭た、とり有けるしあるあき
し一羽寺のうちへ飛入ぬ和尙御覺じて扱はるの夢に見つるきじは是ならんと取て見たまふに
彼のいひしとく片目なしやがてのまの中へ行くしてふたとなしさあらぬ体にもてなし給ふと
ころへり人うち入て愛のし見れせもふらす力なくして出けり和尙此きじと取出して今
の世繼角介にしじうとくはしく語りたまへば角介なみだと流し此島もらひ伺をるしたると
聞はべるふしきなりし事ともなり

○江州に竹林寺といふ寺あり此住持生實脊低くして三尺ばかりなりけるがさる方に思ひ入たる
美少年ありしとひそのにのたらし折々寺へよびよせねんをせられしが何とらしてうちたへ
久しくきたらざれば此住持大に氣とくさらうし何事もうちすてね間にうちふしけるに下人少
しのふちやうはふありしと腹だちまされお枕となげうちしてさんくお悪口しける所へ一休
もとより竹林寺はしたしければはらち來られ此体と見て是は何事といひて腹立し給ふぞま
づくうんにんめされよ何とばしいたされしやと申されければ住持ひろのたりてのやう
くの子細ありて此をろは打たへまいらず何とぞしてよび度みの親兄弟の前としのふよし承
るが何ろ夫となきうこつけしてうちたへきたらざるはいのなる事ととひやり度み御坊には
才覺人なればうろしく頼むといふに一休うちわらい夫の何より易き事なり此ころ澤山にある
菜と錢と小糠ととすこしづゝ紙につゝみて遣り給へ竹林それはいのなる事ぞ一休申さるゝは
なせにこのいふ事あり竹林きいて一だんともしるくみさらば明日のこれともたせやるべ
し今日は雨中にて猶さら心さびし幸ひ阪本より珍酒ともらひたり一休まらられよ我もたべ申

さんとたがひにさいつさくれつ酒宴ならはに一休たつてとぞられけるがせろ歌に

君がこぬとてまくらがしろか、枕なあげろとがはなし。ちくりんくちんちくりん。さ
なちくりんじやはほにきのそんよな。とせりになんよさで。ちやせんやころさ

とうたひのなで、のゑられけりとのしりし事ともなり
○其頃江州鳥山村といふ所に六條あにがしとの、御領分にてありけるが久瀬又右衛門と申家老
とらよく心のもの成のゆゑ百姓といはるものせふりとりあまつさへ農具までもとりつくすによ
り百姓とのづら耕作もあらず在所に住れずして一人ツ、行方しれずのく程にやうく裂る
百姓わすのになり何れもこれとあげさいの、せんがひしめさあへり其中に一人の申やうはい
ろに百姓なればとて是はあまり無道あるしやうのな耕作の道具までもとられては何と以て作
りとせんしければ在所にありてもせんなしとても死する命なれば此事と一先うつたへて其後
はともものくもならんとおもふはいのにと申ける此儀もつとも一同しさて訴状と認むるにい
よんでたれられといふといへとも皆一文不知のものどもにてたれら書んといふものもなし折
ふし一休はちに行給ふと幸の事なりとて皆を立よりて訴状と書て給はれといふに一休さ、
給ひて何事の訴へ候と問給へはしらくのよしとたるあ一休聞ていやくそれは訴状ま
でに及ふまし是ともちて六條のへさ、げよとて歌と書てやり給ふ

又もまたとりてもさうのぬ一村の
のふ具裂らすくせやどり山

とよみて是とつかはされければ百姓どもものゝる事にて中くより上候事思ひもよらずと申け

れは一体いやくこれにてよし是非これとさげよと仰られて歸り給へはいつれもいあ
らんどおもへどもみな土百姓のあつりどもより合ふれば論ずれどもめづらしき分別も
出されば是非なくして彼うたさし上げれば六條の御らんありてめづらしき訴状のな百姓
の分としてゝる事は思ひもよらず定て人だのみて書つらん有のまゝに申べし若原はなばく
せ事なりと仰らるゝよつて一体とたのみしに一体これにて事足と申せし趣と申上げればされ
ばこそ其おきけ借ならではゝる事いはんもの有とも覺えつと興じさせ給ひて其のちは農具
とものへして百姓にあさけふのりしとぞ

扱も前冊についで講談のたりつめ終り侍りしがまことにのやうな座とおなしうし詞とわ
そもみる他生の縁と申るのはなほ事もおはくあるひは夜休もない物がたりに夜日とあらし
どさうつすは同じ事ながら日のつゝへ事さらいのに馬があひたりとて人事ろしりてあた
りあそぶはせんもない事たがひに罪になりますれども此やうな講談説法のまねといたして
一遍の念佛題目もとのうるはまづ悪縁ではあし座興にもれどけふもよい事のまねとすいふ
んしたがよしわるひまねはあるものよい事はうろふもまねられぬつれ／＼脚あも此こゝる
どいいてふられたとふりたへは氣ちがひが丸はだのにあつて大道とはしりあるくになる
はと氣のちかはぬ人があの狂人のまねとして見せんと丸はだのにあつて同じやうにはしり
まへらばこれもどもに氣ちがひといふものなり然も其心は違はぬなれども形かうとけば先
誰と人にしても亂氣でないとはいはんたとへ内に悪心かあらふともまゝ身の行ひ心の持や
う物のいひやうとまねびて儒者のやうに身もてば其儘七ゆしやといふものなり扱内心は

俗であらふともあたまたつて衣と着けと袋のたちでもくびに引つけしやくでうふつて出
もころさぬやうに形もては御出家さまなり誰の俗人といふべきや然れば悪のまねとすれ
ば悪人善人のまねとすれば善人といふものなりどくよいまねとすべしよいまねと申たら
身体のならぬに金持衆のまねとされよといふたではないせめて眞實より佛法はありがた
い物といふ心はこれらすとも身のうへにまねとしてありとも善根とつむやうの手立と申事
なり故に惠心僧都は名利の二字と拜見し給ひて

世とわたるはしと思ひてふみ見しあ

まことの道に入ぞれしき

とよませ給ふ僧都もはぢめはた、佛道とすればと眞のら底あらには思しめさそ彼禁中にお
いて紫の御衣などたまひりしやうなる事と手うらみし人に學文者といはれたや知識となつ
て人に用ひられたやとひとへ名聞利養を修行し給ひたがいつの間にかやら誠の佛心に
ひんがうのびてやれ今までは各利おぼりのり、はつて一大事の所ととり失なはんとせしよ
と急度心とどり直して見れば今このとく大道心の心はおこるはこしうたの名利と求めん
く／＼とたもふて修行したるがもどもありぬれば世とわたるはしと思ひてふみ見しにそれが
たねとありて眞の道お入たるの此上もなきうれしさよとよませられた此僧都さへはじめは
名利と心にのけ給ひたどあり今さきの各何はと後生とねがひたてゑされてもさあ今其方が
くびとさるがそれでも佛道が有がたく思ふのと願ふより上ならばはもはやと後生はねが
ひまそまひゆるし下されと申そ人多るへしそれは身命おしまぬ佛道者後生ねがひとはい

はれずもとより今生のら剣にて身とさるゝといふは今世のたなる修羅道じやのう申愚僧
なとなのくろればどの信心はなかりませぬ其くらゐも成てもひの佛道者はいまどきは
めづらしい事殊に名利ふさい後生とねがふと有はどのくまの命のけるまでにはちの事名聞
お成共佛道願ふがまねよれと思しめしひたもの談議寺参りもなされたがよし又貧乏ものも
あらばはとこそよし心くふ叶はと善根のまねとし給へまねにつゐてはなしが御さるが
次お仕ませう

○さて一休江州にましますときある寺の卒都婆がばけて八尺ばかりの入道よなくとどはの影
お立そふて居ける下部のものとも是とおそろしがり用事ととのへるともならず増てあたり
へは猶参らすいかなる子細ぞと知人もなし或人和尙のうたるとたる一休の卒都婆と見たま
ひけるは文字のちがいありさてはとてやがて改め書たてられける或ときくだんの安齋夜半
のころあらわれ一休の前にひさまづきてなみだとはらくとてはして曰我地獄の中に入てさ
まくの苦と受のとたへがたしわれ御僧をみやのお救ひ給へとたしはくくとくときけ
る和尙のいやく汝圓通より出て圓通いたる何れの所に地獄ありやと仰らるれば入道こた
へて曰いやとくちうと論ずるとあられた、此跡と見よ和尙のいはく其体まどたく佛性同体
へだてなしとのたまへば又入道申やうしうらは名と付てたべといふ一休のいやく本空道入禪
定と申さるゝとさ其まゝ雲さぬくとしてうせにけり其後は二度出さりけり一休にとむら
んが爲に來れりと皆入申あへりけるおはれなりし事なりけり

○あるとき一休痴氣にてこしといたりのびら、みも自もうならず迷惑し給ひいるく養生し給
へともいたみやみがたしさる人來りて申やう其せんきは鹽風呂がなるよりもよく候其いたむ
所といく度もふき付れのやのらぎて即時よく候私も此頃せんきさしおこりしと風呂にてふ
き候への其まゝのやのらぎあくる日のゆるく立るも自由にいたし候間御内の次郎太郎御つ
れなされられに其いたむところよくふのせ給へととしゆるにさらばとてやがて鹽風呂へ入
給ふ次郎太郎もどもに入りりさてのいたむところとふけよとてふのせらるゝに二人のもの
やがてふきにのりける其ふきやうあちくしやうくと云てひたどうちたひてふくと
きに一休つくくとき給ひて何との合點し給ふやらんそのまゝ返答に不奉公くといどこ
たへ給ふ太郎次郎もふしんにおもひけれども主人の事なればいひと問ふともあらずしてう
ち過ぬある人湯よりあがりのたすみにゐてつくくと聞てはらそぢとよれり此人わざとだま
り居てぬくる日和尙のものとへ行申けるは和尙さま夕部風呂へ次郎太郎と連させられ御入なさ
れいやすれば此中はせんきにてめいわくいたし居る所へある人のおしへにて風呂へ行てるの
いたむ所よくふのせよと有也へ夜前湯へ参り候其方は何として知り候ぞいやさる人のばな
しめて夕部うけ玉りひしければ世には風呂とよくものも多くふあるゝものもおほきになんぞ
ちくしやうととふけばふあるゝ者不奉公くとこたへ給ふはさてくめづらしきふきやう
ふのれやうと風聞仕いさやうにふき又こたへ給ふいなる事にて候ると申ければ一休それ
の次郎太郎がちくしやうといふは合點をらと拙僧はもとより畜生おてもなしたちちく
しやうといはるべき覺へなしのらばちくしやうなるしいさのもしあらば彼らが奉公のしや
うがあしきもあならんさるによつて不奉行くとこたへたる也とのたまへば此人ととり上り

手どうつて感じけるとなり

○江州堅田の浦に彌五郎といふ船頭一人ありけるおのがわざあがらひやしきいとなみにやつれ
 いて一生がま穂の磯梅の枕とそばだて眞の道にうとくして心さしさをながらるびその九重の花
 にあそぶどもがらにははるるれどりのづらひやしきになれていみじあるべき事と露しら
 そのたぐ何尊されしへとはなくやまさればいとあまましきよもすがなりけるがつるに身まの
 りて死おける妻子したひなげく事のさりなくさてあるべきにあらざれば火にやせん土にやう
 づまんどのなしみけるせめてゆなる知識とも頼みて後世のくげんとたそけたきと思ふ折の
 ら一休風雲の行術と思しめして浦のうたにねまりゐて四方の致景とたのしみてはしまを所
 め妻子これと見て衣のするにぞのりた、今やうのあさましきもの、相果いあはれ御じひ
 とたれて彼もの、後世のくるしみと導きてたまはれし生々の厚恩おていへしどのなしみけ
 る一休ふびんに思しめし何より安き事あり引導さづけ得させんとて此家にきたり給ひ其の給
 ふ様こそふしんなれ先々死人と米をもにつゝめよとてたはらみ入て繩とかけ丸太舟にのさの
 せ湖水の波にうらべけるれきあいたりて聲とあけ高らうにのたまふやう

此儀はこれ元來米俵にもあらず豆俵にもあらず汝はのたの彌五郎俵あり

江河にしづんでうろくづのあととなり佛果と得よ喝との給ひ水の底にぞつ

さ入ける是成佛の引導也

○又一休堅田の庵におはせしとき海ばたへ立出給ひては毎日つりとたれては魚ととりてまゐり
 けるに弟弟子兄弟の僧達これば不律なる仕合なりとして一休と一間のどろるへよび入口々に異

見しければ一休の曰各たちは學問とそると何事とし給ふや我等は古しへの祖師の眞似の
 神宗の學文と心得たりしものは例なき事は仕らずいで古の例と知ずば見せんどもとよ
 り繪はさやうあり規子の海老とつり給ふて喰ふ處とありくと繪に書一首の歌とのれける
 いにしへのしのこと思くは海老と釣し

我はあにうて魚とつりてくふ

と遊しもの僧たちにさし付さあらぬふりにて居られけるみなくゝの繪と見てさても奇容あ
 る繪や見事ある歌の書ふりやと感じける其中あての老僧あざわらひ古の祖師の蝦と釣参りし
 とて貴僧の若きなりにて魚とつりまいらん事鶴の眞似して鳥が水とのむといひし類なりさて
 貴僧はこの規子和尚のあびつりてまいりし御心根としろしめけるの中、及なき事やと笑けれ
 ば一休少しもさはがす色ともへすさてく貴僧の愚ある心あての規子海老と喰し心根がて
 んはまゐるまじろれ人は若にもよらず老たるにもよらず道にかゝては老若はあはるまじ老たる
 が悟道せば門外のむく犬も悟道すべし世尊は三十成道とつけ給はる我等が祖達摩大師のい
 しぬと承るにあはる時般若多羅尊者の來り給ひて光明がくやくれる壁とさへげ三人の皇子に見
 せ給ひつゝ心とためさんどてれのく此玉と寶としたまはんやと問ひ玉ひしとき御兄二人は
 この壁にまざるたのらは又あらしどの給ひけるに達广大師は七歳ふて一の乙女皇子ありけれ
 ども此玉は世寶にて寶にあらす智光の珠ころ又なき寶なれとて彼玉となげそ給ひけるは尊
 者かどるさのゝるいとけなきみにしてふしきなる人かなとて則御名と達摩と付られけるはし
 めは菩提多羅と申せしとらや達摩とは萬事に達し通じて見のき立たるやうなる人なりとの

どのやもしのれば悟道は老若にはよるべしと一休手と打て彼老僧の意見の拙きと笑ひ給へ
 は老僧も人中にて込付られ赤面して申さるけるはる口ふまうせて申されたり如何に口おて
 はいふども心はさもなきものなり貴僧は實正規子の如びまわし御心根としり給ふの一休
 答へて曰中々存知たり老僧申さるは各いふ思しわふそれ禪宗は以心傳心なりいで規子
 の御心は知るべき規子の心は規子ならずばしりがたしとあざわらへば皆々尤と打わらひて
 規子の心はなかく凡人のしるべきあらずし一休は規子になりて御覽しける一休少
 もおくせと扱々おのくはふるある事とのたまふものな我等は規子にならねども規子の
 心はよく知りたりと宣へはみあくはうけがたき返答あらん一休さればとよおのくは
 此一休が心になり申れねば愚僧が規子の心になりたるならざるはしれ申まじと大に笑ひ給
 へはたのく藤咲門にてにげられけるとや
 さて爰に善惡どもに真似ふよると申事の御はなし申らうある人會我ものがたりの淨るりあ
 やつりと見物に行き彼十番ぎりの處がふもしろしとのみ思ひこんで彼五郎十郎が祐經と討
 た所の不斷目に見ゆるやうあつたとき日頃念頃なるものひとりきたりて酒に夜とよ
 してつひうこにねて前後としらす高いびきしてねるに此十番切のとき男居ねむるに目がさ
 へて寝られず折ふし彼夜うちの五郎十郎が淨るりよれもいひだしてむらしの祐經がうたれ
 しも此とくね入つらめあぐさみに兄弟が討たるところと仕方して見んとよつと起てあがり
 お刀脇さしあるにまらせ雨刃きめて其方は工藤ではないの我こそ會我の何がしなり親の
 たきののさじと刀とそらりとぬきぬながら入たるもの討は死人とさるに異ならずのくもゆ

たりにねるもの覺悟せよと枕元の縁にねどりあがつてふみならせば此男目と覺し南無三
 寶とふんせしもせずしけ行て次の間の屏風の間お飛りくれてふるひくさしのぞき去と
 ては人たがひならんさらく身に覺るるし我は生たる鼠一疋ころしたる事侍らすと手と合
 て色青く其與と覺せしのはと見て此たもとのしさのさりなく是はあやつりのよねじやと大
 笑ひおなつた各くおとめる此たとへなりのたきといふは八萬四千のぼんのんの敵つ
 るきは念佛題目の利劍也の煩悩の中の大将無明や元品やといふ敵めは聲聞や縁覺といふ
 修行者さへ手に余りますましてこなた方の千人万人の勇力では行ぬ事じや是の行くらいな
 らば何れもまねにありとも名聞お成とも後世とねかはせられよ善人のまねとし給へとは申
 さまめともろれが行ぬおさせめてもの事によいまねとめまれよまねお成ともそれば今の如
 く人たのひてござらうときもとつふす敵もあればとこころでは功とつみ徳とをさねて名聞の
 中より眞實の道理があらはれて眞の道お入事が有ぞと申事と悪心僧都もくれく仰られし
 事ありさて真似にも物事さまく多れけとも此やうに經文のはしくれでもよみたり聞たり
 するまねの其中ではよし少でもわるひまねあせぬのよい世話に佛のまねはそれと人まね
 のあらぬといふ金持どの鎖位高な衆のまねれの分には似合ぬまねならぬといふ事じや今
 の真似といふは其やうなけつらうな形するたのまねてはなし只心内とあしく持するた
 およき取まはしとらつせといふ事とらたに
 のしこまにうつせばなをうつらざらん
 花の色なる山ふきのいろ

とよみたるやうにうつろやす又まなぶと思は、品形はめんくの生付貧福は過去の業心は

なごのしこきよりのしこきにはうつさはうづらざらんと書たるよよく心得く真似なされよ

○爰に一体の時代に蜷川新右衛門尉尉當といふ人ありけるが禪法に身とやつし必となやましけ

るに一体の發明なる事とさ、及びて導師とたのみ奉るへしとてあるとき一体の草庵へたづね

行柴の扉とはとくたぐに折節和尚出たてまひいなる人ぞと問ひ給へばいやくるしうも

いはず佛法修業の大俗まいりていと申されければ一体はやとひたまはく

なんぢはいづくの人ぞ 答曰 和尚と同國 鳥はのあうく雀のちうく

國には何事も侍らぬる こははいづくのしるや 尾花朝のは紅菊紫蘭

いゝんとしての染けるや 宮城野のはら 氷は流れて沈々風は吹て飄々

ちりての後はいゝん 原には何事の侍る 遠く宗には一物もなし

まご哉やこれくと請じ茶とまらせよとて なにとがなまらせたくのあもへとも

返歌 一物もなきとたまひるこゝろこそ 達宗には一物もなし

本來空の妙味なりけり

と申されければ一体のたまひけるの聞及びしより蜷川どのに道心者ありとて感せられける

さて四方山のはなし過て親當申されけるの少し承りたき事あり邪正一如といふ心得はいゝあ

るがよよく侍るや一体聞給へとて邪正一如の心と 生れては死ぬるなりけりおしなへて

又問空即是色とはいゝん答へて しゃのもたるとまもねとも杓子も

又問色即是空の心は 紅葉にかけばくれなわの玉

又問世法のいゝに 花と見よ色香もともにちり果て

よの中ぞくふてはこして寐てねきて ころなくとも春の來にけり

又問佛法といゝの成心得とにしとし侍らんや さてそのうちしぬるはありよ

又問佛法といゝの成心得とにしとし侍らんや 佛法のなべのさのなや石の聲

と一々問ふ言葉の下み歌よみてこれへられければ親當舌とふるのうして聞及しよりたけき活
僧のなど頼もしく思ひければいよ／＼道と示したまのれいつまで語るも濱の真砂のあす／＼
なれば先づいとま申そとしてしほり垣の邊まで歸りけるが手とばたどうち立歸りて一大事の安
心わそれた佛にはいゝ、して成けるぞと申ければ一休さやつめいくせものなと思しめしそ
れのいと易き事也とてふんぞりのくりて目口とひろげてうくして佛にのなるよとのたまへば
親當おどろき活大禪師のなと心空及第してころのへりける

○一休和尚の奈良のたき木といふ處に折々のかひしまと其邊の村々の近衛の御領地にて有
けるが左近尉といふ家老百姓とひたものせぶり取けるに百姓でもこれとあげさていゝせん
とひしめきあへり其内老人申けるいゝに百姓にあたりさつしとても武家どののるか違へし
御公家の長袖なれば訴へ申し見んとて訴状とたくみける所へ折ふし一休鉢とひらきに出給ふ
百姓とも一休と請ひこの訴状と御書下されよとたのみければ安事なりいゝなることのをとの
たまふにしゝの／＼の事の上し申ければ長々しき狀までもなし是ともちて御館へさ／＼けよとて
／＼の中は月にひら雲はなに風

近衛どのには左近なりけり

とよみて是とさら／＼とした／＼めつらはされければ種々の百姓のゝる事にて免多くたまはる
事思ひもよらずと申ければ一休ひらさら此歌とのみさ／＼けよと仰られて歸り玉へばせんた
なくこれと御館へさ／＼げければこれは何ものゝよみけるぞと仰出されける百姓申けるは薪木
の一休の作にていと申せばその放者ならはるゝる事いはん人今の世に覺えずと興じ玉ひて

多くの免と下されける

さておどけたるはなしあるともある座頭の前よ所て山椒にむせたるがわのしさにうはさした
ればさのしき男居あはせわたくしろのまねとして見せませうとて手元にあしさんしやう
と二三のう口へいれてひとつふたつしわぶきして口とどらし目と白く黒くなして舌とそ
ゝるうちに此男誠にむせて息と内へばうりして水と／＼といふさへ思ひですころりところ
へたよれて目と見つめたるに一座にありしはどのもの誠にむせたることは夢さらしらすさて
もよくにたり真物のまねの上手さよう男じやうつりまそよいや／＼とほめて心にはあ
あまりなるさまねじやとお思うち煙の中へてけまるびたるにもまだわきよりのまねと思ひ
たるに煙にてこびんとやきあまつさへじまんのほうひげ／＼むりとなしたる跡と見て是のま
とにむせたるやらんとはるにみな／＼おどろきて水とのませ薬ともちひてよびつけし
やう／＼の事にて息出まつあたま灰だらげあると打ひらひあとしてさぞやくるしりつら
んど笑止のれば彼男へらす口は何とあまり真似のねいりて真心のくるしさに面目灰にま
ふし申たと秀句にし大笑して座とたちました其頃は近邊に此さたばのりとなして笑ひしと
なり先此やうなるねいとんといらぬもの今とさの若衆のくといらざる役者またはものも
らひの真似のととなし給ふ同し口てんがうあらばよみもの切はしでもあそこで一日こゝで
一日聞て庭訓往來山高きが故に貴方に向て武道勝利と得ざる事子程子のいはく孔子は大學
のいにしへあんとたどへ取集めわけもなふよめどもやうの口てんのは聞安し扱はうた
ひでも父一町で十番はとうとふくらむでも余の口まねよりはさ／＼しゝのりめにもよ

似となされよと申事也。やうの事は子どもときより親たちの心得てやういひさのしや
ませ先入主人と申て子どもとき愛たるはとしよりてもわすれざるものなり

○一休丹波路へともむき給ふある山里に二三日とうりう有けり在處のもの、申けるはいにた
びの御僧この郷境に二町ばり南郷に天台の寺の庵の此寺夜るになればとさまし家なりし
て色々しきなる事ともあるにより我をまんといふ坊主なし其子細は去々年たびの憎たのみ
よきたるに地方より三年忌の卒都婆とたのまれ此坊主の書たる其より時ならず火焰もゆる
其火の高き事一丈ばりあり郷内は申に及ばずり郷二三里の外までも其のくれば
其坊主もさましく経多羅尼と修しとむらひしるもしるしあければいつの頃の此事はすらし
くや思ひけん夜ぬけて行方しれず故たこの里の女わらべよるにもなれば怒れて門せとへも
出られず其のち成坊主と入置しに是も三日とこらへそして又出られ其よりわれ住せんといふ
ひじりなければおのそのらあき寺となりくちばてんころ惜う候へ是にいなる事にてやあら
ん一休聞給ひてさやうの事はいはともあつと也あれば別の事にてはあたまし定て卒都婆の
文字の書ちのへしゆあならんるれし書なほ北參らせなば別の義あるまじさらば同道甲さん
とてくだんの寺に行見給へば法華經要品なりわんのとく文字一字ちがひありあらため書直し
給ふ其文字にいはいく十法佛十中唯一乘法無二亦無餘佛方便説とるさこれと立たられよさ
ねて子細はあるまじとて和尙はるれより西國方へへるさし給ふ其後は此寺無事になりけり
りひとへに和尙と佛の化現なりいはぬりのなりけり

○又丹波のるのべより三四町南の在所にめといふ女あり母一人にぞ有けりその三四軒となり

の喜入といへる者の方へかねて縁付のやくそくありしに或行いなる意地やあけけり
くいひさのして契約返のへさせて隣郷よりあるもの、娘とよひ入けり此女これ無事に
もひて病となり終に死たりしもの喜入なるもの、あたへ亡霊よとにきたりて娘のへ喜入
の首としむる事たびくにして其恐さのさきなしあらののむのへし女もあろしくて親
里へにけ歸れり喜入が親類此事となげき神子山ふしとたのみてさまく前禱となさといへど
もさらに止さし折ら一休園部にましましとさよして此よしとねがひしに和尙地獄の
講よのきてこれ喜入が首にのけねるへしまた家のうちにはるへしとのたまふと教のまに
あしければ其後たゞ亡霊きたらさしとあり

○又讃州三木の郡より二里ばり奥の山里と修行し給ふに在所のめんく申けるは修行者には
何國より來り給ふ人そ此邊は草ふのさ山なれば元より佛とくやうする事なけれはまして御僧
などには一鉢の慈悲とほぞこすといふ事もつてしらす誠に今生の罪人といふは我々の事な
らんあはれ是にしばらく逗留ましませのし一家一句の道理ともうけ給はり活佛にこそならそ
ともせめて死佛ともならはなといひて四五日もこゝとめ置けり一休申さるは定より北に
あたり松林の見候い成とこにて候や在所のものたへて御尋なくとも申上たき事にて
候あの林につきて御物のたり有抑あの林のつちに古寺ありしるにむのしより變化ありて其
形何ともしれぬもの三人出てよな／＼かとりくるふいの成法師にても三日と住せすして立の
く也此寺古來より由來ある寺にて本尊は一刀三體春日の作とやらん申傳候也尤什物もあま
たあるよしなれとの變化にてたれの住せんといふものなと御僧貴くましませばあはれ變化

ともしりうけ給ひて此寺に住したまはばこれおすぎたるよるもびなしとくはしく語りければ
和尚さし給ひうれこの一だんの望みあり佛道修行もさやうの寺ととりたて、ころ本意と申へ
けれいつれもたのみ申せばや、肝煎られ玉はれとのたまへはいつれも大によるこびてやが
て同道し彼寺にもなひ和尚ひとりと残して皆々にげのへれりしるに其夜五更にもみれば
聞しにたうはず人音して三人の變化出きたりかとりくるふ一番に出しはけものうたふとさ
ひは

東野のばづはいとしい事やいつとらくともおもいもせいではねはそんなとあしうちと
りて終にはのへのつちとなるく

又二番目の化ものうたに

西竹林のけい三ぞくはあるらひもなきのたわにうまれ人のなさけと得らうむらで竹の
はやしあひとりぬるく

又三番目の化もの歌に

南池の鯉魚はつめたい身やな水と家どもじきともそればいつもぬれくひやくと

とうたひひたものれどろさける一休一合點したまひ何さまさやつらとしりぞけん事やその
べしと思ひてさて夜と明し所の人々よびよせ變化のやうとありたり先一ばんに東野のばづと
いひしは是より東の野原に馬のされううへあるべし又二番は西のやぶのうちに三足のはと
りあるべし三番はこれより南のうたに池ありて其うちに鯉すむべしこれと取集め給へとの給

ふは色に人よふしきにおもひそれくさがし染むるに其ものみなくありしのは一休其品と
舞りて讀經し給ひしらは夫よりあつて怪しき事なく一休すなはちしるべき僧と住持せしめ
和尚はなはく奥へと必さし給ふよつて今にいたるまで一休と權者といわぬものぞなき

さて今ばんの要義は妄語戒のあらまし講談いたし申さんとて妄語といふみだりにうたるとよ
みてうそつく事といましましめたまふなり經にいはいく妄語の罪衆生として地獄畜生のきに墮し
てくるしみとうくたまく人間に生るれば二種の果報と得る一ふは多誹謗せられ二ツは
常に他人のためにたふらるるさるとあり此心はうそをつきたるものは地獄におち又餓鬼道に
おちさては畜生にうまる其あひた十年ならず三十年ならず百年二百年ならず何千何萬年と
いふ限りなき間此三惡道とへめぐりそれよりやうく出てたまく此世あて念佛の聲經と
よむ事とちよつと耳にふれたる功德によつて人間道にうまれきてうれしやと思へば今の二
種の因報とは誹謗せらるといふて誹もそしるといふ誹もそしるといふ字にて人にひたもの
そしらるゝむくひと得二ツに多く人のためにたふらるるゝと切てはの盗人めに何のの
とだまされおどわらされて手に持たるものも人にとられ當分我が身のよき事と思ひて談合
にのる程の事皆のたりにあふて損とする又しても身味と持ることなひてはたはれ手に取事も
大はつあなりつゝの身に身とくづして路頭になすむ身とあると多人のためにたふらるるゝ
とは説給ふなり何れもこれと聞たまへうると付て當分人とならすとはなへともむくひが
皆おのの身にむくふてあたまのあがるこのないはみな大きな嘘とつく故に物とらちのあ
の事なりうらめたさいつぱりといはぬやうにし給ふおたしなみ是に付て商とれしやる業

のふしんがござるうろついで當分後生がわるのらふなら私どもも得うのみまをまひとあ
るによりうれはいなせにとへばされば商ひといたすのらはたとへ五十目いたす物も六十
目とも七十目とも申あはうらしい田舎方のわれは此男とぬのはぬくものは有まひと思ふ
て十文のもの一貫文といふけて九百目は直と付ても未ふそくりしきははとわざと
して恩にうけてまけるふりといたし扱同し都回國同いあの内にも商の功者の行程此や
うなうそと申あけ又其外人のしらぬ内證算用あひの所でもわれながら是のういて出るは
なうそじやかどぞんじならそぎひの事なれば申さねはらち明すさて今晚のやうなる妄
語のいましめとうけ給はればこわいすささしい罪と得まをなればこれ何とも了簡にあた
ひませぬがとふそこよとば談合なされ下さりませるんだのといふ人がござる此ふしんにも
なふて叶はぬ律義ないひふんで侍る此うろが罪にあるのならぬのせんさくは明瞭いた
して聞せませう

○さて又濱州に榊原兵内と申武士あり久々わづらうて儒術と盡すといへともさらに其しるしな
し殊に重病なれば最期近づきぬ折ふし一休坊内にましますよし其のくれなく内々殊勝なる御
坊のよしき、及ばれいろきつあひと以て此度りんじうの一大事とまきのせ給ひてそぐなる道
へ引入たまは、有がたあるへしと申つゝのしける一休聞しめし夫こそ易き御事ありとて其ま
つゝのいどつれて参らるゝ和尙とつくらふ事もなくやぶれ衣にやぶれ紙子の所々はのりば
なれさなぬらとびの身ふるいしなる風情もこれよりまたましならんといへる風体にて病人の
間近くより給ふ家内の人ども日頃さゝかよびし僧なれば何さま成佛安心至極のむねと聞へさ

と我もくも次の間にのめあけのうべとのたふけ耳とをましてさく所に一休あにどなく病人
の耳に口とあて、大音にて曰ふは
汝そでに末期や我も行人ももく只これ一生は如夢 如幻
とくいひすて、のへりたまふ何れも勝手には一門家の子あつまり扱もく、めづらしうらぬ
一休坊主のすゝめあな夫らん終とすゝむるといふ事は成佛のんじんといひさのせて心安くと
はらそるところりんじうの一大事とそゝむるといふものなるに、る語は坊主のいふ道もな
く皆がんせんに人とはいふ事なりさて一狂の坊主のなま口々に申あへり、る處へある出
家さたり此よしとき、いやくそれは何れもの不合點なり一休はとこころ候へるやうの語ころ
いふにも殊勝にとばへ侯惣玄て禪宗悟道の坊主なま、いふものは余宗あとのやうにあるいは
悉佛題目ととなへ尋ひとこころへ御参りやれありがたき事のはするなと、いふ事は禪僧なん
どは申さぬ也いふもく、右のすゝめしやうやと申ければいづれものとも御さいこの順化面々
ぞくあし皆一同にのんじけるさて御内に恩と深くうむりたるものとも御さいこの順化面々
たれくゝなるそと其用意とくゝにひしめきけると一休はのりにさゝ給ひて其夜門前に一首
の狂歌とたてられける

世の中に生死の道につればなし

たゞさびしくも獨死獨來
明れば御内のものこれを見付てさつそく老士へもち出て何れもうちよりぬなるものいたつ
らんとせんさしける折から又あの僧申さるゝはこの作者別人ならず一休禪師に必定せり實元

の狂歌のな此うたはみな人はひとり来てひとり死する身なればたとへ誰のれ冥道の供とすればとて便にいはるべけんや五十人百人殉死するとも自業自得過なればめんくの罪障により百人が百所へわかれ行て主人に付従ひ行ものあわらずさればあたら若者どもと殉死なさせんと欲きて此歌と立られたるならん今殉死せん命とまつて世繼の君と守護なし王はんこそ御家長久ならんと理と盡して申されければみな此断は同じつゝあさねた殉死のさたはなありけりされば死するに定りたる面は一休と活佛と尊みし断りせめて道理あり

愛に一休津の園の山里と通り玉ふに二人の山かつ有一人は伏倒てあり今一人は畑とつ父子ありよりて見玉ふにむそと毒蛇のためにさされて俄に死たり父なげくけしきもなく一休にむかつて御房そのおはせる道のほとりに小家有これ我等の内なりてうれよりしめと持きたるべし只今息子は俄に死したりさすれば一人の食ばりもちて来れと申てたべといふ一休ちのくより玉ひてそれ父子の別はあしあるべきがいろあれば汝はなげきの色なきぞとひへば男こたへていづく親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意は親子のちぎりは鳥のよるはやしおより合て夜あけては方々へとびさるがとくわづらのちぎりの間あればなげく事なしといふ心也一休それよりおしくの家に行くだんの通りと女房につぶさあたらるゝ扱はとて二人のこしちへ登し食物と一人分さしおき只一人のばり持ち出る一休とひ給ふは其死たるはなんぢが爲にはいかにといはれければわらはがためには夫なりと申て少お歎く氣なし一休仰けるるれ世の中に死るといへば他人の身としてさへあはれと催ふそにまして夫ならばうなしあるべし殊に女性にはあなきものなればいかにあるべしとひたまへば女こたえていはへ夫婦楽

市人行合要事過方々如散とこたへて行過けりあるの意は夫婦のちぎりは市により合てようとのへとはればめんく方々へあつるうとしながらへうふべきものにあらずといふ心なり一休もふしぎの思ひとなしてさてもあやうある山家にあつる生死無常のことはりとよくあきらめたる男女もあけけるよと感し給ふ

さて前夜れよくそく申た先うろといふにさまくさる其品をあら申そへて一々道理ともつて了簡いたすのへすく此所とさくはと實事に通するのんもんのところくせけれども心としづめてさ玉へののの徳に成て永の苦とぬける善根耳のあつとつて、うもんあれ先釋迦如來世に出給ひて一切衆生に法とてひて聞しめ玉ふ惣して説法の儀式で先禪定に入て今の何とて聞せたものであらぬと分別あさるに如來の御心には手みじのに三界唯一心の道理とてひて聞せんと思し召れてはじめに華嚴經といふ願大のおしねとてひて聲聞緣覺に説きのさしめたまひければとしつんばのとく一さい合點せするこで佛のおもひ玉ふは眞實のむねとてひて聞しめて結句衆生等が合點行すさらば氣に入やうに何ぞ方便とてひて佛のこゝろあひ思しめさねとも先當分の氣に合して何成ともつべくと口にまのせてはしじのなる事と取付て無事と有と説ある事と無事と説て見たりまたあるでもあしるいでもなしとときむらしの物たり今のはなしのやうに作りなして五十年の間御とさなされた今時の人もさうしき評判にもいかに佛の御ときなされたとても是のあまなりなうとつて給ふといふ人もありうらにさまくありといふがこゝじや先佛のうそとは今のやうに人機に合せてとにも角にも衆生の爲の事によられし佛になれしよき心がこれのしど

善根す、めの爲に御ときあされうるといひながら其うろの御らげによりて三界の火宅と出
 るはしとあり生死のうみとてゆる舟となりてついに極樂や寂光土や寶報土などいふけつこ
 うなる世界へ生て苦とまぬられて樂と得る爲のうろなれば先是はけつこうなうとでは侍ら
 ずや然に世の中のうろといへば人とたふらうしてなりともおのたりともおのれの爲の
 よきばかり心にのけて先さまの身体がつぶれうともくびとさられうともおのまのす他の害に
 ある事はあへん見ず其もの、さのつらぬやうにうろとつきてたらんと世界のうろといふも
 のなりうろといふ名は同事でいふに必持のたがふ事は天地黑白のさうむの有り、と分別し
 て見れば佛は人のよくなるやうにうろと説かぬしの身に、はらず又ぼんぶのうろは己と
 立んどて人とたかすとのちがひがあるは格別のせんさくして商人のうろには先け直の事
 たゞし是は何と買者も見せにたちよるのら覺悟して定て商人のくせのけ直といふて有ふは
 心にこちららもよいのげんに直ざるへしとたがひに合點づくなれば先にも少し合點し
 ぬる事てなし然は是はのけ直と知りならの上なれば世中のうろそのやうにだましたふら
 すとはちがうて有世のうろは之としらせんやうつくなりまたある所の見世に合點づくの
 上なればこそそのけ直なしそら直るしと誓付してたくところもあり其外はのけねあるに極
 るうへは少しもうろといふ物ではないはとにのまへてうろとあはすと分とのけねい
 るふて利とあるがらんやうありなんば正直に商しても利がみければ妻子とはよくむ事ならず
 或ひは旦那に損かけ拂ふべき所へもはらはすとなるのるれ結句大うろとなり大なる罪と
 なりとも人のうらみやうくる事なくせん也のく申ともみそく生馬の目とくじるやうな事は

余りなればのけ直といふはとはめんく商ひする人のこゝろもちにあるべきと也とに出家
 妙門なと高利ととれば珠數のみとてそのまゝのへりて其家滅す此のあさくらさと思案して
 渡世のための事なれば未來の事はさづひあし物じてがいにならぬなり人の爲になる事
 嬉しが事ある事面白き事心のやはらぐ事は少くも罪みにならんはとにのく悪ひ
 うろとつらせらるゝなどのましましめでさるまた武士とてには謀計をぞ、申事あり是は又
 別義でござるこれは退ておはるし申ませう

○一休伊豆の國にてある人山猿と一疋とらへ柱にしばかり付なさけなくもうちた、さそでに打殺
 さんとそへさところへ和尚行おはせふびんにおもひ乞取てはなしやりたまふ折ら夏頃な
 りしが成夕ぐれにくだんの猿いちごといへるものとふきの葉に包みもち來り一休へさし出し
 ける一休のはゆく思しめし布袋に豆と入てとらせらるればとて歸りのさねて又其袋に粟と
 入てきたりみぎのとく和尚にさし出してのへりけるとなり畜生といへども命と助けられし思
 のはとよくしれり然ば人間の身として是非のわらちと知らぬはさるにはとれりとのんぞ
 給ひ此事と旦那がたにてのたりたまふそふしものなかりけり

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり常に百姓の業となさず殺生ののみ大酒博奕はいふに及
 ばず其外わるき事のこりなく大いたづらなるもの有常々猿とひける然るに猶助といふ一
 男あり嫁とむのへしのも懐妊にて七ヶ月といへる頃右衛門かける猿何やらんそこしいたつら致
 しけるとて猶右衛門大にのり猿と柱にく、り付七八日も食とあたへずせめければ終には飢
 死をしけりかくて此嫁十月に滿て出産する處の女子目つき面のとくにして全身しるも

五六分は毛生でさながら猿のとき小兒なりこれ全く親の邪見孫にむくふ處にして和尙の
あたり見給ひしその物がたふふるべし

○一休初發心のとき越後路へ修行に下りたまふに信濃上野のさひ近きところに湯澤といへる
ところにてはや日の西山のふたひくゆる宿とこひ玉ふに在所のもの申やう御房宿と求め給ふ
ならばひるふに見ゆる山中古き堂ありこれへ行一夜を明し玉へさりながらの堂には天狗
住よしいひて住持とるものあく久しき空院なりその心して行給へ和尙それこそ望む處ありと
てやがて行て見給ふに此邊すべて山多くして陸奥の方へ望つ、きにて駒ヶ岳坂戸山清水白雲
松ヶ岳ないといつれも高山ありて物すさき土地なり和尙の堂へ行て佛だんの上にあがり
隠形の印とむとび心としづめておはしけるところに夜半のころうへの山より人ならば二三十
人斗の音してさ、めきわたり来る一休すはやと思ひ見給ふ所に堂のうちへむらがり入と見れ
ば色白きに、げある法師と手としにのせて小法師はら二三十人前後とみこみて來りしが
○此法師小ばふしばらと庭にとひ出してなんぢらはわれにて遊び候へといふのしこまひてばら
／＼と外に出て遊ぶときに此僧一僧と見てそれにくれ居候御房これへ出られ候へといふ
一休さては見付られたりと思ひて何の用に候やと申さる、い、御房の隠形の印のませひやう
のあしくゆゑ見へ申なり是へおはしませおしへ申さんさらば物見玉へ所詮ささやつばら見
せ申たしとおひ出したり先印むとびて見たまへさらばとて一休すびたまへはよし／＼只今
に見へたまはぬぞといふてるの、ちば主候ともにうちまじはらばとておはらむるつゝおたは
山へるへりけり

さて武士の謀計に申はうろは、なれども左にはあらざる道理とおはるし申さふ侍はとさら
うろとつくは衆人と同じ卑氣なれども敵とうつに謀計と智略とていゝはかりごとがあ
つて随分色と見とられずたばらつてうつ法なり討負せると其うそゆへに大國と納め名と上
手からもどよばれて官祿にす、ひは見事なるなりてうと商人のわけねといひても内と
まもり損にむかひて損とのわけねは手からと名付捨れたる家とたて人とすくふはのへつて
善根とあり商人にも色いろありて已一人よくあらんと利徳と心にのけて人の損失とあまは
そ手前へとり込む分別はありするものは一旦の依古ありといへども終には日月の御罰とあ
うむるものなりとの詭宣とわすれすわれも仕合ふし人ともよくなし平等に世とたるへしと
心がけたるがよし人に損のけて已が仕合とそるはいる品こそはれ二例二種とつらふも同
し罪なれば商の内にもこれらの事はせぬ事あり是は人にしらせす目とくらまそもえ買もの
もしらすのわけねば合點つくなれば人もしりてねざる也のくそと明そとあられて有とのちが
ひにて罪にならんとといふ事明白ありさあこれ御ふしんがはれてござらふ

○一休關東心外寺にしばらくおはせしが此住持もろのかみ同學なればむのしのみと思ひ種
々馳走したまふあるとき一休とせんのおまり客殿に出て四方とつらめておはする折ら地侍
と覺しき人供人四五人つれ來りて一休にむのひいに御坊此寺の寺號山號のなにとやぞ一休
こたへて山號は別法山寺號は心外寺と申貴殿はいある御方にてまします某は矢奈木雪折
と申て此邊近き在所の也此寺とわね／＼承りおよびしま、に參詣申なりしるにめづらし
き寺號山號なりそれ三界唯一心心外無別法にして心の外に法なしいる成とる是別法心外寺と

たづぬるふ二休とりあへず答へていはくそれ柳の枝に雪折るしいう成る雪折とこたへ玉へは此侍大にのんじさてもく答話のしこき坊主のな我等は内々たくみてはへさしあたれば失念そる事あり又はのつて出さる事多しそく時にのやうのへんとうせられし事あつはれの御坊のなとぞのんまける

○又御雲水のころ駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすとてたづね給ふに互になつのしう思召しけらく足と留め玉へとて少しの滞留ありしより近村の凡俗と集め寺僧の法談あとし玉ふと助講などありし折のら隣り村に山喜といふに喜兵衛とて大百姓あり常に隙なる身ふれば殺生のみ樂みとせしが鹿先の柿木に鳩二羽来りとなりしと得たりと鐵砲とり出したちまら一羽とうちかとしけるに一羽の鳩とどろき飛去りしがまた元の枝へきたりとなりしと又も玉とこめめへ同じく打落せしがふと一休和尚の法談と思ひいだして鳩に三枝の禮ありと聞しがささしく此鳩はつがひのはとにして雄とささへうちしや雄と先へ取し事や残りし鳥の元の枝へ来りしは死と共にせんと我がたささと待し事うたがひなし扱々鳥だにも夫婦の約あるものよまれ人間どうまれながら殺生とこのみ是まであまたもの、命とどると樂しみと心得し葉因のはとこそおそるしやとたちまち發心して一休のもとへはしり行若きよりの我があやまりとさんげして御のみそりとさすけさせたまへとて其座にて剃髮染衣の身となり全齋居士と法號とうけ明くれ念佛三昧に入八十有余の年齢とたも子孫榮へけるとなり其とき法名と下さる、とてこゝろよりくひにのけたる愧儡師

鬼とたそふと佛出さふと

○さても因みに御はなし申さふ鳩といふ鳥はくれにかよべば親子ひとつ木に宿となし親鳥のどまりたる枝も三枝下なる枝ならでは子鳥は宿らず又鳥は反哺の孝ありといふ事もありこれは生てより百日が間親鳥にやしなはれ百日にみつれば親と同じ形となり巢をばなれて餌をひろふなり其後百日が間親鳥へ餌とくめかへす鳥なりよつて昔より古人の文にも出たるぞおし鳥にさへ少様の禮孝あり人間どうまれて忠孝のふたつ大切につとむべきの第一なりやゝもすれば不孝不忠のもの出来ると神も佛もあなしみ給ふて鳥にさへれとると示し給ふはとに鳥にとり給ふな形こそ人に似たりとも人とはいひかたき必ずわそれ給ふな古歌に

父母につらふあふぎののにめら

しだい／＼にする廣ふなる

何事もおやの心へのへさる

これらうしんの人といふなり

○越前の府中に長野銀助とて馬上の名人あり一休福井より上り此府中二三日どうりうして萬とどり行ひ給ふに彼銀助も、かよび御齋も上申たしとて和尚とひのへ御齋もとぎて四方山のものがたりのころさる方よりはね馬と曳てきたり御六のしなが、此馬と只今一馬場せめて給はれと申にやすき事なりとてやがて馬引よせのられしが此銀助と申は元來せんきの病にて陰囊大に腫たりけるが鞍の前輪につらへて事の母ののりにくさやうと一休見ておのしく思ひはね馬のまへわはるる大ふぐり

さんふくりんどこれといふらん

とよませられければ銀助大に與じけるとなり

○又下總國相馬郡と通り給ふ頃和知川といへる水上に大ぬまあり此近村にあるもの、妻十二三歳あるまゝ子むすめと右の大沼のはとりへつれ行て此沼のぬしに申けるは此娘と其方へ參らせ望にし參らせんとたび／＼いひけりあるとき又件の沼へつれ行ぬくときいひけるに俄に空すさましくなり雨風しきりにして沼の水立すさまじま事のきりなくいそぎ家につれ歸りしに物のあとより追くるやうにおぼへければいよ／＼おそろしく思ひの娘父に取つき日頃我等と沼へ母のつれ行いひし事とたなるに其夜大きな蛇來りてくびの上へ舌とらうとして此むせめとみてはしばらくありてはうせぬる事度々なり余親此事なんぎに思ひいの、あらんとなげきのなしむ其頃一休同國おまします事國中にのくれなければ智識と聞たつね行因果の子細と語りあらしみたゞ流して願ければ一休さても不便の事やとて猶もくはしく尋玉ひさらば我文と書て得させんるさねて蛇きたるとき此文ととなへ聞かせよ二度きたるとき此文といはく

此女我女也母繼母也無我免爭可取

のくともへさりすべし重て來るまじとのさてつらなる、此文の心は此女めは我子なり母はまゝなりなり我のゆるしあきていひのてのさるへさといふ心なり男よるこびくだんの蛇の來ると待ける所に又れいの如すさましくして來るされのこそとれもひさつかりし文と一々とへ聞せしうばたちまちさへて失にけり畜類といへをも物の道理と能わさまへ二度來らんと申傳へ侍る

前のつぎと申ませうさて人間といへばおなしものつとれもへは人間にもさま／＼品位にちがひ都上藤といへばこれもうつくしひのと思へば田舎にもれとるも有佛といへば一佛にのぎら十萬の芥佛にも五十二位のしや別がわられ其外にわ名は同じ事でもさま／＼ちがひがある是と同名異號の法門と申さまた申さば五迷といふ佛の身より血と出そとがも其内じや釋迦の身より血と出えたるものは彼提婆といふ人大きな石となげて指より血と出しるれゆへ地ぞくゑあちられたるれでわるいもの提婆／＼といふなりしるるに釋迦如來の入めつのとさ普婆といふいしや何とぞ今一度蘇生玉ふへさのさま／＼療治の余り針と御あしにたて、血と出したさお提婆があくと同じやうに地獄におつべしと思ふ所に案に相違し結句血と出した功德によつて天上へ生れて勝妙のたのしみと得た愛ともつて合點したるがよい尤佛の身より血と出した事は同じ事なれども提婆の佛とをねみて血と出し普婆は御いのちとしてみても血と出し取たり血といた事事は同じ事で心が格別なによつて地獄と天上とのちがひは出來るまづそのとくうろとつく同じ事てよい事のため人のため善根のためにつくは同じうそでもよ、ぞといふとよしめさせられんがために提婆とは地ぞくに落しきばとば天上界に生じさしたるもの老や是のまづ經の心じやうそついてもつらひでもの事はつらぬがよしすい分どりちぎつにとめたが當分いつはりのさかたるやふに見事になけれ共神佛の御心にのなうなりなへは現世おは福とくと得後生にのこくらくへめとよ住生し成佛とよげ常樂我淨の四とく波羅みつにのぼりとしやはしやのわいの念慮もなし常住不退に微妙の説法ちやうもんししん／＼ますくす、み後はふのづらまた衆生利益の心もね

こり玉ふべしわらうらやましの境界や南無あみだ佛くさて此度おのくの望により五戒講談とわらましのべましたとく大悲經の中の種といふ種の字とわすれ七悪いたねとまのぬやうによきたねとまのせられよのし今一冊は愚僧がこゝろみの法話なり皆人この文とみて邪見外道の思ひとなして直に活佛となり給ふおしえと書のかしませう

○こゝに常州徳念寺と申浄土寺あり住寺の長老の旦那にて有けるがいの、おもひけん先祖より代々浄土にて候が不斗禪寺へ参り久しくわづらひて程なく死けり其子すなはち禪寺の住持にわんせうと頼むよしとの徳念寺はのかにさして中々先祖よりわが旦那にまぎれなししあるとなんぞや禪家へわたしていんせうさせん事前代未聞の恥辱なるべしたとひ此事に於てはすくびにおほふともわが引導せんものと思ひ定て在所のもの共外あふれものと二三十人ばかりのたらしみぢんになさんとひしめくと此よし禪寺に聞えしおはいやくさやうな六のしき死人と取あひさるとも何のはくるしあるへし入らざる事なりとて打すてぬ三十日のとふらひそきて此徳念寺俄に狂亂して狂ひ出て色々の事と口ばしげけると何れも旦那衆めいはくして座敷牢と作りおし入れば牢とやぶつて出尿とたれては手にさきりあるひは貌にぬり又は己が飯する飯器に入て在所中とて歩行丸裸になり若ものずんくひさき家々へとび入人の妻子とれし付うち倒しなせしてさまくわくるくひしけるほどに終にくるひ死にしけるやがけ火葬にしけるに石なせと打くべたるやうに黒くはなりけれとも灰にもならずふしきにおもひ炭木と山のとくにづみて焼も少しも焼す弟子もこれとみて大におどろきこれ只事にあらずいゝばせんを評議あす折のら一休和尚其ころ常州にましくけるが或人の申

やう上方より一休和尚といふ知徳の借下りぬたまふ此和尚に子細と尋ね見たまへしと申ける弟子坊主幸ひの事のなさらばとて弟子一休へ参りしらくと申ける一休さ、給ひてろは不便のことなそれ佛法と申は人我の相ととめて心と結るともつてせんとすまして僧法師は大じひ心とつて専らとして人とおしゆるものなるに愚痴放逸にしてのばねとわらうら事生ながら犬に似たりあさましき次第ありそれかしたちまち灰にしてやらせんとて諸行無常の四句の文と書たまひて手を死人のうへへなげのけ玉は、即時に灰になるべし早とくとあれはふなしとてとりて歸り彼ふすはりたる死人の上へなげのけ、ればあふらとめてやくが如くべらくと焼て忽ち灰とぞなりにけるふしきありし事ともなりさるによつて和尚と佛の再来といはぬ人ころありける

○一休北國より京都へのほり玉ふとき越前敦賀の宿とうち過のいつの山中に一宿し給ふが何ものいひけん今よ此宿にとまりしは都に名高き舞まひの大のしらあていまは入道して世間とぞて諸國と修行し給ふと承るいさく方々みな参りて一ふく所望せんはいの、皆々是は一だんの事のあとして大勢旅宿へ詰めて一休に對面し御坊はうけたまはり候へば都のたにて舞の大のしらとの、よし遠國遠里までも其沙汰のくれなし幸これに一宿し給ふこそ後ののたり句になし申さん一ふし舞てさのせ給ひ候へとせめりけて申ければ一休の大に迷惑しこれはおもひもよらぬ仰のな見給ふとき坊主なれば經陀羅尼などは少しぞんじたるが其舞といふものさらしらすと断りければ在所のものどもいやくなにとのたまふともた、一ふしの所望候せひく御舞なきならば今宵の御やとほらなふまじいらくとせめりけて所望す一休

さでくろれば誠千萬のために入ちがひなるべしとさまじくわび給へども皆もんもうなる
 聖人なれば更に台黠せず是非をもくど所望すればしばし察じて愚僧けつして其舞さひにて
 になく候へども一ふし舞されば御のへりあぐばせんとなし愚僧わのささと高僧といふ舞
 と少し見思たるがなほつらなく候へども二ふし舞て見申さん先鈴木の三郎が紀州藤白より奥
 州衣川まで付し所と少しまひ申べしといふに在所ものたのぢちが何やらんしらせれども早く
 くどいひけるに一休座とあらため扇とてうとうちてさる程にすゝきの三郎しげ家は旅のし
 やうぞくめされつ、藤白と立出て奥州さして下られけるほどにくだられけるほどにくくく
 と凡二三十へんもくだられけるほどにとばのりくりのへし／＼のたまふはいろゝの事にや早く舞とま
 してゐるに御坊さきはとより同じ事とくりのへし／＼のたまふはいろゝの事にや早く舞とま
 ふて見せられ候へ一休さあらぬ顔にて三郎が紀州より奥州まで七十五日が日数とありて衣
 川へつゝられたる事なれば先くたらけるほどにと三十日も五十日も申つゝけふしてそれら衣
 川に若してのまひとまひて見せ申べしとのくくにも此家に八九十日逗留し衣川の處と見たま
 ふべしと宣ひければいづれも顔と見合大にあされし／＼の間の間さへくだられけるほどにてた
 いぐつし侍るにいろので七十五日が問さく事はなるまじとて皆々家にぞのへりたるとなり是
 も一時の才智なりと人申あへり

○今出川通によしや如齋といふものあり兼て和尙とまじのり厚のりしがうちつゝき用事しげく
 久しく和尙のもとと尋ざりしのは心にやのりけん文としためて此頃は用事つとひ候へ
 御見舞申上す御ふさた申候いづれ近々御見舞申上るなをことりの文と遣りしける其返事に
 見まひとて見まふてくれを見まはずと
 よしやじよさいと思ふ身ならば
 と讀てつゝのいされける如齋これと見て御坊の今にはじめぬろるき御事のみと感おけるとぞ

○一休和尙高野山へ登り給ひ四方の山々とながめてさても聞しより尋きけしきのなとあがめ
 いしけるに高野はじりとも立いできて一休と見ていろなる人ぞと尋ねければ愚僧は名もなき
 道者にて侍るが此山はじめて一見仕候へば余り風景がおもしろく侍ればこし折の詩の歌の
 一首つゝのまつらんとぞんじつ／＼として侍るとのたまへばひじりども一休とは中々れもひ
 がけねばし得らしき事といふ御房のなとわさあいぬるめくらの垣のぞきすぐらの欄で心なく
 さむとやその形はのくみてこそとてうろさむげなる形ふりにて杉は北山の名産高野がみそり
 の亦よりもうすきさるり付にて細首のとあふなき体にて詩哥と案づるとはできたりと口々にぞ
 いやしめ笑ひける一休耳にもめけす空うろふさておはしけるやう／＼一首仕たりて硯紙た
 まいれと申されければ何一首出来たとやさらは拜仕るべしとうち笑ひ筆紙と出しければ
 一休筆ととり後東坡居士が金山寺の詩と山がたに作りしと例として

山秋葉落
 山春開花發空
 山迎連峰報佛心亦
 山高近都卒内院土進空
 山高表華藏世界飛醒寂

山平幽陸化佛惱亦
山夏涼風煩寂
山冬素雪

山い百五十二
山春開心進
山秋落葉煩惱空
山冬素雪寂亦空寂

あくのとき即時に筆とりさら〜と給へば一山のひじり大あおせろささても形容に似合さる見事なる筆跡といひ又目あれぬ詩の体など明たる口とふさぎのねさて〜先刻は皆々よしなき事ともいひて御僧とはづのしめし事へそ〜もはづのしうこそいなる人ぞ御名とあのみ給へと口々に申ければ其詩の下に候どのたまへばまことに小文字候の何一どの申ぞとたづねける其中に一人のひじり眉としばめ此詩の等跡とよく〜見るに京紫野なる一休和尚の書なりさるのら一としるされたりさればこそ曲者なりとふり歸り見るに和尙は彼方へ下向し給ふひよりたちそれとめまらせて過言とあやまれとてはしり付て引とめ一休和尚とも存せずして段々無禮と申たり御免ありて先々坊中へ入らせ給へとゐんぎんにのぶるに一休いや〜何も断はり給ふべき事にはさら〜なしとてきげんよく坊へ歸り給へばひじりたちさま〜馳走とせらせけるさて厚く禮とのべ下向し給ひける跡にて一人のひじり申やうのゝる名僧また登山し給ふ事まれなり願くは大師の御影に賛とたのみ申たらばいかにと云にいづれも尤と同じさらば今一たびひのへしまゐらせんと又追ひ奉るに一休は何事にやと仰らるればし〜のよし中に一休わらひ給ひてうれはどの事また立歸らすともなると御影と急持きたられよとて道なる茶屋に休ておはしける人々おせろさ大師の賛と請ふに立ながら思案もなくなさる、事聞より大博學の祖師のなと舌の根とふるひけり叔大師の御影と持來りければ

弘法大師活佛死ねば野はらの土となる

と一筆にさら〜とした、め給ひて下向し給ふ人々ふの事もありといそぎ登山して學匠に見せければ格別のおどけ事ありしおばまたひじりとも口と得ふさがさりけりとなり
○さて一休和尚能州藤川村の草庵にましませし頃深木のさしに水の上へとよんで松のぼいにねたる松のありける弟子衆とあつめて此松と真直に見るものやあるとたつね玉ふ皆々立向はり入のはり見られければとも横ばいの松なり其とき懸川新右衛門参り合せてわれらにも真直に見て候と申されければさては如何にと仰あれよまことにいがみてこそ候へと申されければ和尙手とらつてよく見られたりとして五十則とゆるすと仰られける
○和尙熊野山へ御参詣まし〜て本宮へあがりたまふころしも春の半あれば山々谷々の櫻都三月の頃よりもいと目出たのりければ拜殿にうちのぼり四方の風色とながめましましける處へ社僧一人まのり出て客僧のたゞ人とは見参れさすと申ければ中々われらはたゞ人にては候はず御らんひへ出家にて候と申されければ彼僧はさもつふしこは真がる御僧のあとひとひたつと物がたりて給ひて和尙この僧は少しはなせる者とせしめし高野山の詩の事とほし出させ此山にても一首と作りてなぐさまんと矢たて〜ととり出しさら〜と書て彼僧にみせ玉へば其ま、神前へとなへてさて〜御筆跡見事に候都人と見申ひがめのと申ければ和尙答へてよく社察しられたりわれは都紫野の一休と云ものなりと仰られければさてはのねてさ、

山平幽庭化佛惱亦
山夏涼風煩寂
山冬素雪

山い百五十二 春開花發心進
山夏涼煩寂
山秋落葉空亦
山冬素雪寂亦

あくのとき即時に筆とりさらく給へば一山のひじり大おどろきさても形容に似合さる見事ある筆跡といひ又目みれぬ詩の休のなと明たる口とふさぎのねさて先刻は皆々よしなき事ともいひて御僧とはづのしめし事へそくもはづのしうこそいなる人ぞ御名とのり給へど口々に申ければ其詩の下に候どのたまへばまことに小文字候の何一どの申ぞとたづねける其中に一人のひじり眉としばめ此詩の等跡とよく見るに京紫野なる一休和尚の書なりさるのら一としるされたりさればこそ曲者なりとふり歸り見るに和尚は彼方へ下向し給ふひまらちそれとめまらせて過言とあやまれとはしり付て引とめ一休和尚とも存せずして段々無禮と申たり御免ありて先々坊中へ入らせ給へどるんぎんにのぶるに一休いや何も断はり給ふべき事にはさらくなしとてきげんよく坊へ歸り給へばひじりたちさまく馳走とをらせけるさて厚く禮とのべ下向し給ひける跡にて一人のひじり申やうのる名僧また登山し給ふ事まれなり願くは大師の御影に賛とたのみ申たらばいかにと云にいづれも尤と同じさらば今一たびよひのへしまゐらせんと又追ひけ奉るに一休は何事にやと仰らるればしるのよし申に一休わらひ給ひてうれはどの事また立歸らずともなると思御影と急持きたられとて道なる茶屋に休ておはしける人々おどろき大師の賛と請ふに

立ながら思案もなくなさる、事聞より大博學の祖師のなと舌の根とふるひけり叔大師の御影と持來りければ

弘法大師活佛死ねば野はらの土となる

と一筆にさらくとした、め給ひて下向し給ふ人々ふの事もありといそぎ登山して學匠に見せければ格別のおどけ事ありしおぼまたひじりとも口と得ふさがざりけりとなり

○さて一休和尚能州藤川村の草庵にましませし頃泉水のさしに水の上へとよんでばいにてねたる松のありける弟子衆とあつめて此松と真直に見るものやあるとたつね玉ふ皆々立向はり入のはり見られけれども横ばいの松なり其とき藤川新右衛門参り合せてわれらにも真直に見て候と申されければさては如何にと仰われのまこといかにみてこそ候へと申されければ

和尚手とつてよく見られたりとて五十則とゆるすと仰られける

○和尚熊野山へ御参詣まし、て本宮へあがりたまふころしも春の半あれば山々谷々の櫻都三月の頃よりもいと目出たありければ拜殿にうちのぼり四方の風色とながめましましける處へ社僧一人まゐり出て客僧のたゞ人とは見参れさすと申けれの中々われらはたゞ人にては候はず御らんへ出家にて候と申されければ彼僧はさもとつふしこは真がる御僧のあとひとりふたつと物がたりて給ひて和尚この僧は少しはなせる者どとけしめし高野山の詩の事とほし出させ此山にても一首と作りてなぐさまんと矢たてとどり出しさらしと替て彼僧にみせ玉へば其ま、神前へそなへてさて御筆跡見事に候都人と見申のひがめると申ければ和尚答へてよく社察しられたりわれは都紫野の一休と云ものなりと仰られければさてはのねてさ、

つたへし和尙にてましまさのどての神前にさげおきしとどり來りしもの事に御名と尋
付給へとねがうにさらば後の代のたり卿ともなりなんと一休老人偶題と云記し玉ふ其時に

七山里放光

五山瀧吟落碧三

三山海浪高船片雲社

一山廟等一扶桑神片漲景

二山客成群數萬人輪塵春

四山樓鐘動月輪惱宮

六山谷洗流煩本

八山花酒覆

一休老人偶題

さて彼僧は一休和尙なりとて自宅へ招じ横棹て庭とは杓子で草とすり御馳走申事あるのな
らず折ふし花のさおりなれば庭前のりなとも見たまへとて酒肴といだしてなごさめ申さての
の信申ける此山へまた御趣ある事ものありがたし未代の實どもなすべければ何にて
一筆遊し給れと申ければ安事なり御望みあれどたまへばさても拜殿にての御作の詩体はい

にしてよりもの、る体の侍りけるのどとふふいにす古へよりありし事なり唐土の東坡居士
の經山寺にて作りし詩体なりとのたり給へばさてくめすらしき詩やされど、る山奥に往
みとに學文もなき文官の我々が言なれ耳ならず候相成べくは愚なる我々が耳なれ目なれたる
事とねがふなりと申上ければ和尙うらうなづ給ふ折ら春風ふさて櫻のばらくどちりけ
れば貫之のうたと思ひ出されて

櫻ちる木のした風はさむらで

空にしられぬ雪さふりける

これはいゝにどのたまへば彼僧いや是もいまた耳なれ申さる處なりといふ又さくらの花の
風にちらされてさつくと見だれければ其ま、

雪やこきあられやこんて御寺の

あきの木に一はいふりつもれこんて

是はいゝにと申されければ彼僧大にうち笑ひさてもかぞけたる御座のなゝに耳なれ目あれ
しものとてもうればあまりに候と申せば一休もわらひ玉ひて實もつともなりいでく其望の
目にも耳にもあれしとよのきてまいらせんとて

さねが鈴海山水こり谷のこゑ

入あひののねに庭前のはな

とあるばしければ彼僧扱もよ御ある日や實に見なれ聞なれしものと望けること應なれど
御口のゐるさとのんじ侍るのくて色々馳走申ければうすなれば東坡が詩と書れくべしとて

山花發茂林	山鳥菓來	山雲飛片	山遠路幽深	山水碧沈	山猿樹抱	山客還相
七山僧	一	一	一	一	一	一
山花發茂林	山遠路幽深	山雲飛片	山水碧沈	山猿樹抱	山客還相	山客還相
山花發茂林	山遠路幽深	山雲飛片	山水碧沈	山猿樹抱	山客還相	山客還相

のく書あたへていとま申てぞのへり給ふとなり

○爰に擧ぐるの事なりしに一休和尚へ常に参りて御心安く御意と得たる又次郎といふ町人ありけるあるとき河原汁としたる食てけるが外に酔ひ終にその日のうちみ死しけるが今はの時に申けるは我世にありしときは死する事はいつの頃ぞやと思ひけるれば後世とて願ひ置し事もなくされども一休和尚へ常にしこう申しし物がたりとも承りし結縁あれば引導もたのみ奉れる、不慮の死と仕けりさこそ哀れとも思召すらめあらずといひ置て終にむなしく成にける妻を尋ねなげさかゝるしみ遺言の通りつゝさは一休和尚へ申上げればいとやすき事

なり授々ふびんの仕合と仰られけるしある所へはや時分もよく候間和尚様御出とあふぎたてまつると再三とよこしければ一休仰れけるいやはやわれら罷出るにおよばす引導つゞきに書てつのはすへし誰にてもよみあげさせてはうむれよと仰られければ妻子なげきて遺言にて候間ひらに浮出下されよ御慈悲なりとさま／＼ねがひければ一休のたまひけるいやはや我等が出ればのへつてのれがまよひとあるなり則書てつのはすへしとて

海中有毒魚	面腹白脊斑	鳴呼痛哉	彼歳五十四	合珠數一連白八煩腦	木曾十七寅の年角
魚	魚	魚	魚	魚	魚
魚	魚	魚	魚	魚	魚
魚	魚	魚	魚	魚	魚

とあはれしてつのははされけるとかやしめればかの／＼肝とけしければとも仰なれば其ごとくにたこなひけるが其引導の書たると其子供秘藏して今に傳へ其家のたらしのへもなき墨跡にて代々所持仕りて有けるとあり

授前冊に御約束申たる法語と書すて参らるる

○君がちとせとへんこともあまつおとめの羽衣よのふ
 註君とは諸人なりいふころは唐の玄宗皇帝の御代にこうゑんといふ人じゆつとあして目の前に宮殿ろうのくとなし乙女とくたして羽衣の曲となさしむ玄宗皇帝與し見たまふにし

ばしもなくさへうせるとふるき文に見へたりしがればちとせとふるとも夢のともくはさるんどのとの又四十里四方の石と羽衣にてなでつくすといふ効石のたへあれば久しき事と見る人のこゝろあまのそへし

○はんせいませいはいはふがうへ

此文よく見てながく生死とはなれて不老不死の身となれり也

○我見ても久しくありぬ仕吉の

さしのひめまついくよへぬらん

われどの大明神なりすみよしのさしとは昔とはなれたる彼岸といふなり姫松とはみやびやのみしていつものかはらぬ常磐木の見どりの松なりいふ心は天地のいまだはじまらぬさきの神代るとき彼岸の姫松と見ておくよめり此神代るときといふは常にならぬしなき心胸なり姫松といふも人々よくこの本智なり松はみさはにて四時しほまぬ物もゑにたとへてのくいふなり今も身と姫松に得れば不生不滅にして變ざる色なくくらしみたへはあれて彼岸にいたりて安樂あるべし諸人此斷としりてひめ松になれとの事なり大明神とは文字におふきにあさらのなるのみとのく神とわこゝろありくらさまよひの人とあさらのにずる神也また一説に姫松が變化して大明神となりてこの歌といひせしともあり是としらせんため此古歌と引給ふなり

○目なしとちとち

目なしとは人々具足の自性なり百姓本萬の見とはなる一のゆへいらく名付たりもし佛と

見法と見心と見有と見無と見本と見末と見と見とて何にても一寸と見ても見る事あらば目ありにして目なしにてはなし本より名もなく方角所もなく然も天地に先だち萬物におくれて古來變滅なく色形なふして千の色萬のあたりにあらはる是世界國土のありとあらもるもの本源なり佛とも真如とも阿彌陀とも觀音とも本智とも自性ともいふこれとしると佛になる人とも悟りの人ともいふなり釋迦一代の經文も皆此目なしとの事と人々にし

らせんがためなり

楞嚴經に阿那律陀無目不見と説給ひ

又同經に曰阿那律陀白佛言我不因眼見十方一精真洞然如觀掌果

云々佛六面通説たまふこれそのひとつなり是によつてこの註と目なしとは名付たりとる

○こゑにつめてまします

よろづの音聲とさくものい者ぞと明くれけてかゝすたづぬる心つるには目なしにたづねあふべしおのくとくして尋ねあいたる人といはんかんともよむ觀音圓通の門とて二十五の度さつの中に第一の菩薩とはそるなり

○扱一休和尚の御袋の淨土宗あて有しどのや一休のなな法言のさきてつらはし又は水のといふ雙紙を送りて道とれしえ給へどもしらく御さとりもあく明暮たゞ念佛のみにて過し給ふ一休聞しめし一段の御心入なり念佛にて佛にならせ給はん事はうたがひなけれども此所

より愚僧が庵へ御出あらむ何のうたがひなく御出あるべし是よく常に道しり給ふゆへに苦もなくうのくゝとあるき給ひても庵への御出有なり又のた田舎人がわが庵をたづね來らんにいの程道にまよひても我等が庵ある上は何れたつねわふなりそのたづねるまでの心苦しきわいたがまよひなりと仰られければしるらば何にても示し玉へと仰られける一休さらは一匂て見まゐらせんとて

目なしとちく／＼寝についてまませ

昔人のさとりとやらんいふことと悟る其ならひのじめに父母もなくとつと己前の我身は何なるぞといへともといふものと知りそとがひるものもしらす然は釋伽彌陀はよし日とはすゐたりやといふものはとはずのたりといひければ一黙してとりける此心と見給へと仰られければ御装のいづく

いへははいはいはねはむねにさつられて

ともはぬさきや佛なるらむ

とあらばしければ一休よろこびたまいてとりあへず一首とよみたまひける

いまわはやこゝろにのゝる雲もなし

月のいるへき山しなれば

まよみ給ひて御工夫尤く／＼とてよろこびてのへり給ひける

○ろもく／＼みな人たちの悟りとやらんいふ事とささるならひはじめに父母もなきとつといせんのわが身は何ものぞんへまのんといふ

父母とは天地のことといふとつといせんといわが心のあるともなきとも天とも地とも我とも人とも何ともすこしもわらぬさきといふと也うまれぬさきとばのりともふべからずもし生ぬさきともは千歳にとよぶともするべからず我今までなき心のなにぞとあるありとこらぬさきには其とこりたる心のいづやうになつていたぞとくのとくこゝともつてしらは生ぬさきともするべし

○なにとしてしらの事申さるべく候やたへんてつもなき物なりと思ふべし

知らぬ事とはそまはち目なしのことなり目なしの萬物にはなれたればへんてつもあきとなり是めなしといひあらはさんがためなりしのをせもひとへに又しらすしてあきといふにはあらずたゝありともなしともへばはやへんてつが有ぞ

○たどへばよしのはつ瀬のはなもみぢ色々にさきてちりてもまたもとの根にのへるがごとしわが心のいろ／＼にとこり又なくなるごとたとへたり其心のとこり又さるところとよくしるべし色々の心がとこらざるは何者がするぞ急ぐに眼とつけて見るべしそれこそ則目なしよ花もろのとくさきてちりてなくなるなり花のさくときこれ何の子細ぞらるときこれ何のしさいぞなくあるなこれ何のしさいぞとしらせんがため也花と見てはるの心としらむとせばあふきて棒とあげて月とうたんとぞるがとさよりものぬ事なりわが心のうちで花の心とも天地の心ともあきららににするなり其證據にはこよみに四時のうつり月日のはこび月しよくまで分厘もたがはざるなりいにしへの聖人なればとて天の外地の外までめぐりあるき見るにはあらずたゝ我心の繪圖と見てしるし出となりそのたがはざる

事どもつてしまへし

○本来もなさいふしへの我なれば死行のたもなにもあもなし

いしへもいまもあらぬわれなれば我といふべきこのはもなし

○世の中のよめがしうとめと早なれば人もはとけになるははとあし

たつなみもたへぬも同じ水なれば人もはとけになりやすき哉

○ゆく水にすすりゆくよりもはのなさははとけとたのむ人ののちの世

石の火の火よりもはやすきはとけとたのむとなとや道や付べき

○うろとつき地をくになつる物ならばあきとつくるしやあいのせん

じやあとののころは経になきものとうりとりて地をくむぞいる

○とへばいふとはねばいはぬだるま殿心のうちに何のあるべき

べつのとあきさといふもりやそむくつひにはひぬぬだるま一休

○世中の人のこのるの佛なればしやあのみだのはれわたす哉

しらざるははとけも人もなしことさてこと人のまよひこそすれ

○極樂も地をくもしらぬおもひでにうまれぬさきの物となるべし

とくらくも地をくもしらぬころめがせうしてけふぞもとのみとなる

○人しぬるといなややさもしうづみもしのけてなくらると思へばまたなくならずして魂とい

ふもの來世とやらんへ行あらたらろしやぬんま王が手にあたりなば娑婆にて作る罪とくる

かねの帳につけておきて鬼に見せてこれはどの罪人なりあしやくせよと云時

えんま王といふは目なしとの、第一の目下なりそこしもわたくしあふしてよく善悪とあ

らためわらつなり罪ととなせばよき事きたり又あしき事となせばあしき事來るなりはや

さのふるさの共むくいあたちにあげのしたかふがことく毛頭もゆるさずつひきたらざと

いふ事あしこれとくろかねの帳といふ是則人との身にそなはりたるいんくわれさせんの

道理これと名付てえんま王といふなり

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話とさすけ給ひしにこの人狗子とて犬の子なりこれに佛性とは

何とも合點まゐらずと申ければ聞て見給へどて仰られけるは

犬の子にあやめる人のしわざこそ

ほどけとなれ地をくへも入れ

むらひどのゝゑのころはまた目があぬ

かつばにまらと入てころくや

と仰られければいま目があきて狗子のころはやうくわらりて候が道徳の有無の處は千年

工夫仕候へども愚知の我等は得道仕る事はなりがたしと申ければ嘆よみてさすべし此歌と

常に吟じて心得て見られよとて

なしといへばなしとや人のかもふらん

そたへもぞぞる山彦の聲

ありといへばありとや人のかもふらん

こたへてもなき山ひこの聲

とあるはしければ彼ものしばらく工夫してしうらば有ともなしともしれぬものにて必しか
と申ければ

有無とのする生死の海のみまよふね

底ぬけてのち有無もたまらず

と仰られければ彼人此うたにて得心して一首

有無ぞしるるにれもひけん趙州も

ありしさきの犬の一聲

と申ければ一休さ、たまひてれつばのま、と一くちまひけるよとてわらひ給へば旦那禪拜
して歸りけるをあり

○五しさの鬼ぞのが請とつてうすめてつき殺して又みめてひてひとのたいとなしてしやばめて
つみの重きはどのしやくそといふ

五色のねにとは五温なりこれも目あし色の、けんぞくなり常にわたくし有ていたつらも
のあり阿責とはわが心に目あしといふ主人あるとしらすば下人の、たつらもの、たのむ
お依て善しむし何のとうたがひるあしみよるこびはら立なせするもゑに其惡がらの、
帳に付るがとくあつてあしき事のみ來るなりこれが則ちのしやくなりた、多の人の此い
たつらもの、下人とのむによつてくるしみとせるなりたのむとは五うんとわれとせる
といふなりた、主人の目なし色のとしらざるがゆる也

○またさるもの、いふには毒藥へんじてくそりとるといへば罪のおもきは佛にやなりなん

いふ心は目なし色のにわふなる人は我そなはち目あしなりと知るこれと佛にある人とい
ふなり其人は經念佛難行などもあさす何の思ひもあさあり經念佛なども大にうけぬゆへ
につみのおもきは佛にやあらんとといふがたさい大師のいはく、つごん無間業三方得のり解
脱と云々五むけんの業とは父とてろし母とてろし佛身より血といだし和合僧とやあり
經像とやくこれといふなり父母とは天地有無なりころすとは取ざるといふ佛も經像とも
もにころしてとゞざるなり解脱とは一期のまよひととふざけはなる、といふ也いふこ、
ろは修行の人傑ともども衆生とさらひ有無の、はる内はいまだ迷なりそれと皆ころし
はて、とらざる人と佛にと成説給ふゆへに罪のおもきは佛にやならんといふなり

○つくりかくつみのしゆみはせあるならは
えんまのちやうにつけせころなし

はとけとも鬼ともころそあく人は

えんまわうとてゆるすべきのは

○よくものよあんするふ地をくもとより遠のらす

鬼といふは惡鬼なり一代藏經はみな人間といためんがためなりあらくの釋迦のやいる

くのうそをついてかゝる

地をくも身心にありくどんは釋迦のへ名也釋迦いろくの經と説たある、がゆるふ地

をくのくるしみとくるあり

○さて爰に申しを八月下旬なれば大風大雨しかりにして落中の家堂社塔もそこねければ、たにかい新

右衛門取物もとりあへず一休和尚へ御見舞申て御坊御内に御さるの何とくの外ある大風大雨御寺はいつくもそこね申さすいやと申ければ一休出合たまひてよくこそ御心付いもの多誠まことにめつらしき大風おてい去ながら當寺は何事もいはずとて

わが宿ははしらもたてずよきもせず

雨おもぬれずのせもわたらず

と仰られければ其御庵はいつくのはどにていぞと申ければ一休わらはせ玉ひてさればこそ大

事のこととれたつねわれとて

わが庵は都のたつみしをすむ

よとうち山と人はいふあり

と仰られければさては喜撰法師と相住なされいふとたはふれければいや喜撰法師にありて居る也とありければさては借家とのめていふと申てわらわれしのは一休また一首とよみ給ふ

ありの世にのしたる主ものりぬしも

のすとおもはすのるとおもはす

とよみ給へば新右衛門此哥と感じて厨子にうき留りそめに参りても得道の徳侍とてよるこびて歸りけのが門より立ちへりてさてくとうしきたはふれ事仰れられしにうのがひ申へきと思ふ事と打めそれのくそでに歸らんと仕ひ此心はいふ心得申へきとて

吹とさばものさはがしき風なる

ふのぬとさにははらつちなる

と申ければそのま御返哥ありける

吹とさばうへさはがしき山風も

ふのぬとさにははらぬなりけり

と仰られければ新右衛門ものともいはずうるづまて誓く禮拜となして歸りしとなり。○それと能くへばよしなのとはすがたりや

いふ心は一休釋迦とたらふくしれども我もまたそでもない事といふたとなりおせおなれば經の文字の心ともつて迷ひとしらす何ともつて此有事としらんや八萬余經千差萬別なりといへども見聞覺知の四門と出そそのうへにひるて永く四門とはあれたると經の文字のこく義ととりてみだりに分別させまじきの爲也しあるに一向に經とて見聞覺知の外お佛ともめはこれ則邪見外道あり人の邪見とおこさん事とおそれて又一休和尚みづよしなのとはすのたりやと宣ふあり釋迦としりてせんもなき事といふたなり法花經に曰舍利佛云何名佛尊唯以一大事因緣故出現於世諸佛世尊欲衆生開佛知見使得清淨故出現於世云々知見とは見聞覺知なりこゝに略して聞覺と不説開との見聞覺知と則佛即心の光影ありとしるといふなり然は見聞覺知の四つは一代藏經の要文なり是とのぞいかに修進かし猶開とはたとへは迷の人はあしき夢と見てくるしみおなしむがとくるればのたもなき事なりと人のいへども聞入すもし又聞しり顔にして我今頼に夢さめてくらさふ火と得るがとにて眞法あきららに見るといふそれもいまだねごとまて夢なりよくゆめの覺ぬる人のいふは我はじめよりねむらされば夢なしなんのさ

むるといふ事あらん其とく性徳まよひなきとしるのみにしでのつて得るとなしあくの
くなると佛知見と開くといふなりまよひの人は見聞覺知とはなるべしとらへども一向お捨
て外ともとむはなれすといへば又とりてけだりに分別する今爰に心見よとらす捨すの事
といふ夢のうちの人よくさく只積木で作る土地蔵がねごとといふと見よるひさらくと
其の音に目とささせ

○ 迦山山無云

出山とはもそん山に入六年端座工夫じゆくして明星と見て元來まよひなきとさとりて山
と出たまふといふ也

○ 一佛成道

一たひ見聞覺知と自性の日ありりと識得れば萬法歸一亦まもらすのくの如なるを佛の
妙道と成就すといふゆゑに成道といふまた佛の知見と開ともいふまた目なしおなる人と

もいふ

○ 爰に西の國の大名身まのりける今端のとき申されけるは我死してのち種々の佛事をもつと
むべのらす紫野の一体禪師と請じて引導と頼み申せこれよりはのに望みなしとて死たりけ
る人まなげ御遺言なればとて急ぎ都へ使者とたて一体と請しける一体折節在庵にて易さと
なりとてのの使者とくもにうち連て下り給ふ既に葬送の日限はまりしるば音に聞へし紫野
の一体和向こそ此國の某の御引導の爲とて御下向ありしとて國々より聞得るの人
是と空にまよふて貴賤くんじゆし御引導と聽聞せむとぞひしめさける葬禮の儀式天おは花と

ふらし地には錦と散て其よそはひ詞にのべがたく其日になれば數萬の見物の一體の引導と
ぞ聞べけれどおしあひへしあひける授玉のこしとらさすへければ一体立出たまひ極の前に一
黙し給ふ諸人すはや今やくと耳そばたてゐるに一言ともいひたまはず天を仰ぎ山とくいの
とひらき地と見て口とふさぎて其まゝすつと退き給ふ彼大名の御れん中きん達とはじめ一門
家來のともがらまでははいのなる御事やらんせめては一句としめし給はれと御心の袖にそが
りつゝ諸人の見物も興とさましければ一首の歌とよみとさ都とさして上りたまふ人々是非
くその歌と見れば

我はたゞ後世のおしへとしらぬなり

あらんの二字のあるにまのせて

とありあれば皆人これとさしてあともうんともいはれざる御僧のなと點して感じあへりしと

電

○ 又一休坊へ御下向のとき淀の河瀬舟お乗たまひけるに乗合ふ山伏ありける御坊は何宗ぞと問
ふ一休われは禪宗なりと答られければ禪宗には我等がときさきとくあらしとといひける一休申
さるいはいにもさきとく多し其方に何にてもさきとくあらば見せたまへと仰られければいで我
等が法力にて此船のへさきに不動といのり出して御目にのけんとして一にのんがう二にせい
らとひじめてもるにもんで祈りければ皆のり合のものとも目とめを見合ふるところにあん
のとく舟のへさきにたちまち不動の像火ぬんとはなつてあらはれたる其時山伏おうめんよ作
りかのかみ玉ふのと申ければ皆人ふしぎの思ひとなしければ共一休はさらにふしぎにも

ましまさぬふりなりいらに禪僧のゐるさといは如何はし給はんとせぐりのけて申ければ我等が奇徳には身より水と出してあの火焰とはなと不動尊とけして見せん隨分ののり給ひてあの不動の傷の火ぬんに小便とした、かしのけ給へば火焰はそのまゝきながら山伏の法力のきければ皆人一倍と拜禮して奇異のわもひとなしける也さて舟より上り陸路とらつれ行處にひのひよりなるほど大なる犬の山河にもひくばりのに渡へるゝりければ山伏申やういらに御坊ささの行くらべにこそまけたりともあのねそろしき犬のいのりと止めた、今是へよび奇る法カとあらはさん御僧はいらにと申ける一休是はいと安きとなりまづ祈て見給へとのたまへば山伏大いらたの赤木の珠敷とさなりくとしもんで一のりこそいのりける一切犬ははへやます手元へ來るぬんもなりのりければたつさまやよこさまのけて十文字犬のゝんせゝめよわびらうけんそわゝといへせもいぬのはへやます一休とをしく思しめしそのき給へ某はをればその事にあびらうけんせそわか人も人事にのあらずあのいぬのいのりと止めたまちこれへ來らせんとふところより遊飯のやさめしとどりいだしかの犬に一目見せてころくくとのたまへはさしもいぬれる犬みれどもやさめし一目見てくんくとて尻とふり來りければ山伏もさもとけま音もさても格別なる心得のなと感せぬものこそなりのりける

○觀見法界草木國土悉皆成佛

いふ心は釋迦目なしとのなりと得て天地萬法は觀見ごとくくみる目なしとのなりと説

玉ふ

○草木さへ佛かなるとなれば人間はいふにかよはずむろし昔あつた釋迦阿彌陀もみな佛ぞや

といふたじたがうこそつゝのれたとのふ

いふ心は釋迦目なしの事と人々にしるせんとていはれたれたも見聞の人其心としらずして言葉のざりばのりと取によつて一言葉も目なしとのにいひあてられれば皆うそ也又

○うとふもまふものりの聲

さればとて詞とひとへにさらふにもあらず風のごる水のねとまても皆めあしてあらはすそのとばにてなせ別ならん其外身にふれ目に見耳にきくなどの事天地日月うみ山にいたるまで一つとして法の聲なきものなしゆゑにうたふも法のこゑとなり

○柳はみとり花はくれなる

いふ心は目なしとのひとりにて能それく品々に別るゝなり自由なるわざなりしむわのらずして一めんならば目なしとはせじ善惡をくしてよく善惡をわのち萬もとのにはなれ

○あられもしろの春のけしきやく

目なしとの、けしきおもしろきとなり

○本來生死とはなれたる身なれば來る處もなし去處もあらし三世不可得なり

三世とは心のいまだおこらぬ所と未來といふおこつた心と現世といふなくあつた心と過去といふ是と三世といふ不可得とは文字に得べからずとよむ心の一ツかくらぬ先と見る

に何ともしられ又おこた心もかこらぬ先の心と同じ事ありた、三心ともにしられぬ心也是
と不可得といふあり云心は三世ともにしるともしられぬとも何とも思ひはあらぬ不可得の
こゝろのあらぬ心なり是と目なしといふあり三世たゞ一心と成がゆゑに生死もなく本
來今もろく来る所もなく去所もなし

○混濁のいつくともなく出ぬれば
混濁とは天地いまだわのらざるるときなり是則混濁の心胸なり此ねともつて平常つらひ用
るなり是とこんどんのいつくともなくいつるといふなり

○父母未生いぜん本來もなくゆめく佛法とやらんいふ事もしらす何にならんとあんずべの
らすたゞ何ごともしらぬ心が佛ありその佛といふものは有にもあらず無にもあらずさとり
ぬれば有ともなしとも知らぬ事あり一切八万余經と見るに佛とならん心のすこしもなしと
ろく古曆あそ、同じ事なり

いふ所のこんどんの一步と得れば未生已前本來もなく夢々佛法といふ事もしらすたゞや
すらのにしてひとりしづのなり爰にいたりて一代藏經と見るにせなればこの日記なり

○へにふる曆あそ、同じ事と、きたまふなり
愛に 一休和尚の末期の句とて世の人の口にまのせけるはその多し是が實なり是の虚なりと
いふも不實なりいのにとならば彼も御影と書付て賛ともとめこれも賛ともとむは其賛あは出
るまゝにめそはしけるとなりある處の御影の賛に

藤々 淡々 六十年
未期 希冀 禪梵 天
返借 用申 申 昨月 昨日
借置 五つ のもの と 四つ のへし
本來 空に いまそ もと づく

又ある末期とやらんに遊しけるとて人のいへるは
生也 死也
柳はみどり 花はくれなひ

柳 不緑 花 不紅 御用心 一休題
○又ある人一休の御寺へ用事ありて参りけるが或夜沙彌小喝食とこまづきて一休の御遺言と
もとおのみ侍しに一々名譽と極めたる事をも多ありし中にも自畫自賛の御影と拜し侍りし
にどうべはいのにも長髪にして眼とさつと見出しうす赤き衣とめし丸竹の柱杖とつさいそ
にこしとのけ侍りし賛に

折行 柳は 緑花は 紅
主脚 事畢 是今 日時 節
丈事 子一 鏡二 六月 雪一

虚堂之再来 天下老和尙 一休宗純 末期書之

○又ある舊家に所持せる自書自賛と拜見せしに是は鯉川村の艸庵に居ませし頃には是も髮長くましまし卓にのり給ふ山居の御影なり

山居翁 聽松風
不 德山 禪
一 住 三 年
公 工 夫 了 畢 後
松 案 籠 住 山 三 十 年
長 風 賦 記 罷 參 眼

畫與詩一筆 印

一休題

とぞ有ける見る目もすましくて身の毛もよたつ事

○はしなふて雲のそらへはあゝるとも

ぐどんの經とたのまれやせん

さやうと見て其よしあしとりぬれば

せんあくどもにあくにこそなれ

○しやうといふいたづらものが世に出て

多のひととまよはするらな

人のみなだらりとのみたくらゐ

○是は是非は非にしてかき生は生死は死花は花水は水草は草土は土

千境万物名とのへたるちとあらため出きたるといへども頭々常體是にして是のだらりなり故に生は生死は死花は花水は水草はくさ土の土にしてのつらさけしはさるもあぢは

ひあらばこれ佛になる人なるべし一休和尙は何にもならぬ人なるが故に是は是非のひと

説給ふなり是人々生れつきの平常左右のところなり一休和尙のりにもさる事ならぬ

のとくあらざるものありやしりぞひて我常と返照して見てさらけうたがふ事ならぬ

○あめあられ雪やこほりとへたつれば

あつればおなじ谷川の水

あめあられ雪やこほりとるのまゝに

水としるこそとくるなりけり

○我はは何ものぞとづちやうよりしるまでさぐるべしさぐるどもさぐられぬ處は我なり我と

は迷ひの身心といふなりさぐるとは此身心は何ものぞと根源とさぐりさはむるといふあ

りづてうとは上諸佛なりしりとは下衆生世界なりよくさぐりてみればさぐるぬ先には色

身のありとも無ともしらすたゝさのされるとの如くなりそこにあつしつめたしと直に

境に應じ事と辯えてみぢんばありもさまたげなし是さぐられぬ處也それが則平常の身心

本性の我なりとしる是と名付て目あしとのといふ也此故にさぐられぬ處ありといひ玉ふ

なり元より色身の身にもあらずたとへば色身は樹の根あり萬法は枝葉なり本たつて末あ

い百七十六
 らすといふとなしゆゑに先色身といふなり心經にいばく色即是空空即是色受相行識亦腹
 如是云々色とは色身なり空とは本智なり即とは其まなり受相行識 幼心也いふ心は身
 心とも其ま、取もなほさす本智なりと説玉ふ古人是と心經の要路といふ也是即ちさぐ
 るともさぐられぬこゝろは我なりといふ語と同一言あり

○心のいふるものといふやらん

すみ絵にのさし松風の音

ふたつなきものとなりぬて一もなし

すみ絵の前せのさてもすしし

死ぬれば空としてあるやらん

またぼろ／＼としてなきやらん

死ぬればとは誠は死るにはあらず目なしとのにあへば萬なごとと思ふと色のたち

音聲さく／＼皆目なしとのゝわざにて少も必あきなり心なきが故に死るいふ也

目なしによく成得れば愛もなしとも皆目なしにて分て目あしどもふべき方もなし

ゆゑに有やらん無やらんといふなりいつこうにしらぬ事にていふにはあらず

○ありのみもなしとひとつのこのみにてくうにふたつのあじはひりなし

ありなしとなに名とのへて思ふらん見ればひとつこののみなりけり

○おのれさへあつさはらぬ不動めがあくまのうつく無川なりけり

あやまりてふせうとよきとおもふなよ其心こそあくまとはなれ

○なきあどのた見に石があるならば五りんのだにちやうすきれりし

人はたゞ五たい五りんに化さる、五つゝとまりてかんのみにせよ

○朝つものはさゑのこりても有ぬべしたれこの世にのこりはつべし

いなづまのうげにさきたつ身とすればいま見る我にあふ事もなし

○はらぬ井にたまらぬ水の流たちてうげもあたまもなき人ぞくむ

うそこのさうそとしらざるうそこそこのれとまことのあるまことと

○目には見て手にはとられぬ月のうちのうつらのごとき君にぞありける

それは得ずとぎてはやきは矢のとくひきのへし見よもみはりの月

○萬法と見る人ことこのどおわきおもひて水と一くちにのむ

四つのうみやたゞ一口にのみつくし今ぞしらすものとおじはひ

○釋加さんらいの處にまらせして佛になるといふしるしなく不明なり死すれば我もなし

人もなししやのみだも見ればもとは人の性とうけつく地獄にぞ入

さんらいとはいろ／＼の法と立さま／＼の行法 戒行などそる事も死すれば悟は悟は

といふ事もゆるに我もなし人もなしとなりいふ心はさとりて後さんらいの法とければそ

てもない事なり釋加彌陀もゝとはよく目なしとのに成得ずしている／＼のさんらいとし

て地をくわいるといふたりた、人々に文字とどり苦行をさせまじきがためかくいひた

まふなり

○夜もすがら佛の道とたつぬればわが心にそたづね入ぬる

いふまればたづね〜てとく山の道なきあたに安くゐるらん

○ともひいれは人もわが身も余處ならずこのほかにこゝろなければ

あへりつ、また立かへりよく見ればおもふこゝろもそのこゝろな

○心とてげにもこゝろはなきものさとしは何のさとりなるならん

さとらぬもさとりも同じまよひなりさとらぬさきとさとりとぞいふ

○何事もむなしき夢ときく物とさめぬこゝろとあけさつるゐる

さめぬればさめぬさきとさめつるにさめぬこゝろのなゆめならむ

○わが法といはでもいらぬ春のはるもひらさてちりてつちどころなれ

春くればささちる花もとくのりときとぬは人のあるもゑぞのし

此本歌は文の終の言葉なり佛の常樂我淨とよめり是一巻の流通なり我とは我淨なり法と

は常樂あり歌のこゝろはこゝろもあしこも我法なるゆゑにいはでもいらぬとなり春のはな

のひらくもちるもつちとあるも皆常樂現前のとこぞいふなり

○一休の御ころさしとふもひ見るに寒山子の風相にのほる事なし寒山師の詩句に

我心如寒月 秋水清無底

とありしが一休の道歌に

我こゝろそのまゝほとけいきはとけ

なみとはなれて水のあらばや

とよませたまふこれ寒山子の詩の心なり寒山は文珠なりといひ傳へしが一休は定めて普賢な

るべしされけは雲集に其詩文多しといへどもたゝの人の目には見へぬとにへみて其中より金
つんぼの耳へも入やと詩と書ぬさ旨の目にも見あきらむべきひらのなにてしはりつゝ子供
にも覺へさせ大人にも未だしらぬ人に見せ侍らんとたこととるへりみす仄平とわきまへず
人の書わやまるともつてわがわやまるとと我わやまるとも苦しうらすくなん出しぬ

一休和尚狂詩二十首

欲 往 昔 問	無 今 日 箋	全 元 來 牀	顯 世 不 筆	題 叩 笠	題 鉢 鉢	東 西 南 北 自 由 身
欲 往 昔 問	無 今 日 箋	全 元 來 牀	顯 世 不 筆	題 叩 笠	題 鉢 鉢	東 西 南 北 自 由 身
風 橫 江 梅 法 笠 岸	斜 南 法 笠 岸	明 物 影 罷 分	夜 有 法 不 離 師	何 不 何 不 益	起 揚 手 居 同 動 靜 似 侮 人	花 發 十 方 淨 土 春
疎 沒 師 又 欲 岸	疎 沒 師 又 欲 岸	無 不 法 有 夜	何 不 何 不 益	起 揚 手 居 同 動 靜 似 侮 人	花 發 十 方 淨 土 春	結 餘 句 食 貧 乏 雨 晴 稀
疎 沒 師 又 欲 岸	疎 沒 師 又 欲 岸	無 不 法 有 夜	何 不 何 不 益	起 揚 手 居 同 動 靜 似 侮 人	花 發 十 方 淨 土 春	結 餘 句 食 貧 乏 雨 晴 稀
影 落 時	無 開 鉢 秋	面 離 師 身	何 不 何 不 益	起 揚 手 居 同 動 靜 似 侮 人	花 發 十 方 淨 土 春	伊 起 勢 壺 底 暗 絨 眉
影 落 時	無 開 鉢 秋	面 離 師 身	何 不 何 不 益	起 揚 手 居 同 動 靜 似 侮 人	花 發 十 方 淨 土 春	伊 起 勢 壺 底 暗 絨 眉

秋身 風手 一有 谷恨 合入 戰島 補守	又本 有眞 假白 島茲 能之 登壇 守浦	佛菩 無提 煩贊 物地 思染 出青 事々	平大 生黒 贊愛 天大 其黒 面合 諸人 信仰 無置 用柵	萬汝 民是 不桑 願阿 陀何 佛字 不救 我無 一願	手看 中番 經忽 卷忘 七 佛 師 雲環 霧 人 少 年 艶 詩
--	--	--	--	--	---

我 是 其 黒
何 面
事 合
足 諸
下 人
米 信
殘 仰
無 置
用 柵

睡裏 乾 坤
寐 寤 恆 一

無若 酒衆 貧無 兒茶 文又 珠無 研貴	木少 石年 無十 心五 多月 世如 上出	若紅 有顔 貧緑 僧髮 博冠 惑沙 志喝	一元 切來 寄衆 生口 人迷 三途 所無	入一 道生 女修 行衆 淫若 時焦 事身	夜獨 深臥 男依 被食 根半 患 風幾 食千
--	--	--	--	--	---

山摺
僧切
風爭
流可
只入
文御
字意

鳴一
呼笑
是紅
此顔
玉花
環似
哉開

家况
前忘
吹御
味年
致十
推二
參三

十百
方億
諸毛
佛頭
出擁
身九
門痕

須八
更寸
老推
去根
革尙
頭勝
巾人

天余
至三
曉貧
鐘極
未作
誰誰
作誰
眠憐

長江不洗英源氏兵
平家運盡出堅城
日下風濤戰鼓聲
い百八十二

源九郎流弓矢者
天如下英雄在毅中
恰如初月掛晴空
忽々仲左臂取來致者

熊谷十谷招於兒盛
命碎球回馬時
然虛室念彌陀
生年同六美此發

功名如雲四字上
東國諸將各爭先
馬化龍何若鞭
佐々木四郎治川先陣
阿彌陀佛とれり則ち去此不遠まよへり逢のにしふこそあれ

○三寶に歸依する世々のへめしみよこく土あんとん土民福樂
○一心にまことの道にいる人のろの行そへは子孫はんじよう
○公家武家のぼだい信する手本にのたたり大臣多田の満仲
○道おいるすえはんしやうの例には藤氏源氏の家おみてしれ
○せんぢやうは忠孝しとせんせいはいげにたぐひなきわらさもものれ
○ものゝふのとんせい修行手本として西行法師さてはくまがへ
○今も又十緇八素の友がなしろさんのむろしどもはれろそる
○とんせいは不遇の人はさもあらめ名とげてぼだい入はうとんげ
○大唐の如福禪師と樂天はとも念佛座禪とろさく
○熊谷がとんせいしゆ行功徳みよとんしん平等自他の成佛
○四大五滯みなくうにして申こそまことの念佛座禪とそいふ
○家にあり不忠不孝のともがらはとんせい修行あやしりける
○成佛は異國本朝もるともに宗にはよらす心にぞよる
○とや主に忠や孝ある人々は家にありてもぼだいたのもし
○萬法の行はよろずの事あればこゝろに道とつとめよ
○世とのがれ修行の道は別でなし智者愚者ともに座禪念佛
○貴賤知愚僧俗男女別あれぼだいの道はひとつ事なり
○佛説はぼだいなねはんの真理にて二世安樂のとしへなりけり

一休和尚往生道歌百首として
阿彌陀佛とれり則ち去此不遠まよへり逢のにしふこそあれ
○三國の法いしなく多けれせしやのとしへにまされるぞなき
○儒釋道三ツのとしへの別なれず善に善報あくに悪報
○むろしより知恵ある人の佛道は二世あんならくのとしへとぞなる
○三ごくの世々のらしこき君臣にしやのとしへと仰がぬはなし

- 善修すればあく事きたると恨なよ先世させがう即爲消めつ
- 皆人のねはん常樂しらすして生死無常となげあはれさ
- 佛だに定業のがれ結はねはやくいしぐはのむくふ幸
- 佛姓は不生不滅の物あればまよへば生死流轉とぞしれ
- 何事も定業なりといふ人もまことのときはとどろきぞする
- 佛道にさとれといふは何事ぞいんぐはやだいで得とくする也
- よの常に工夫觀念つとめなはまとのとき心に心うこのじ
- 知思あるは若も道とつとむるに老てほだいとしらぬおろのさ
- 人はたゞ平生志願なりせば修業家もいゝあるへき
- 何事もせんせのうといふ人のほだいつとめぬこしぞ猶ぐち
- 我等今悲願所誓ととるとみて有爲の法とてそしる佛や
- ふくどくはねがふに來るわさわいのつしむるに人ぬとぞさく
- 一さいの諸ぶのぼさつもひぐはんよりほだいなはんの成就し玉ふ
- 一念の中よりまよふ雲こりりんる永劫やみぢとぞなる
- つらくとめうりもとむる人みればじひある人は佛ならまし
- 神佛みつのとしなとく人の何れの道もいらぬあさまし
- 一念のじひ眞實をたねとなる九品のれんずひらけこそそれ
- よの人のるんぐはほだいなとしらすして五ぎやくのつみをつくるあはれさ

- 戒たもちざせんねんぶつつとめつとじひある人は佛ならまし
- 比丘の其身のつし扱おきぬ人の道心やふるうらめし
- 常來の三曾のけるの花もやた現世のじひぞたねとならまし
- 世中に我ろさると自慢して名利もとむる人のねはさよ
- 正法の花ぞの山の草や木とむろしのはるとあすよしものな
- 名と利とよとむるとのくげんやな人にならばれさいあつのはれ
- 今とても天地のみちのあらねばまつせのわれらほだい頼もし
- 財寶は身のあたなりと聞ながらなほももとむる心のなさ
- 釋加も又あみだもとは人ををしわれもあたちは人はあらずや
- あくねんはおてりやそくてじひしんはあてしおたさぞものうらりける
- 道はたゞせけんせ外のとどもにじひしんじつの人にたつねよ
- こくらくもぢこくもわれにあるなればあくねんおこるこゝろせいせよ
- わが氣にいたとひ入ざる事なりと人のいさめと用ひしたがへ
- 人の非はしり安ければたのが非は智者もしることあたさと聞
- なにとも人のこゝろにさるふこそ世法佛法さわりなりけり
- 身と入て鳥けだものと救ひしは釋迦のいんちの修行なりけり
- 眞佛は有さり無相にあらはらず四相なきこそむさう成けり
- ぼんのふとそくほだいなとなすといねん廻向そのうちにあり

- 賣僧して物どりくるふ沙門こそこれぞごくのすところなれ
- 本來のむしん無さうの佛とも五よくにのれほんぶとぞなる
- くわれいなる沙門とみれば皆人のめうがしやなりといふぞおのしき
- 跡ありてほんぶこゝろのなりのせは本らいくらのむさう眞佛
- いまどきの僧は中俗よりいんくはぢたいとしらぬ佛たう
- 戒たもち座禪念佛つときてもこゝろわしきの造地獄のち
- 儒佛道おしぬはたとひ得せずとも生死大事とおもへ人
- 物事に執着せざる心こそ無さう無心の無住なりけり
- 皆人におしへの道にさのせなば本來空にのへりこそこれ
- みな人のとんじんぐちの黒水は三づの川のながれとぞなる
- 生は寄死は歸るぞといふ事はふるさふなにもおほくみへけり
- 六根につくるさいくはのちのはとり四手の山路の高根とぞなる
- たひはたうき物なるにふる里のうちにのへるといふはのなる
- 極樂の月まつ夜半の念佛はくもさりはるふ秋のにし風
- 障なく來空あへるころこれや西方往生としれ
- 老の身の月日とくる所作はたゞ香花にそくじゆ坐禪念佛
- 西方の本來空に往生しむりやう壽佛とあるぞめでたき
- 口は口に身の行ひのあらざればわが心にものぢられぞする

- わが禪はおしぬの外の宗なるに往生要歌よむもれのしき
- わが禪にさらふべき法あらざればこゝろのうちに一ものもなし
- いにしへのちしきのかしへじみとのみいまはなにとてがまんけんせん
- 文やはたうりいたいけ夫人極樂へこれを佛のわうぎせつはう
- 佛生は四大如がうの體なるに五欲のちりといふ引けん
- 佛乘ともち辨僧やわる知識世わたるせのとするとかあしき
- 妙にして神あるものはこゝろ哉天地にわたりみじんおもいる
- 不後にしてあつめたくわふさい寶のつもりてのちは二世の身のあだ
- 心より四聖六凡いでぬるに何とてあだしゆがうは作るぞ
- 名と利とにあらざる心引のくてまどつくさば二世は安らく
- 何とも今日の觀樂すぎぬれば明日のかならずくげんとぞなる
- 書寫寺の僕のころもの風どりむらしの御僧今はこひしき
- 現在の苦修善行を種となるならす來世安樂のはれ
- としくなる道は世界に事多したゞしん寶に慈悲とたすねよ
- 罪障の露霜ふらさ身にもたゞ座禪念佛題目ぞよき
- まつしまやみなみの海も極樂の池水と同じ法の陸奥
- 十方は唯一心の淨土なれ衆生もつとめ己身彌阿佛

已上

眞珠菴は末代まで出世さへおらさずと仰られ和尙自の一代も出世はましまさずりければも出世の法語さると名譽なると書留給ふ和尙號は贈號あり自のたまふの虚堂の再來なりと其外ふしぎなる事と書れ給ふ事多し又遺言のおくに我死て百年そぎて唐土より禪師きたらば我再來とおへまた二百年にあたる事我死骸と土よりほり出し見るべしもしのたち朽たればいひ置し中は皆たはととねもひて火中すべし大のたは死がいはそことまじとのたまひしとなり然るに百余年にして隠元來朝ありこれ相違なき隠元和尙は一休和尙の再なるべししおらば御死骸とても定てのわり給ふ事あるまなきあり又今の御木像は、るののちの作物にて諸旦那あるひは弟子衆まで一休和尙の御そり髪と守袋に納もちけるがの御像と作り奉るとき御長髮の體なればとて直の御髮と御眉御髪にいたるまで佛上の桶けるとなりさても剃髪とそゑの代の我と拜し奉る事有のたのらすやさてのく集めぬるに昔の人の書談るも聞たがへるも有べけれども今またつたなき筆に記したれば猶あやまる事も多らめこはわがふるなる故ぞのしゆるし給へ必しも古人とろしり給ふべからず此書は兒童がひる寐の物とあし給は、とのづら耳底のすともあらばめしきのすにもあらざらめぬくいふれろるる我も筆記せるまに、にされる心のちりさへひとつ二つは吹ひらひ一休和尙のものと成ともどおもふがまゝに

鬼の目になみたは何の涙なる。ぢぢぢの釜の下がくすぶる
 みのけた、力こぶしに實と入て。地獄の鬼にまけて歸るあ

源平田止 水居士 基定補正 輯

二 休諸國物語畢

一 休諸國物語拾遺

新村酬恩庵の事

○一休和尙いまだ若くましませしとき山城御見物のため大徳寺と立出たまひ前山城たさいといへるにいたり、ひしに古き寺一ヶ寺あり寺號酬恩庵と申しぬされども此寺久しく絶て住べき僧も無ければかのづら野干の住家となりてふるさつ昔の壁と閉ぢむぐらは軒と、はひとつ、物そさまじき有さまなり所のものども集り申けるは、くまであれば候はた、住へきといへる僧のなきもゑなりしあるべき僧もあらばまねき此寺へすゑ申度と彼やこれやと所のもの、つとひ来り申ければ和尙つく、と思し召さても風景といひいにもとしき寺なり我にあたへなば住あやすべしとのたまへば里人言葉とるるえ是まで住べきと云る僧達六七人もいろ、としてそゑ候得とも或は夜のまに身まのりまたの行衛もなくあり種々のあやしき事はあり多ければいよ、里人とても晝だに行ふ事あくわれつて、候どのたりければ一休つふさに聞て苦しうらすいにも我住おほそべしあたへよとぞ仰ければ人里ども口々にわらさぬ僧のいらざる事といひける中にもいや、禪僧は若きとて年によるべき事にはあらずといへる者もありければしおらば貴僧にまのそべしとみな、申ければるこのしこと御覽ありいゝさましれもの、住とて思ふるぞとてやがて出たまで在所のものどもこれとさいていよ、これまであやしき事の次第とのこらす申上さま、制しと、め申せどもた、我にまのせよとのみ仰たまひた、ひとりそと、と荒はてたる古寺のまはらなるに其夜のそなる燈灯とのみ便にて夜のふけ行とまらたまふそでに子の刻はうりとおぼしきとき寺のうち震動していなびりぞ

さまじく鳴らみるとき音して年の程は二八ばかりの女いらにも容顔美麗のすがたにて忽然と
 めらはれて一休の所へは近て歩行よるそのとき和尚すこしも騒きたまはず大のた心得たるぞ
 そこと去よとのたまへばわどなく消うせぬしはちくありて同じ年ころの兒こころはらけと持
 るへ夜さるに候酒とすゝめたてまつらんとたはふれて御うばに近ふあゆみよる一休少しもあ
 きろのせたまはずさいせんのものよ又来るものたまへば是も同じくさへうせぬとのふする
 うちはどなくすでに丑の刻ばかりと覺しき頃寺内ゆるささわき宿ひりますくそさまじく
 てたけ一丈ばかりの法師おもてはわうたんと病ものゝ如きはにて眼は朱とぬりたるの如く
 おうろしきありさまにてひらりく〜と飛めぐり佛壇の下としきりににらみあがめたり一休待
 と御らんじて三度まで来るころあろのなればやく土底へ歸れよへのたまへば早もきさるうせ
 ぬはとみくはの〜と夜もあければ在所のものども大勢がさうひ合の寺へきたりさても
 いる成一休とて定て變化のものにころざれ給はんことのみざんさまと念佛など申て一町バの
 りもへだてゝふるびく〜和尚のあししまその一休坊やわたらせ給ふのとくち〜によばれ
 ばろのとき寺の戸はそとひらき門の外に出たまひければ一度にどつとあんすつしはしはあ
 めもしづまらずさて和尚様とたよりにして皆々寺へ入にける一休のたまひけるのまづ武寺と
 くづし佛壇の下とふらさ三尺の一間四方と堀て見よとのたまへば在所のものども申けるは
 仰にて候得ども此寺の年久しきを承候殊に故ある寺のよし申つたへ候得ばはち申さん事い
 ろのと言葉とらあへて申けれの一休附たまひさはとしく思わば此寺とくづし其あどにい
 なるらんとも我建立すへしと仰ければさらば仰に隨ひ候はんとして人々あつまり寺とくづし

備だんの下と堀て見ればこがねとつめたる三ツまではり出しける其金と一つは地頭へ進
 上しひとつは所のものどもへ取らせたまひ残る金にて善つくし美つくしたる堂塔と建立した
 まひしとあり其時より願恩庵と大徳寺の末寺と定められて此寺に一休和尚住せたまふ事とし
 久しかりける今の世にいたるまで一休和尚の御隠居の寺と申はやしがるによつて御眞跡しんせき盤佛
 靈寶あまた有ける山城大和奈良までも眼下に見はたし絶景諸人の目とおどろかし好士のもの
 遠きともいとはず歩とはこび春のはる秋のもみちあるひは松茸がりなとて群となしけるよ
 のや

地獄の問答の事

○一休のひのくに、しばらく御逗留のうちに地獄をいなる高山あり古跡も又多ければ一見の
 ために立出たまひけると所の地頭かねて常話よき事とさし直に聞まはしくわざとわづかの供
 まはりにてしらぬ林にて近く行むのひるれなる法師よ地獄極樂はいらにと問ひければ一休ま
 なこに角とたてゝ糞とくらへとのたまひければ地頭もつての外に腹とたてにくき坊主の悪口
 のなものはいはせろいましめよと下知すればらしこまつて若黨ども走りよつてさんく〜に打
 すへ高たか手て小手こてにいましめければ一休自若として地頭にむのん是こそ地獄よとのたまへば地頭
 心つきあはてゝ馬より飛下り手づらら一休のいましめとさきてさても有がたき御教化のなと
 禮拜し則わが乗たる馬に一休とのせまぬらせ私宅へともあひ歸り種々の珍味とるるへ朝夕
 ばと離れず馳走いたさるれば一休これころまとの極樂なりとのたまひけるとや

文字御願作の事

○一休和尚御養生のためとて常に粥とまわりけるところへ長谷川與吉とて小ざらしき男奉りおはせて御相伴いたしさて、和尙さまへ此のゆに付て御尊申上たさは此のゆと申す文字は兩わきに弓と書き申し米といふ文字と書き申すは子細これ候わめ我等ふしん至極にぞんじしものひと申ものは水の中へ米と入れしるくやはなるに焚たるよのまを申なればさんすいは米とあるひは食篇に湯なとて、こる書べきものにて侍るにいななる子細にてのやうに書申やらんと尋ければ和尙こたへて言く此字は子細こそけれ昔大唐に神農伏魔とて聖王おはしけり其頃迄はいまだ文字定まらず米食ふの文字はあれとも粥といふ字なりしと伏魔神農其外あまれ賜賢たちと集めて米とホの中へ入れしるくやはらるに焚てもちれば腹中とのひて消しやそきものあれとも此文字いまだ定まらずいなに遣るべきやと有ければ何れもあたまとのふけさまくと思案し玉へとも思ひ出し給はねば案じわつらひて先づのものと焚て人々にすめ玉ひけりされとも誰あつて思ひ出し給はざれば神農うつはもの、上に箸とらりと置せ給へば弓のやうに楯の上に箸とのせたる形の如くに見えたりさてこるとて雨わきに弓と書て中に米と書なりとこたへ給ふ與吉手と拍て申けるは天晴御とんさくにてましますいなさまおあさき事にては候まじ何れ御たつね申上でもらちあけ給ふ御事とて阿々と笑ひけりされば此おのしきにつけて又不審こそいへ只今のとくわらふといふ字と竹冠に犬と書こゝ心得申さすわらふといふ文字口篇にひろがるどの目篇に鐵など、社書べき物にて侍らぬ竹のむりに犬といふ字はいのなる子細にて書申しぞと尋ければ一休聞しめして仰けるには是ものゆと一度に作られたり笑といふ字とたくまんとしてあまた聖賢あらび居給ふ處へ小き犬のしらは龍とのより

ておせけ狂ければ人々一度にぞつと笑ひ給ふ其故にこそ右のとふりのく也とのたまひけりいなさまいはれと承はればおもしろさ御事なるといふんじける處と和尙みそましたりと思し召物体文字といふもの、一とよく題とせめたるものにてござるぞ日用にみな、書ねのならぬ金といふ文字は中にもよく作りたる文字にて觀音經の中にも金銀琉璃車琰など、七ツの寶といひならべし第一番に金銀といふてある其金銀なれとも持べき人がもたねば寶とはならぬ依て人といふ字の下に主といふ字とらきて金といふ字に讀そ何とようしたるものではないかと仰ければ成程といひながら此男も何のなぞんとつきたく思ひて和尙さま御尤の仰ながら草行てらけとさはいのにも人の主といへとも眞字で書ますと金のやうにのさまそれは主といふ字とは少しちがふやうに存ますが、いふと申ければされば其不審はなくて叶はぬところそこが第一の意のつけどころよ一日もなくてはあらぬ大切の金なれどもしんでは身につのす入らぬものよと仰られければ扱も、淺はるなる御たづねと上申一生の寶と得たることにて悦びてこそ歸けれ

天狗問答の事

○一休常陸の國のしませの宮居一見のため參詣なされけりすでに御社ちのく歩み給ふにしけりたる森の木陰より何ものとも知れず丈七尺あまりの山伏つと出來り和尙にひのふて佛法はいるにど問ひのければ胸ありと答給ふさらば割て見んとて氷の如くなる刀とぬきて心もとたさしめてけるに一休をこしもさわき給はず

春とにさくや吉野の山ざくら